

カー、ジョン、ニコル

提出シ千八百四十三年六月三十日ヲ以テ三ヶ月之ヲ提出スト雖也常ニ執政官ノ駁撃ヲ被テ敗ルルコトナリシニ於テ千八百四十年二月二十七日下院ハ出納検査官ノ職ヲ退クニ方テ年金ヲ受ケタルカー、ジョン、ニコルトノ件ヲ論議ス此職ハ制定法ニ因リ善行間占保スルヲ得可キ者ニシテ全ク王室ヨリ獨立シ占保者之ヲ去ルニ方テ年金ヲ受ク可キ者ニ非ス氏ノ之ニ居リシハ僅々五年ニ過キサルノミカ其以前久シク政府ニ仕ヘテ諸職ヲ占ムト雖也皆テ退隱料ヲ受ク可キ性質ノ者ニ非ス然レド政府ハカー、ジョン、多年ノ勤勞ニ報ヒント欲シ其検査官ノ職ヲ退クニ方テ毎歲一千磅ノ年金ヲ陛下ノ恩給資金ヨリ給與スルコトヲ決ス恩給資金ハ學術其他ノ發明者並ニ格段ナル

先例

勤勞ヲ王室若クハ國家ニ效セル者ニ陛下ノ恩惠ヲ與ハシカ爲メ御前シテ第二種ニ號ニ號ノ制定法ヲ以テ別置セル者ナリ下院ハ之ヲ聞テ數個ノ決議案ヲ提出ス曰クカー、ジョン、ニコルトノ占保セル地位ハ王室ヨリ年金ヲ受ク可ラサル者ナリ曰ク他種類ノ功績ヲ賞セシカ爲メニ別置セル資金ヨリ政治上ノ勤勞ニ報ユ可キ年金ヲ支出スルニ及官ノ年金ニ係ル議院ノ精神ト企圖トニ背戻ス曰ク此等ノ理由アルカ故當院ハ斷然該年金ハ先例ト以テ證據ト可クサル者ナルトヲ明言スルヲ便宜トスト執政官ハカー、ジョン、ニコルトノ勤勞ノ性質價直ヲ説キ又修正説ヲ起シ曰ク斯ク一種特異ナル情狀ニ於テ退職出納検査官ニ許與セル年金ハ先例トシテ證據ト

養老賜金

ル可ヤト下院ハ執政官ノ説明陳謝ヲ以テ満足セテ修正
 説ヲ拒絕シ二十八名ノ多數ニ因テ元ノ決議案ヲ通過セ
 千八百四十年ニ退職官吏アリ下院ニ請願書ヲ呈シテ其
 養老賜金ノ不足ヲ訴ヘ又一層多額ノ賜金ヲ受ク可キ權
 理アル旨ヲ陳フ是ニ於テ此請願書ヲ委員ニ附ス可キト
 ノ動議出テタルニ出納院長之ヲ駁シテ曰ク當院若シ官
 吏ノ退隱料ニ干涉セバ其弊害擧テ言フ可ラサル者アラ
 ヲト動議ハ否決セラル
 千八百四十四年三月二十六日奏議ニ上テ故ドクトル、モ
 リソンノ遺族ニ扶助金ヲ賜與セラレヨトテ請フ可キト
 ノ動議ヲ下院ニ起セル者アリ蓋シ共ニ死去セル氏ト其

ドクトル、モ
 リソン

「インソルヴェ
 ント、デットル
 ス」裁判所ノ
 官吏

長子トシテ支那ニ於ケル勤勞ニ酬キント欲スルナリ大宰
 相サキ口ハカト、ヒト其之ニ答テ曰クモリソンノ父子ノ國
 家ニ效セル勤勞實ニ少ナカラスト雖モ文官年金規則ハ其
 親族ニ及フヲ得ス故ニ政府モ之ヲ如何ニスル能ハサル
 ナリ且ツ官ヲ行政府ノ事ニ干涉スルノミナラス併セテ
 君主ノ特權ニ干涉スルニ先例ヲ置クハ當院ノ特ニ省慮
 セサル可ラサル所ナリト是ニ於テ動議者自ラ其説ヲ引
 千八百六十三年四月八日下院ハ昨六十一年ヲ以テ實施
 セル分産律ヲ爲メニ其利益ヲ害セラレタル舊「インソル
 ヴェント、デットル」裁判所ナル者ヲ審理スル法院
 其負債ヲ辨償スル能ハズ録事及
 其其他ノ官吏ニ係ル事件ヲ觀察ス此際執政官下院ニ告

喚起ス是ヨリ先キ數々賃銀ノ過少ナルヲ訴テ増加ヲ請
 フト雖ニ海軍省之ヲ容レサルガ故ニ今モ下院ノ一言ヲ
 得テ疾苦救療ノ法ヲ施セシメント欲スルナリ海軍尙書
 ハ謂フ所ノ疾苦ナル者ヲ説破シ且ツ論シテ曰ク當院カ
 公僕ノ報酬ニ係ル政府ノ判斷ニ干涉スルハ常ニ不可ナ
 リ況ンヤ國庫ヨリ賃銀ヲ受クル所ノ者ヲ代表スル議員
 ノ教唆ニ因テ之ニ干涉セント欲スルヲヤト動議ハ放棄
 セラル

税關吏

千八百六十五年四月二十八日委員ヲ撰定シテリダブト
 ルノ商人ヨリ或ル税關吏ノ報酬ノ過少ナルヲ訴ヘタル
 請願書ヲ調査セシム可シトノ動議ヲ下院ニ起セル者ア
 リ出納院長グラットストーン曰ク官吏ニシテ若シ政府ノ

郵便局長

行爲ニ基因セル疾苦ヲ訟難スル者アラハ其處措ヲ當院
 ニ説明スルハ政府ノ職分ナリ當院モ之ヲ委員ニ附シテ
 調査セシムルヲ得可シ然レモ官吏ノ整理ト支給ニ關ス
 ル責任トハ行政府之ヲ負擔セサル可ラス凡シ官吏ノ規
 律ヲ亂リ下院ノ品位ヲ下ス者政府ノ手中ヨリ此職任ヲ
 奪取セント企ツルヨリ大ナルハナシト政府ハ必ス請願
 ノ趣旨ヲ熟察ス可キ由ヲ陳ヘタルカ故動議者モ之ニ滿
 足シテ其說ヲ引ケリ
 千八百六十五年五月十二日一議員下院ニ動議ヲ起シテ
 曰ク郵便局ニ貯蓄銀行ヲ設置セルヨリ諸郵便局長ノ職
 務大ニ増加シタリ故ニ當院ハ其俸給ヲ増加スルヲ以テ
 便宜且ツ適當ト思惟スル旨ヲ明言ス可シト夫藏尙書並

リッツ分産裁
判所ノ主記

出納院長ハ政府ノ目下之カ考察ニ從事シ至當ノ方法
取調中ナルヲ説明シ且ツ政府ハ現行制度ヲ全變スル
ノ見込ナキ由ヲ陳フ動議是ニ於テ引去セラレ
千八百六十五年五月十五日リッツ分産裁判所ノ主記ニ
イテ、エス、ワイルドノ辭職、其後任者ノ任命、及ヒ其在職中
ノ行爲ハ斯ル恩賜ヲ受ク可キ者ニ非ズリシニ、大法官ウ
エストハリーガ之ニ年金ヲ給與スルヲ許可セル所以等
ニ付テ、檢事長ニ質問セラル者アリ翌日政府ハワイルド
ノ辭職ニ關スル書類ヲ下院ニ下附シ越十九日之カ出版
ヲ命ス五月二十三日下院ハ政府特ニ大法官ノ同意ヲ得
テワイルドノ辭職、年金給與、并ニ其後任者ノ任命ニ關ス
ル悉皆ノ情狀ヲ調査ス可キ撰拔委員ヲ命シ次テ議員撰

先例

舉調査委員ヲシテ該委員ヲ指名セシメ通常員五名法律
家二名ヲ以テ組成ス可キヲ決シ大法律家二名ニハ証據
人ヲ檢査シ双方ノ措置ヲ觀察ス可キ權力ヲ與フト雖モ
投票ス可キ權理ヲ與ヘス六月二十二日委員ハ報告書ヲ
呈シ議長ノ命ニ因テ之ヲ該院ノ机上ニ置キ又印行ニ附
ス報告書ニ許多ノ証據ヲ添ヘタル別ニ大法官ヲ非難
セル者ナク唯々其ワイルドニ年金ヲ賜與セルヲ以テ急
遽ニ失シ充分ノ注意ヲ加ヘサル措置ト爲セルノニ委員
ハ又其意見ヲ筆記シテ曰クワイルドノ突然タル退職ト
ベセル(大法官ノ長子)トウエル(ワイルド)ノ後任ヲ命セラ
レタル人)下ノ財錢上ノ取引トニ因テ起レル世上ノ感覺
ハ最も重大ナル嫌疑ヲ招ク可キ者ナリ之ヲ審査スル

公益ノ爲メ大ニ希ハシキ事ナリト七月三日ハント決議
 案ヲ提出シテ曰クウエルナノ任命トレタナード、キドマン
 ドノ辭職此件ハ上院調査委員ヲ設テ之ヲ調査セシメ報
 告書ノ寫本ヲ下院ニ回附セリトニ關スル大法官ノ行爲
 ハ深ク咎斥ス可キ者ニシテ又官吏ノ任免ニ不信用ヲ來
 ス可キ者ナリト蘇國檢事長ハ修正說ヲ起シテ「大法官ハ
 ワイルドニ年金ヲ給與スルニ方テ急速ニ失シ充分ニ注
 意ヲ加ヘザリシヨリ外、別ニ咎ム可キ行爲ナキ」旨ヲ陳ヘ
 又下院ハ法律ヲ制定シテ法官ニ對スル年金給與ヲ限制
 ス可キ旨ヲ陳フ討論未タ始ラサルニ方リゾ「ゾエリト」ハ
 下ノ如キ修正說ヲ提出セリト欲スルゾ「ゾエリト」曰ク
 當院ハ「ゾエリト」身代限裁判所ノ調査委員ノ報告ト之ニ關

先例

スル証跡トチ考察シテウエルチ該裁判所ノ主記ニ任ス
 ルニ方リ不正ノ行爲アリシカ如キヲ見ルト雖此任命
 ニ附テ大法官ヲ咎斥スルチ不可トス又此証跡ト上院ノ
 委員カエドマンドノ辭職ニ係ル情狀ヲ調査シテ得タル
 証跡トハ大法官ノ官吏ニ退隱料ヲ給與スルニ方テ公利
 チ慮ルゾ少ク濫漫ノ慣行アルチ証スルニ足レリ是レ
 當院ノ以テ其高貴ナル官職ノ信用ヲ傷フ可キト思惟ス
 ル所ナリト此修正說ハ未タ公然提出シタル者ニ非ス規
 則ニ從テ提出スルノ後ニ非スハ之ヲ討論スル能ハス
 ト雖此諸議員概チ皆チ之ヲ可トシ原動議者タルハント
 ノ如キモ亦之ヲ可トス是ニ於テ原動議中ノ言語チ「ゾ
 エリト」ノ修正說ニ加フ可シトノ說出テ「ゾエリト」否決セラル

次ニ蘇國檢事長ノ修正説ヲブイヴエリトノ修正説ニ附加
 ス可シトノ説出ツルニ際シ大宰相ロイド、バリーノルスト
 ンハ討議延期ノ議ヲ起ス十四名ノ多數ヲ以テ否決セラ
 ル大宰相ハ乃チブトヴエリーノ修正説ヲ贊成スル旨ヲ陳
 フ蘇國檢事長ノ修正説ハ否決セラレテブトヴエリーノ修
 正説、異議ナク可決セラレ翌四日ロイド、バリーノルスト
 下院ニ告テ曰ク昨日ノ決議ニ由リ大法官ウエストハリー
 ハ辭表ヲ上テ允許ヲ得タリ然レモ公務上ノ便宜ヲ圖リ
 數日間ハ御璽ヲ保管ス可シト大法官ハ翌五日ヲ以テ其
 辭職ヲ上院ニ報告シ且ツ説テ曰ク余ヲシテ已カ判斷ニ
 從フコトヲ得セシメハ始テ攻撃ヲ受クルニ方テ辭職シタ
 ル可シ何トナレハ大璽ノ保管者ハ彈訟セラレタル入

位地ニ居ル可キ者ニ非スト思惟シタレハナリ然レモ余
 ハ大宰相ニ制セラレテ斯ク身ヲ處スル能ハザリキ大宰
 相ノ言ニ曰ク之ヲ以テ大法官身ヲ處スルノ主義ト爲ス
 其ハ大害ヲ醸ス可キ之ヲ爲メ終ニ彈斥スル者ハ皆ナ直
 チニ大法官ヲ其職位ヨリ放逐スルコトヲ得ルニ至ル可レ
 ハナリト爾後余ハ數々辭職ヲ迫ルト雖モロイド、バリー
 ルストンハ常ニ之ヲ聽カス去ル三日下院ニ決議アルコ
 及シテ余ハ復タ瞬時モ其職ニ居ルコトヲ欲セス大宰相モ
 終ニ余カ辭表ヲ認許セラレタリト千八百六十六年ノ會
 期ニ於テ議院ハ法律ヲ議定シ大法官ヲシテ其退職ヲ許
 可スルヲ得可キ悉皆ノ官吏則チ情理裁判所、身代限裁判
 所、癡狂者裁判所、其他悉皆ノ不文律上等裁判所ノ官吏ガ

退職ニ方テ呈セル養老金許與ノ請求ハ悉ク之ヲ大藏卿
 ニ回附セシムルト爲シ大藏省ニ與フルニ之ヲ裁定ス
 ルノ權力ヲ以テス此法律ハ從來大法官ノ掌有セル專一
 ノ權理ヲ剝テ其退職ニ際シ法律上之ヲ受ク可キ權理
 ル所ノ裁判官ニ給與ス可キ年金額ヲ大法官ノ報告ニ應
 シテ決定スルノ權力ヲ大藏省ニ與ヘンカ爲メニ制定シ
 タル者ナリ

供度及ヒ収税
 ニ關スル王權

余輩ハ是ヨリ供度及ヒ収税ニ關スル王權ト之ニ係ル議院
 憲法上ノ權理ヲ考察ス可シ
 ノーハ此項ニ於ケル眞誠ノ定義ヲ簡畧ニ陳テ曰ク其責任
 執政官ノ忠告ニ從テ施爲スル所ノ國王ハ則チ行政權ノ在
 ル所ナルカ故國家悉皆ノ收入ヲ管理シ公務悉皆ノ費用ヲ

支辨ス可キ職任ヲ負擔ス唯夫レ之ヲ負擔ス故ニ王者ハ
 先ツ政府錢貨土ノ必要ヲ下院ニ通知シ下院ハ此需求ニ應
 スルカ爲メニ要用ナル補助若クハ供度ヲ許與ス又租税及
 ヒ國家收入ノ他ノ根源ヲ適用シテ既ニ許與セル供度ニ應
 ス可キ方法ヲ定ム此ノ如クシテ國王ハ錢貨ヲ需求シ下院
 ハ之ヲ許與シ上院ハ許與ニ同意ス然レモ下院ハ國王ノ之
 チ需ムルニ非スンハ錢貨ヲ議定セス又既ニ議定シ若クハ
 將ニ議定セントスル供度ニ應マ及ヒ歲入全体ノ欠乏ヲ補
 救スルカ爲メニ必要ナルニ非スンハ租税ヲ課増セズ租税
 ノ性質若クハ配附ハ國王ノ關スル所ニ非ス然レモ議院取
 税ノ基本ハ總テ其公務ノ爲メニ必要ナルニ在リ此必要ハ
 憲法上ノ忠告者ヲ經テ國王ノ明言ス可キ者ナリト

供度ノ事項ニ於ケル王室ト議院トノ相互ノ業務ヲ一層細
 カニ講究セントスルニ方リ論案ヲ分テ二ヲ爲シ第一ニ供
 度(甲)及ヒ収税(乙)ニ關シテ議院ノ受ケル憲法上ノ制限ヲ觀
 察シ第二ニ公務ノ爲メニ要スル錢貨ノ許與ト公費ノ監視
 及ヒ管理トニ於ケル議院特ニ下院ノ權理及ヒ特權ヲ觀察
 ス可シ

第一章 (甲) 供度ノ事項ニ於テ議院受ケル所ノ制限
 古來憲法上ノ定説及ヒ慣行ニ依ルニ執政官之ヲ需求シ其
 責ニ任スルコト非スニハ議院ハ錢貨ヲ議定スルヲ得ス
 往時ニ在テハ公務ノ爲メ補助若クハ供度ヲ要スルハ國
 王報信ヲ送テ之ヲ下院ニ通知シ下院ハ此報信ヲ考察シ其
 意見ニ從テ必要ナル供度ヲ議定セリ是レ一定不易ノ方式

供度ハ執政官
 ノ需求ニ應ジ
 テノミ許與ス
 可キ者トス

ニシテ錢貨ノ支出ハ皆ナ之ニ依ル可キ者ナリキ故ニ在野
 議員ハ己カ方案ヲ提出シテ供度ノ支出ヲ求ムルヲ得ケ
 リシト雖モ前百年紀ノ初ニ及ンテ此憲法上ノ制規ニ外ル
 ヲ慣行ヲ生セリ彼ノ出納院ヲシテ公金ヲ管理セシムルハ
 能ク不當ノ費用ヲ防テ王室ト議院トヲ保護セル良制度ナ
 リシガ終ニ之ヲ以テ議院ノ勢力ヲ藉リ王者ヲシテ不當不
 正ノ費用ヲ裁許セシムルノ機械ト爲スニ至レリ未タ何レ
 ノ費途ニモ適用セサル餘贏ノ出納院ニ存スルヲ見ルヤ在
 野議員ハ其可トスル所ノ目的ニ向テ之ヲ費用セント欲ス
 ルノ心ヲ起スニ至レリ是ニ於テ乎議員動モスレハ其朋友
 チ教唆シテ錢貨上ノ扶助ヲ下院ニ請願セシメ請願書既ニ
 出レハ百方之ヲ彌縫シテ下院ノ許可ヲ得セシムル者アリ

錢貨上ノ扶助
ノ請願ヲ受理
セス

錢貨許與ノ動
議ヲ議セス

此ノ如クシテ一私人ニ濫與セル錢貨ハ非常ノ大額ニ達シ
千七百五年ニハ其弊害復々等閑視ス可ラサルニ至レリ故
ニ次回ノ會期ニハ此類ノ請願書未ダ出セルニ方テ該院ハ
國王陛下ヨリ勸薦セラルル者ノ外、當院ハ錢貨ヲ乞フノ請
願書ヲ受理セサル可シト決議ヲ爲ス實ニ千七百六年十
二月十一日ナリ、千七百十三年六月十一日下院ハ之ヲ採テ
其規則ニ加入ス千八百五十二年六月更ニ之ヲ改正ス曰ク國
王ヨリ勸薦セラルル者ノ外、當院ハ公クノ勸勞ニ關シテ錢
貨ヲ乞フノ請願書ヲ受理シ若クハ錢貨許與ノ動議ヲ議セ
サル可シト蓋シ之ヲシテ現行ノ典例ト一致セシメシカ爲
メナリ爾後下院ハ荷毛及金ノ費用ニ含蓄スル勸議ハ設
直接ニ許與ヲ主張セサル者ト雖モ尙モ常ニ此規則ヲ推及

國費ノ支出ヲ
要スル議案

セリ加之ナシス豫メ國王ヲ裁許ヲ得ルニ非スニハ撰拔委
員ハ私入ノ損失ヲ國庫ニ辨償スルヲ勸薦スルヲ得
スト云フニ至レリ委員ノ報告ハ鄭重ナル注意ヲ受ク可キ
者ナリト雖モ下院自ラ之ヲ可決セザル以上ハ必スシモ之
ニ從ハザル可ラサルノ約束アルニ非ス然ルニ委員ハ斯ル
勸薦ヲ爲スルヲ不可トス以テ右ノ規則ハ嚴重ニ實施セラ
ルニテ証ス可シト云フニ至リ、此規則ハ下院ハ其直接ニ適用ス可キ所ニハ常ニ右ノ規則ヲ執行シ
タリト雖モ議員ハ智巧ハ實際之ヲ避クルノ方法ヲ發明セ
リ在野議員ノ議案ヲ提出スルニテ許スル慣行ハ近年ニ起
レル者ニシテ而モ右ノ規則ヲ避ク可キ方法ヲ與ヘタル者
ナリ蓋シ議案ハ公然錢貨上ノ性質ヲ帶ビテ終ニ國費

支出ニ歸スル者多シ土木ヲ興起シ事物ヲ創設若シハ獎勵
 シ職員ヲ新置シ一私人若クハ會社ニ報酬若クハ扶助ヲ許
 與ゼント欲スルカ如キ議案ハ皆テ此部類ニ屬ス可キ者ト
 ス唯タ始メヨリ支出額ヲ豫定スル能ハサルコアルノミ則
 テ始メヨリ之ヲ豫定スル能スト雖モ經費支出ノ根本ヲ確
 立スルカラハ此等ノ議案ハ其目的ノ安クニ在ルヲ問ハス
 皆テ國王ノ請求アルニ非ズハ議院カ經費支出ヲ議定ス
 ルコトヲ禁スル所ノ憲法上ノ制規ヲ脫ル者ナリ直接ニ憲
 法上ノ制規ヲ犯サズモ其目的ヲ發セシカ爲メ此類ノ議
 案ハ常ニ此ニ因テ起ル可キ必要ノ費用ハ他日議院カ議定
 スル所ノ金額ヲ以テ之ヲ支辨ス可シトノ一條ヲ含有ス斯
 ル議案ノ提出ニ伴フ所ノ便利ハ數々政府ヲシテ此方法ニ因

經費豫算ヲ添
 ヘサル議案ハ
 大弊アリ

テ其立法事務ニ議院ノ認許ヲ得セシメテ加シ之ナラス或
 ル場合ニ於テハ公務ノ進歩ヲ便利セシメシメシガ爲メ上院
 ノ此類ノ議案ヲ創起スルコトヲ許スニ至レリ政府ノ斯ル議
 案ヲ提出スルハ在野議員ノ之ヲ提出スルカ如ク不可ナラ
 サルコト疑ヲ容レスト雖モ政府ハ細カニ斯ル議案ノ趣旨ヲ
 考查シ充分ニ費用ヲ豫算セシテ下院ノ認許ヲ求ムルニ先
 テ之ヲ通知スルヲ可トス
 特ニ在野議員ノ斯ル議案ヲ提出スルハ法外不當ノ費用
 ヲ招キ爲メハ大弊ヲ生スルコト多シ議院既ニ議案ノ趣旨ヲ
 可決スレハ勢之ニ伴フ所ノ費用ヲ認許セサルヲ得ス向後
 經費豫算書ヲ調製スルニ方テ執政官ハ之カ爲メ特ニ費目
 ヲ設ケサル能ハス供度委員會ニ於テ此費目ヲ議スルニ方

テ異論ヲ唱フル者アリハ必ス議院ハ既ニ之ヲ要ス可キ事
 項ヲ可決セリ今日ニ及ンテ之ヲ反對スルハ不可ナリ一
 言ヲ以テ駁却セラル在野議員ヲシテ豫メ國王ノ認許ヲ得
 スシテ公費ヲ要ス可キ議案ヲ提出セシムルヲ慣行アル以
 上ハ國費ヲ節約セント欲スルモ固ヨリ奏功候可キニ非ス
 千八百六十二年五月十六日在野議員エールトンハ深ク此
 弊害ヲ憂ヘテ匡救ノ意見ヲ提出シ暫時ノ討議後出納院長
 下院ニ約シテ曰ク政府ハ細カニ此疑問ヲ考査ス可シ又他
 日委員ヲ命ジテ此非難ス可キ習行ニ關スル情形ヲ調査セ
 シ之之ヨリ起ル所ノ弊害匡救ノ方法ヲ錄聞セシム可シト
 後數年ニ及ラズモ政府ハ委員設置ヲ議ヲ起サシムルカ故千
 八百六十六年三月二十日ニハ再ヒ之ヲ論及シテ

新規則

公費ノ支出ヲ
 要スル議案若
 シハ動議ハ皆
 ナ豫メ國王ノ
 認許ヲ得サル
 可ラス

先ツ此新奇ナルテ憲法違背ノ習行ヨリ起レル弊害ヲ舉ク
 而ル后ニ匡救法ヲ論述シテ曰ク公金ノ請求ニ係ル千八百
 五十二年六月二十五日ノ議事規則ヲ廢絶之ニ代ニルニ
 當院ハ國王ノ勸薦ヲ受シルニ非スルハ其併合資金
 支辨ス可キト向後議院ノ準備スル金額ヨリ支辨ス可キ
 トヲ問ハス公金ノ勸務ニ關スル財錢ノ請願書ヲ受ケテ
 又國入ノ支出ニ係ル動議ヲ議セサル可シニ
 トノ條款ヲ以テセシ又曰ク六月二十五日ノ附アル規則
 ニシテ公金ノ補助若クハ租稅賦課ニ關スル者ヲ廢シテ更
 ラニ併合資金ヨリ支辨ス可キト向後議院ノ準備スル金額
 ヲ以テ支辨ス可キトヲ問ハス補助許與國入ノ支出其他ハ

民ノ負擔ヲ増加ス可キ動議ヲ起ス者アラハ當院ハ直ニ之ヲ考察討議セヌシテ之ヲ延期シ當院ノ適宜ト思考スル期日ニ及ソテ之ヲ全會委員ニ附シ而ル后テ決議若クハ議定ス可キ事トシテ之ヲ議決スル事トシテ其意蓋シ公費ヲ節約シ公費増加ノ責任ハ一切執政官ヲシテ之ヲ負擔セシムルニ在リ此新規則ハ出納院長及喜ソテ同意スル所ト爲リ又徧シ老練ナル議員ノ贊成スル所ト爲テ下院ノ可決ヲ得タリ又其後上院ノ典例ハ下院ノ典例ノ如ク嚴ナラス錢貨上ノ救復若クハ報酬ヲ係ル請願書ト雖モ其趣旨汎然トシテ限畫スル所ナキ以上之ヲ捧呈シ論議トモ禁ヌルノ制規ナク亦習行ナキ且ツ上院ハ収稅ニ係ル措置ト人民ノ錢貨上ノ負擔

上院ノ典例ハ此ノ如ク嚴ナラス

先例

夫増加ス可キ事項トシテ創肇スルヲ權理ナシト雖モ尙ホ憲法上委員ヲ設置シテ理財ニ係ル事項若クハ公金ノ費用ニ係ル疑問ヲ調査セシムルノ權理ヲ有ス其供度ニ關スルト否ヲ問ハテ立法事務ハ皆ナ上院ノ同意ヲ得サル可ラス故ニ上院ノ充分ニ調査シ自由ニ探尋シテ豫メ其同意ヲ與ヘ若クハ拒ムノ準備ヲ整フルハ吾人ノ最モ希望スル所ナリ

千八百五十二年上院ハ政府ニ對シテ錢貨上ノ扶助ヲ請ヘルバ「ロス、ボート」ヲ要求シ調査セシメシカ爲メニ選拔委員ヲ設置ス翌年「ロス、ボート」ニ對シテ此委員ノ報告ニ基キ決議案ヲ提出シテ政府ノ此要求ヲ善處セラレシトテ請テ動議ハ不完全ナルカ爲メニ廢棄セラレタリ

下院ハ自ラ恰
當ナル制規ヲ
加フ

雖曰人々之カ不當ヲ論シタル者ナシ千八百六十年上院
ノ設置セル浮キ波止場調査委員ハ一萬磅以下ノ金額ヲ
海軍省ニ附與シテ斯ル工事ノ築造方案ヲ試験セシメ
コトヲ勸薦ス千八百六十一年七月五日ロキド、シテ
ハリ、ハ奏議ヲ上テ印度至土、灌溉、内國航通、便
ヲ開カレシコトヲ請フ可シト云ヘル勸議ヲ提出ス執政官
之ヲ駁シテ曰ク政府ハ充分ニ論者又今、演、ノ所、主
義ヲ實行ス可キ見込ナシ由當院、斯、單獨、決議、
採用スルヲ不可トス下、同、意、ヲ、請、願、書、
憲法上ノ制規ハ唯、議院、ノ錢貨支出ヲ議定スル、必、國
王ノ需、依、ル、可、キ、要、故、下、院、議、事、規、則、ト、之、ヲ、說、明
スル所、價、行、ト、以、テ、錢、貨、上、ノ、扶、助、ヲ、求、ム、請、願、書、ヲ、受

理ヲ禁スルカ如キ又其撰拔委員、公金費用ヲ勸薦、
ル報告書ヲ呈セシメ、ルカ如キハ自、之、好、シ、テ、憲、法、上、ノ、制
規以外ニ更、制、規、ヲ、加、ヘ、ル、者、ナ、リ、是、ハ、外、國、不、當
ノ需求ヲ爲ス、テ、制、規、ヲ、議、員、ノ、濫、ニ、公、金、支、出、ヲ、議、定、ス
ルコトヲ防、シ、カ、爲、ス、テ、制、規、ノ、効、用、實、ニ、少、小、ナ、ラ、ス、議、院
ヲ、シ、テ、錢、貨、上、ノ、救、回、若、シ、テ、扶、助、ヲ、求、ム、ル、ヲ、請、願、書、ヲ、考、察、セ
シ、ム、ル、ノ、責、任、ハ、行、政、府、全、ク、之、ヲ、負、擔、ス、ル、ヲ、可、ト、ス、蓋、シ、行
政、府、ハ、万、般、ノ、公、費、ニ、對、シ、テ、責、任、ヲ、負、擔、シ、且、ツ、錢、貨、上、ノ、要
求、ノ、當、否、ヲ、檢、察、ス、ル、ニ、特、殊、ノ、便、利、ヲ、有、ス、ル、ハ、自、ラ、如、之、
ヲ、本、政、府、未、ク、請、求、ス、ル、當、否、ヲ、考、察、セ、シ、ム、方、テ、議、院、先、ニ、錢
貨、支、出、ニ、關、ス、ル、事、項、ヲ、討、議、ス、ル、カ、如、キ、ハ、徒、ラ、時、ヲ、費、ス、
ハ、害、有、テ、利、益、ノ、乏、シ、ク、伴、フ、ナ、リ、

下院ハ決議案ヲ通過シ或ハ奏議ヲ上テ格段ナル費用ヲ勸薦スルヲ得

或ル場合於天下院若シ公衆ノ負擔ス可キ費目ヲ政府ニ指示スルヲ以テ其職任ト思惟スルヲアラフ乎下院ハ二個ノ方法ニ依テ其目的ヲ達スルヲ得可シ一ニ曰ク決議案ヲ通過シテ或ル措置ヲ可トスル所ヲ單獨ナル意見ヲ發露スルナリ此決議案ヲ通過スレハ他日該措置ノ爲メニ要スル所ノ經費支出ヲ可定セサル可ラス二ニ曰ク奏議ヲ上テ或ル費用ヲ勸薦シ且シ其必ス之ヲ支出ヲ可定ス可キヲテ保証スルナリ而又下院ハ奏議ヲ上ルヲ得ルハ唯其經費ニ關スル事項ニ止ラズ如何ナル事項ニ付テモ此方法ヲ以テ陛下ニ憲法上ノ忠告ヲ上ルヲ得可シ又下院ハ奏議ヲ上テ或ル費用ヲ勸薦スルモ自ラ進メ之ヲ支出ニ任スルハ非ス其勸薦ヲ容ルメト拒ムトノ責任ハ行政府ニ在リ之ヲ負

擔セシメサル可ラズ下院ハ國費ニ關シテ使用スルヲ得可キ權理實ニ此ニ如ク雖其之ヲ使用スルヲ鄭重ニ注意ヲ加ヘ且シ唯其格段破例ノ情狀ニ下於テスルヲ常トス向後ト雖亦然ラサル可ラズ又明ニ公衆ノ經費ニ關スル事項ノ健全ヲ製規テ逃避セシカ爲メニ單獨ナル決議案ヲ採用スル等諸事ハ成ル可シ注意ノ之ヲ爲サ、ルヲ要ス下院ハ他日必ズ其支出ヲ議定ス可キヲ保証シテ或モ格段ナル事項ニ對シ公金ノ繰替ヲ陛下ニ奏請スルコトアリ是レ決シテ違法ト處置シ非スルヲ先例ノ許ス所ナリト雖モ斯ル奏議ハ唯上院ニ之ヲ非難ス可キ恐ナキ時ヲ止ル可キ者トシ蓋シ供度若シハ適用ニ關スル處置ハ上院ニ同意ヲ得サレハ皆テ有効ナル能ハシトスルヲ奏議ハ供度

委員會既ニ場ヲ閉スルノ後ニ起レル急卒ノ際ニ上ルテ常
 トス或ハ格段ナキ人物ニ錢貨上ノ寵錫ヲ與ヘシカ爲メ
 シ或ハ記念碑ヲ立テ、近口死セル著名ノ人物ヲ崇敬スル
 カ爲メニ或ハ該院ニ特權ニ關スル事項ニ於テ王室ノ協
 力ヲ請ハシカ爲メニスルノ類是レナリ此等ノ綠替ハ苟
 モ正當ナル以上ハ他日之ヲ供度議案ニ編入スルコ及メテ
 必ス上院ヲ認許シ得可シ
 此ノ如クシテ錢貨ノ支出ヲ得ルノ方法ハ其同意ヲ得
 欲シテ上院ニ訴ワルノ必要ヲ避ケカ爲メ又政府ヲシテ其
 判斷ニ背キ單ニ下院ノ請求ニ依テ費用ヲ支出セシメカ
 爲メ不當ニ之ヲ使用シタルコアリ斯ル場合ニ於テハ執政
 官ハ之ニ處中シテ國王ノ特權ヲ主持シ上院ニ特權ヲ保護

奏議ハ何レノ
 時ニ於テ不當
 ナルヤ

下院カ其請求
 セルヨリ一層
 多額ノ支出ヲ
 可トスル時ハ
 政府如何ニ處
 ス可キ乎

シ國入ノ濫出ヲ防制セザル可ラス是レ其職任ナリ
 政府ノ或ル事項ニ對スル供度ヲ下院ノ議ニ附スルコ方テ
 下院若シ政府ノ請求セルヨリ多額ノ錢貨支出ヲ可トスル
 一アラソ乎、下院ハ恣ニ之ヲ增加スルノ權力ナシト雖モ執
 政官ハ更ニ請求金額ヲ増加スルコアリ又之ヲ考察シ他日
 ニ至テ一層多額ノ錢貨ヲ議院ニ請求スルコアリ
 附言 千八百三十八年政府ハ供度委員會ニ於テ被爾ハ
 救助ノ爲メニ万磅ノ支出ヲ請求セルコ諸議員概テ皆ナ
 一層ノ多額ヲ支出スルヲ可トス然レモ憲法上ノ慣行ハ
 執政官ノ他斯ル勳議ヲ起スコヲ禁スルヲ知レルカ故唯
 ヲ汎然其意見ヲ吐露セルノミコテ特ニ勳議トシテ増額
 說ヲ主張シタル者ナシ出納院長ハ初メ原案ヲ維持セル

議院ノ意見ヲ
試シカ爲メニ
動議ヲ起ス
アリ

ガ終ニ之ヲ再考スルヲ認承シ翌年ノ豫算表ニハ増シ
テ一万五千磅ト爲セリ
錢貨支出ニ關スル難ハキ議題ニ就テ議院ノ意見ヲ試シ
カ爲メ若クハ錢貨上ノ扶助請求ニ係ル已カ判斷ノ正當ナ
ルヲ証センカ爲メ執政官ハ公然陛下ノ之ヲ認許セラルハ
旨ヲ通知シ議院ヲシテ之ニ關スル動議ヲ討議セシムルコ
アリ又儀式ニ從ヘル動議ナキニ上下兩院ヲシテ此類ノ疑
問ニ附テ濫漫ナル討議ヲ爲サシムルコアリ又錢貨支出ノ
緊要ナルヲ主張セス先ツ議院ヲシテ漠然或ル措置ノ可否
ヲ論議セシメンカ爲メニ動議ヲ起スコアリ執政官ハ此ノ
如クシテ諸般ノ便利ヲ得議院ハ此ノ如クシテ王權ヲ侵凌
スルコトナクシテ憲法上錢貨ニ關スル政府悉皆ノ措置ヲ監

先例

視スルコトヲ得
次ノ先例ハ此項ニ係ル慣行ヲ説明スルニ足ル可
第一ニ吾人ノ記述ス可キハ數年間議院ノ注意ヲ惹ケル
バイマアノ事件ナリ
氏ハ元ト田舎劇場ノ管理人ナリシカ郵書配達ノ改良法
ヲ案シテビットニ通知セルコビッ大ニ之ヲ喜ヒ氏ヲ驛遞
局ノ會計官ニ任シテ其改良法ヲ實施スルノ全權ヲ委托
ス氏カ法案ハ忽チ大功ヲ奏シ數年ヲ出テスシテ驛遞法
大ニ進歩シ該局ノ收入大ニ増加ス是ニ於テ政府ハ増加
セル純益ノ或ル部分ヲ若干チ一生間バイマアニ給與ス
ルコトヲ約シ氏ハ之カ爲メ終ニ年々一万磅ヲ受クルニ至
レリ然ルニ爾後氏ハ漸ク不從順ニ趨キ其行爲中非難ス

可キ者多カリケレハ政府モ止ムヲ得ス之ヲ免黜シ又前
 ノ約束ヲ取消シテ更ニ一年三千磅ノ年金ヲ給與ス氏ハ
 此少額ヲ以テ満足セズ初ノ約束ニ從テ終身間収入ノ幾
 分ヲ受ント欲シ千八百七年下院ニ請願書ヲ呈シテ之ヲ
 訴フ政府ハ下院ニ説テ委員ヲ設置シテ氏ニ關スル事態
 ヲ調査セシメ委員ハ七月十三日ヲ以テ報告書ヲ呈シタ
 レル此會期中ハ別ニ議論ナカリキ次回ノ會期ニ至リ下
 院ハ政府(當時モ尙ホバリーマアノ要求ニ反對セリ)ノ認許
 ヲ得テ議案ヲ提出シ政府ノ之ニ反對セルニモ拘ハラズ
 〔向後ハ驛遞局ノ増加セル純収入ノ幾分ヲバリーマアニ給
 與ス可キ旨ヲ議決スト雖モ上院ハ之ヲ廢棄セリ此際供
 度委員會ハバリーマアノ要求セル分割ノ延滞ヲ支辨ス可

先例

キ金額ヲ支出スルコトヲ決議シテ報告セタルニ下院ハ之
 ニ同意シ該議案ノ編制ヲ命セリ然レモ上院ハ向後バリー
 マアニ純収入ノ幾分ヲ給與ス可シト云ヘル議案ヲ廢棄
 セルカ故出納院長ノ發議ニ依テ下院ハ延滞セル給與金
 ナ全体ノ適用案ニ編入セス別ニ一議案ヲ設テ議セシコ
 トヲ決ス是レ上院ニ與フルニ他ノ經費ト別テ該費額ヲ考
 察スルノ機會ヲ以テセンカ爲メナリ下院ハ此會期ニハ
 之ヲ討議セカリシト雖モバリーマアノ朋友ハ堅ク執テ動
 カス千八百十一年五月二十一日再モ此問題ヲ提出シ終
 ニ下院ヲ以テ攝政太子ニ對シテ驛遞局ノ收入中バリーマ
 アニ給與ス可キ金額ノ延滞セル者五万四千磅ヲ給與セ
 ラレシコトヲ請ヒ又下院ノ必ス之カ支出ヲ議定ス可キヲ

保証スル所ノ奏議ヲ上ルコト可決セシム上院ハ之ヲ聞
テ大ニ怒リ次日激烈ナル討議ヲ起スト雖別ニ施爲ス
ル所ナシ後テ二日大宰相ハ上院ニ告ルニ該院議員ノ認
テ不當ノ要求ト爲セル者ヲ許與セラレシコト殿下ニ勸
薦セサル可キ旨ヲ以テス攝政太子モ亦下院ニ答辭ヲ賜
テ曰ク余ハ常ニ下院ノ意望ニ從ハシコト欲ス今日ノ事
ノ如キモ議院若シ其方法ヲ定メナハ余直チニ之ヲ實行
ス可シ再言スレハ兩院ノ同意ヲ經タル立法上ノ措置ニ
依テ其方法ヲ定メナハ余直チニ之ヲ實行ス可キナリト
下院中此答辭ヲ以テ王室ト下院トノ間ニ不和ヲ生ス可
キ者ト爲シ爲メニ動議ヲ起シタル者アリシガ大多數ニ
因テ否決セラレ之ニ反對セル者ノ言ニ曰ク下院ハ錢貨

先例
ニ關シ奏議ヲ上ルノ權理ヲ有スルコト疑テ容レスト雖
此際ノ御答モ亦不可ナル所ナシ何トナレハ太子ハ下院
ノ以テ權理上給與セサル可ラスト爲セル所ノ者ヲ上院
ハ事實ノ調査後權理上給與ス可キ者ニ非スト認定シタ
ルコト熟知セラル可レハナリト次回ノ會期ニ際シ下院
ハ政府ノ認許ヲ得テ再ヒバーマアニ辨償セントスルノ
議ヲ起シ向後驛遞局収入中ノ幾分ト延滞額八万磅トヲ
給與ス可キ旨ヲ議決ス政府ハ依然之ニ抗抵シ上院ハ第
三讀會ニ於テ之ヲ拒却ス次回ノ會期ニ於テ下院ハ同様
ノ議案ヲ通過シ上院ハ之ヲ拒却ス同會期中兩院ノ調和
ヲ計ル者有テバーマアノ勤勞ニ酬ヒシカ爲メ五万磅ヲ
給與ス可シトノ議案ヲ提出シタルニ上院モ之ニ同意シ

パード、
ボード、

テ終ニ陛下ノ批准ヲ得タリニシテ、
吾人ノ次ニ舉ク可キハパード、ボードノ件ニシテ氏
カ錢貨上ノ辨償ヲ要求スルヲ四十年ノ久シキニ亘リ其
間内閣ノ更替セルヲ數回コシテ止マスト雖也今日ニ至
テ尙ホ決定セズパード、ボードノ旨ニ曰ク余ハ元ト英國ノ臣
民ニ佛國ニ夥大ノ財産ヲ有セシモ革命ニ際シテ佛政
府ノ爲メニ没収セラレタリ騷亂平定後二國ノ條約ヲ結
締スルニ及ンテ佛政府ハ革命ノ際ニ其財産ヲ没収セラ
レタル英民ニ辨償セシメ爲メ巨額ノ金ヲ英政府ニ拂渡
セリ余ハ此條約ニ基テ辨償ヲ受ク可キ權理アリト氏ト
氏カ繼嗣者トハ此趣旨ヲ以テ政府ニ法庭ニ上下兩院ニ
訴テ數々損害ヲ要求スト雖也常ニ其目的ヲ達スル能ハ

先例

ス千八百三十四年下院ハ内閣ノ反對セルニモ拘ハラヌ
委員ヲ設テ氏カ要求ヲ調査セシム此年調査ヲ全終スル
能ハザリシカ故翌年下院ハ再ヒ調査委員設置ノ議ヲ起
セルニ内閣之ヲ駁シテ下院ヲ控訴法庭ニ變セシムト欲ス
ルノ企ト爲シ動議ハ終ニ否決セラレ千八百五十二年ロ
ード、ボード、
ド、ボード、
ノ該院ニ呈セル請願書ノ條款ヲ調査セシム調
査委員ハ要求ノ理アルヲ報告シタルカ故ロード、ボ
ード、
ノ翌五十三年八月一日委員ノ報告ニ基テ決議
案ヲ提出シ懇切ニ政府ニ向テ請願者ノ要求ヲ考慮セラ
レシコトヲ勸薦ス之ヲ駁スル者ノ言ニ曰ク適應ナル審庭
既ニ該要求ノ有理無理ヲ判決セルカ故之ヲ認テ最後ノ

審案ヲ經タル者ト爲サ、ル可ラスト暫時ノ討議後勸議
 ハ否決セラル千八百五十四年六月二十日下院決議案ヲ
 提出シテ曰クバーロン、ド、ボードノ要求ハ久シキ調査ヲ
 經テ其正確ナルコト判然タルニ至レリ國家苟モ信チ人民
 ニ失ハサラント欲セハ必ス之ヲ満足セシメサル可ラス
 ト政府ハ尙ホ此要求ヲ不當トシテ勸議ヲ否決ス千八百
 六十一年六月四日下院ハボードノ請願ニ應シテ再ヒ之
 カ調査委員設置ノ議ヲ起ス檢事長之ヲ駁シテ請願者ハ
 其實英ノ臣民ニ非サルカ故佛政府ヨリ拂渡セル資金ノ
 辨償ヲ受ク可キ權理ナキ旨ヲ明言ス出納院長モ亦論シ
 テ曰ク斷然其望ヲ絶クシメヌシテ或ハ要求ニ應ス可キ
 カ如キ姿勢ヲ示スハ請願者其人ヲ厚待スル所以ニ非ス

丁抹事件ニ係
 ル要求

且ツ委員ハ設令ヒ之ヲ可認スルノ報告ヲ呈スルモ政府
 ハ何ノ理由有テカ前三十年間悉皆ノ司法官ノ意見ニ反
 對スル所ノ處置ヲ施スヲ得可キツ是レ余カ知ラントナ
 欲スル所ナリト執政官ノ反對セルニモ拘ハラヌ下院ハ
 終ニ委員ヲ設置ス委員ハ許多ノ事跡ヲ蒐集シタレ尙
 ホ其調査ヲ完終スル能ハス八月一日ヲ以テ其蒐集シタ
 ル丈ケノ處置ト證據トチ下院ニ報告セリ爾後議院ハ此
 件ニ就テ再ヒ施爲スル所ナカリキ
 吾人ハ次ニ丁抹事件ニ係ル要求ヲ觀察ス可シ千八百七
 年佛國ノ役ニ際シ丁抹ハ陽ニ中立ヲ唱フト雖モ陰ニ佛
 ヲ援クルノ嫌疑アルヲ以テ英政府ハ俄然コッペンヘーゲ
 ノ港ニ碇泊セル丁抹ノ艦隊ヲ捕拘ス是ニ於テ丁抹政府

ハバルチック海ニ貿易セル英商ノ所有品ヲ取押ヘ之ヲ沒収シテ怨ヲ報ス此時ニ方リ大英國ハ現ニ丁抹ト開戦シタルコト非サルカ故其暴行ノ罪ニ任セサル可ラス又奪物報怨ノ法コト因テ損害ヲ被レル商賈ニ辨償セサル可ラストノ議アリ政府ハ此議ヲ容レテ大ニ辨償ノ路ヲ開クト雖此之ニ漏レタル者亦少ナカラス詮議ニ漏レタル者ハ請願書ヲ下院ニ呈シテ辨償ヲ要求ス是ニ於テ千八百三十八年五月二十四日下院中奏議ヲ上テ諸商賈ニ辨償セシカ爲メ其要求ヲ調査セラレシテ請フ可シト論スル者アリ執政官之ヲ駁シテ曰ク公法上辨償ス可キ者ハ政府既ニ之ヲ辨償セリ彼ノ殘餘ノ商賈ノ如キハ辨償ヲ受ルノ權理ナキ者ノミト此駁論アルコトモ拘ハラズ奏議ヲ

上ルノ動議ハ終ニ下院ヲ通過セシカバ出納院長明言シテ曰ク此事ニ關スル余カ意見ハ依然トシテ變更スル所ナシ且ツ斯ル決議ノ爲メニ生ス可キ危險ナル結果ヲ考フレハ余ハ此疑問ニ對シテ爾後責任ヲ負擔スル能ハス是レ余カ豫メ一言シ置ント欲スル所ナリト後テ政府ハ詮議ニ漏レタル者ノ一部ニ辨償スルコトヲ諾シタレト下院ハ尙ホ之ニ満足セス次回ノ會期中政府ニ反對ノ同様ノ奏議案ヲ通過ス是ニ於テ政府ハ再ヒ辨償額ノ増加ヲ諾スト雖此要求者尙ホ満足セズ千八百四十一年六月十日下院ハ三タヒ奏議ヲ上テ殘者ノ要求ニ應ゼンコトヲ請ヒ又該院ノ必ス其金額支出ヲ議定ス可キヲ保証ス是ニ至テ政府モ復タ讓ラズ最早此項ニ係ル費用ニ同意セサ

ル可キ旨ヲ明言シ出納院長ノ如キハ陛下ハ此上辨償額
 ナ支出ス可キ資金ヲ有シ給ハサルカ故下院ノ之ヲ請求
 スルハ無益ノ勞ニ過キサル由ヲ演フ六月二十一日執政
 官、女王ノ御答ヲ傳テ曰ク陛下ハ常ニ下院ノ欲望ニ聽從
 セント欲スルノ心ナカラサル可ラス故ニ今回ノ如キモ
 上下兩院ニシテ苟モ其方法ヲ準備セハ陛下ハ直チニ之
 ナ實行セラル可シト該院ハ此答辭ニ就テ別ニ處措スル
 所ナカリシト雖ヒ千八百四十三年六月二十日、千八百四
 十四年七月九日、千八百五十一年六月二十六日、都合三回
 同様ノ奏議奉呈ノ議ヲ起シテ常ニ否決セラル議論ノ中
 絶スルヲ十年、千八百六十一年七月二十一日ニ至テ一議
 員ノ再ヒ要求ヲ可認スルノ説ヲ提出シテ下院ノ注意ヲ

喚起セル者アリシカ唯々其注意ヲ喚起セルノミニテ別
 ニ動議ヲ提出セサリキ此際檢事長ト出納院長トハ共ニ
 再ヒ該疑問ヲ討議スルヲ不可トス出納院長ノ言ニ曰ク
 憲法ハ錢貨適用ノ件ニ於テ行政府ト議院トノ一致スル
 一ヲ要スルノミニナラス種々意見ヲ異ニスル所ノ諸政府
 ハ皆ナ此要求ヲ不當トシ前十五年間下院ハ數々控訴セ
 ラルト雖ヒ常ニ之ヲ拒絕セリ故ニ議院ニ於テ再ヒ此事
 項ノ論議ヲ勸誘スルハ不可ナリト是ニ於テ議院ハ該件
 ナ放棄シ爾後再ヒ之ヲ論議セザリキ
 千八百三十八年七月六日ジロンハ奏議ヲ上テ議院ノモ
 セシクス侯殿下ニ對スル許與ヲ審案セラレシヲ請フ可
 シトノ動議ヲ起ス其意蓋シ下院ヲシテ該許與ヲ増加セ

シメント欲スルゴ在リ内務卿ロイド、ジョン、ラッセル之ヲ
 駁シテ曰ク本件ノ如キハ政府ノ當サニ審理ス可キ者ニ
 シテ其必要ナルコ方テ許與ノ増加ヲ奏請スルハ政府ノ
 職任ナリ唯タ政府ハ未タ其必要ナル所以ヲ見サルノミ
 トサ、ロベルト、ピールモ亦此説ニ同意シ下院ノ干涉ヲ
 以テ極テ危険ナル先例ヲ置ク者ト爲セリ動議ハ終ニ否
 決セラル

英國ノ寺院ノ器具

千八百四十年六月三十日カー、ブール、エーチ、イングリス
 ハ委員ヲ置テ下院ハ王國中ノ欠乏セル寺院ノ器具ヲ整
 備セシカ爲メ資金ヲ支出セント欲スル旨ヲ明言セル奏
 議ヲ上ルノ可否ヲ考察セシメントシテ發議ス千八百四十
 二年六月十六日フォルランドハ奏議ヲ上テ製造ヲ業トス

愛蘭ノ鐵道

ル地方ノ究困ヲ救ハシカ爲メ一百万磅ノ支出ヲ請ハメ
 下院發議ス此兩動議ハ政府ノ反對セルニモ拘ハラズ議
 場ノ問題トナリシガ後テ其ニ否決セラル
 千八百四十七年二月四日ロイド、デロウ、ベンチンクハ愛
 蘭ノ鐵道敷設ヲ獎勵シ速ニ該國ノ窮民ニ職業ヲ與ヘン
 カ爲メ千六百万磅ノ公債ヲ募集ス可シト云ヘル動議ヲ
 提出スルノ許可ヲ請フ大宰相ロイド、ジョン、ラッセルハ議案
 ニ反對スト雖ヒ其提出ヲ非難セス是ヨリ先キ議長衆員
 ニ告テ曰ク錢貨ニ係ル條款ハ豫メ委員ノ調査ヲ要スト
 雖ヒ斯ル條款ヲ蓄有セサル以上ハ該議案ハ形式上毫モ
 不可ナル所ナシト後テ政府モ亦明言シテ曰ク事項ノ充
 分ナル論議ニ干涉セシカ爲メ王權ヲ使用スルハ不可ナ

カピテイン、グ
ラント

リト因テ該議案ハ既ニ一讀會ヲ經、二讀會ニ入ルニ及ヒ
出納院長ノ動議ヲ以テ六個月間停止セラレタリ
千八百六十二年七月二十二日下院中カピテイン、グ
ラントノ勤勞ハ國家ノ知遇ヲ受ク可キ者ナリトノ動議ヲ提
出シタル者アリ是ヨリ先キ氏ハ兵舎軍營ニ於ケル料理
法ヲ改良シテ大ニ軍陣ヲ利益セルカ故今マ其功ニ報イ
ント欲スルナリ政府ハ此動議ヲ認テ該士官ニ錢貨ノ給
與ヲ勸薦スルニ同シキ者ト爲セリ發議者ノ意見モ其實
是ニ在リシト雖モ下院ヲシテ議事規則ニ觸レズメテ討
議スルコトヲ得セシメンカ爲メ故ヲニ其字句ヲ廣漠ニス
軍務部國務尙書ハ動議ヲ駁シテ議事規則ヲ逃避セント
欲スルノミナラズ毫モ論據ナキ者ト爲シカピテイン、グ

平民騎兵隊ノ
操練

ラントノ勤勞ハ國庫ヨリ報酬ス可キ性質ノ者ニ非スト
論セリ動議ハ僅ニ一名ノ多數ヲ以テ否決セラレ後ヲ數
日軍務尙書下院ニ告テ曰ク動議ハ否決セラルト雖モ幾
ント半數ニ近キ議員之ヲ可認セルカ故政府ハ更ラニ之
ヲ考察ス可シト下院中政府ノカピテイン、グラントニ許
與セントシタル金額ヲ以テ満足セス千八百六十四年五
月二十日奏議ヲ上テ其勤勞ニ適應スル所ノ報酬ヲ許與
セラレシコトヲ請フ可シト發議セル者アリシカ軍務副尙
書ノ説明後動議終ニ否決セラレ
千八百六十四年政府ハ經費節約ノ意趣ヨリ通例六日間
ナル平民騎兵隊ノ操練ヲ停止シテ其召集費凡ソ四万六
千磅ヲ下院ノ議ニ附スルコトヲ見合セタリ三月三日陸軍

經費豫算ヲ審案センカ爲メ議長其席ヲ去テ委員會ヲ開
 ヲトスルニ方リ勸議ヲ提出シテ操練ヲ停止スルハ兵
 力ヲ減殺シ國家ノ長計ニ害アリ且ツ千八百六十一年ノ
 局命事務掛ノ勸薦ニ違背スル旨ヲ決議セント主張シタ
 ル者アリ政府ハ之ニ反對シテ一時活潑ナル操練ヲ停止
 スルモ決シテ兵力ヲ減殺スルノ患ナキヲ論シ一名ノ多
 數ヲ以テ勸議ヲ否決ス五月五日ニ至リ軍務副尙書ハ平
 民騎兵隊ノ操練費三万九千磅ヲ供度委員會ニ提出シテ
 曰ク前日ノ討議後政府ハ圖ラヌニユー、ジョーランドヨリ報
 知ヲ得テ該島ノ戰闘費ヲ節スルヲ得タリ故ニ平民騎
 兵隊操練ノ爲メ常例ノ經費ヲ支出ス可キ位地ニ立テリ
 ト下院ハ大多數ニ依テ之ヲ可決ス

租税ニ關スル
 發議ハ執政官
 ヨリ出ツ

第一章 (乙) 収税ノ事項ニ於テ議院受クル所ノ制限
 國王陛下ヨリノ勸薦アルニ非ズハ議院ハ錢貨ノ支出ヲ
 増加シ若クハ新ヲ支出スル能ハサルヲ前文既ニ論スル
 所ノ如シ之ト同シ新ニ租税ヲ賦課シ若クハ現存ノ賦
 課ヲ廢止スルノ發議ハ常ニ政府ヨリ出ルヲ要ス左ニ其
 事例ヲ掲ク可シ
 千八百三十年三月二十五日プウレ、タムソノ勸議ヲ
 起シテ収税法ヲ改革整理センカ爲メ委員設置ヲ主張ス
 ルヤ國務尙書ハ之ヲ駁シテ執政官ノ最も重要ニシテ一
 種特異ノ職務ヲ奪ハント欲スル先例ナキ計策ト爲シ且
 ツ論シテ曰ク租税ノ賦課ヲ發言スルハ國王陛下ノ一種
 特異ナル權理ニシテ慣行ト確實ナル政策トハ斯ル疑問

議院ニ提出スルノ職任ヲ執政官ニ附托シタルヲ既ニ
 久シト終ニ動議ヲ拒絕スルヲ得タリ千八百四十四年三
 月十四日在野議員ノ委員ヲ設置シテ或ル財産税ノ賦課
 ヲ考査セシム可シト發議スルニ方リ議長ト大宰相カ
 ロベルト、ヒールトハ「斯ル發議ハ徵收委員會ニ於テ爲ス
 可シ得可シト雖ニ國家緊急ノ事アルニ非スハ他所
 於テ爲ス可シ得ス」トノ理由ヲ以テ之ニ反對ス少許ノ議
 論後動議ハ引去セラレ
 在野議員ハ現存ノ租ヲ改正若クハ廢止セシカ爲メ議案若
 シハ決議案ヲ提出スルノ權理アルヲ辨テ待タス是レ近時
 重立タル政治家ノ皆ヲ認承セル所ナリ然レニ在野議員カ
 斯ル疑問ヲ創起スルノ極テ不便不利ナルハ亦世人ノ普ク

在野議員ニシ
 テ現存ノ租稅
 ヲ改正若クハ
 廢止スルノ疑
 問ヲ創起スル

ハ得策ニ非ス

或ル租稅ニ係
 ル單獨ナル決
 議案

収入稅

認承スル所ナリ重要ナル理財上ノ大義ニ曰ク直チニ之ヲ
 廢止スルノ意見アルニ非スハ議院ハ租稅ヲ非斥ス可ラ
 ス蓋シ之カ爲メ商業家ノ不安心ヲ來シ又國家ノ理財
 法ヲ計畫スルニ方テ政府ヲ惑亂セシム可レハナリ在野議
 員ニシテ收稅ノ或ル項目ニ對シ單獨ナル決議案ヲ提出セ
 ルノ事例少ナカラスト雖ニ政府ハ常ニ之ヲ不便不策トシ
 テ駁撃シタリ
 左記ノ例証ハ此項ニ重要ナル關係ヲ有スルカ故讀者細カ
 ニ觀察シテ可ナリ
 吾人ハ第一ニ収入稅ノ疑問ヲ記述ス可シ在野議員ハ社
 會ノ或ル等級ノ人物ヲシテ不公平ナル負擔ヲ免レシム
 可キ方法ヲ計畫シテ數々下院ノ注意ヲ此疑問ニ惹ケリ

千八百五十一年五月二日政府ノ三年間財産税法實施ノ
 議案ヲ出スヤヒ、ハ修正説ヲ提出シテ之ヲ一年ニ限
 ル可シト主張シ終ニ下院ノ同意ヲ得タリ蓋シ収入税ノ
 賦課并ニ徴収ヲ審査シテ其良法ヲ設クカ爲メナリ大宰
 相ロイド、ウヨン、ラッセルトヤスレトリトハ共ニ調査委員
 設置説ヲ駁シテ妄ニ政府ノ職務ニ干涉スル者ト爲セシ
 ト雖也下院ハ前ノ決意ヲ實施センカ爲メ之ヲ可認シ五
 月八日之ヲ設置シテ別ニ収入税ヲ賦課スルノ良法アル
 ヤ否ヤヲ審案セシム委員ハ此疑問ヲ調査スルニ方テ許
 多ノ困難ニ遭遇シ之ニ従事スルノ二年ノ後テ其意見ヲ
 進メスシテ唯々其蒐集セル事跡ヲ報告ス千八百九十
 一年二月十九日ハッパードノ動議ニ依テ収入及ヒ財産税賦

先例

課ノ良法ヲ調査セシム可キ撰拔委員ヲ設置ス動議ハ出
 納院長グラッドストートント反對黨ノ重立タル議員セト、ス
 ヲフゾード、ノトスコートトノ駁撃ヲ受ケシト雖也尙ホ四
 名ノ多數ニ因テ下院ヲ通過セリ充分ノ調査ヲ遂ケタル
 後テ委員ハ報告書ヲ呈ス其要畧ニ曰ク収入及ヒ財産税
 ニ對スル非難ハ其精神性質ヨリ生スル者ニシテ其施行
 法ヨリ起ル者ニ非ス故ニ同時ニ税法ノ他ノ部分ヲ改正
 セスシテ獨リ収入及ヒ財産税ノミヲ改正スルハ不當ナ
 ル可シト此報告アルニモ拘ハラヌ千八百六十二年五月
 十三日ハッパードハ収入税法ヲ改テ或ル弊害ヲ矯正スル
 ヲ可トスルノ決議案ヲ提出スト雖也出納院長ノ駁撃ヲ
 被リ大多數ニ因テ否決セラレハッパードハ尙ホ屈セス千

八百六十三年三月二十四日同様ノ決議案ヲ提出シテ其
 攻撃ヲ再ヒセルニ出納院長ハ復タ之ニ反對シ之ヲ評シ
 タ空幻、實行ニ難ク且ツ収入税ノ認承セラレタル欠漏ヲ
 矯救ス可キ法案ヲ具有セサル者ト云ヘリ別ニ議論ナク
 シテ動議ハ否決セラル全年四月二十三日ロトバツシ決議
 案ヲ提出シテ曰ク今後ノ収入税ハ變更不定ナル収入ニ
 課スルコト少ナフシテ恒久不易ナル収入ニ課スルコト多カ
 ル可シト動議ハ出納院長ノ反抗スル所ト爲リ少許ノ討
 議後發議者自ラ之ヲ引ケリ
 ロトバツ、アール、グロウ、シュノルハ千八百五十年、全五十一年、
 全五十二年ヲ以テ前後三回檢事狀師等ノ証狀ニ對シテ
 納ム可キ年税廢止ノ議案ヲ提出ス下院ハ議案ノ要旨ヲ

証狀税

可認ス、雖ニ政府ハ其通過ヲ延期セシムルコトヲ得タリ
 千八百六十五年五月十九日政府ノ主義便宜上ヨリ頻ニ
 之ヲ駁撃セルニモ拘ハラステマンノ發議ニ因テ該税
 廢止ヲ可トスル所ノ單獨ナル決議案ヲ通過ス

廣告税

千八百五十三年四月十四日ミルナー、ギブソンハ下院ヲ
 シテ廣告税ノ廢止セサル可ラサルコトヲ明言セシメント
 欲シ動議ヲ起シテ政府ノ反抗ニ勝ツヲ得タリ然ルニ出
 納院長ハ下院ノ明言セル所ニ從フヲ欲セス後チ數日徵
 収委員會ヲ開クニ及ンテ該税ノ割合ヲ六「ペンス」ニ定メ
 ノコトヲ發議ス此際反對論者再ヒ勝ヲ制シテ廣告税ノ一
 項ヲ刪除シ爾後政府モ該税ノ廢止ヲ認許セリ
 同日ミルナー、ギブソンハ智識ニ對スル諸税ノ廢止ヲ主

希稅

張スルニ方テ番稅ヲ不可トスルノ決議案ヲ提出ス其畧
 ニ曰ク番稅ヲ存續シテ歲入ノ永久ナル一部分ト爲スハ
 帝ヲニ得策ナラサルノモナラス議院カ教育ヲ獎勵スル
 ノ趣意ニ戻ルト終ニ否決セラルト雖ヒギブソンハ千八
 百五十八年六月二十一日再ヒ同様ノ決議案ヲ提出シテ
 曰ク當院ハ歲入ノ永久ナル一源トシテ番稅ヲ存續スル
 ヲ不可トシ且ツ政府ハ理財法ヲ更革シ議院ヲシテ該稅
 ヲ廢止スルヲ得セシメサル可ラスト爲スト出納院長
 ナスレトリハ好機會ノ起ルアレハ直チニ番稅廢止說ニ
 同意ス可キ旨ヲ告グト雖ヒ尙ホ痛ク動議ノ後半ヲ駁シ
 テ曰ク是レ之ヲ實施スル能ハサルノ日ニ際シ單獨ナル
 決議ヲ以テ政府ノ事ヲ妨碍セシト欲スル者ナリ其不便

「ホップ」草稅

不利實ニ少ナカラスト氏ハ又不可トス云々ノ文字ト後
 半トテ除シテ總憑シロトドジョン、マッセル其他ノ重立
 ル議員モ亦之ヲ總憑ト發議者ハ之ニ同意シテ番稅ヲ永
 久ニ存續スルヲ不可トセル前半ノ決議案ヲ可決スル
 ヲ得タリ千八百六十年出納院長グランドストリンハ番稅
 廢止議案ヲ提出シテ下院ヲ通過セシムルヲ得タレヒ上
 院ノ爲メニ拒絕セラル翌年ノ會期ニハ同一ノ趣旨ヲ海
 關及ヒ内國稅ノ議案中ニ編入シテ提出シタルニ上下兩
 院之ヲ可決シテ法律ト爲セリ
 千八百六十一年三月五日ドッドソン決議案ヲ提出シテ曰
 ク「ホップ」課稅スルハ其多少ヲ問ハズ得策ナラサルカ故
 向後租稅ヲ改正スルヲアラハスル課稅廢止ノ方法ヲ施

大可シト出納院長グラッドストロムハ議員諸氏ハ該税
可否ニ附テ意見ヲ發露セサゾトテ請ヒ且ツ其理財上
ノ事項ニ係ル單獨ナル決議案タルノ故ヲ以テ動議ヲ論
駁ス氏ハ如何ナル場合ニ於テモ下院カスル決議案ヲ通
過ス可キ權理アルトテ許シタレド尙ホ該動議ヲ評シテ
妄ニ從來ノ慣行ヲ侵犯スル者ト爲セリ氏ハ又帶稅ニ係
ル決議案ヲ以テ「再ヒ同様ノ措置ヲ爲セズ國家理財上
ノ形狀ガ政府ヲシテ他ノ會計事務ト共ニ之ヲ下附スルヲ
得セシムルノ時期ヲ待ツ可シ」トノ警戒ヲ下院ニ與ヘテ
ル者ト爲セリ下院ハ此等ノ意見ニ同意シ大多數ヲ以テ
動議ヲ否決ス出納院長ハ翌年ノ會期ニ於テ豫算書中ニ
「本ツテ」稅廢止ノ議ヲ編入シテ下院ニ提出シ下院多數ノ意

火災保險稅

見テ實行スルニ至レシ、
千八百六十年五月四日エ、
災保險稅ノ輕減議案ヲ提出ス可キ許可ヲ請ヒ翌六十一
年三月八日再ヒ之ヲ請フト雖モ常ニ内閣ノ反抗ヲ受ケ
下院ノ爲メニ拒絕セラル前ニハ出納院長ノ豫算書ヲ提
出スルニ方テ動議ヲ起シタルニ院長之ヲ駁シテ曰ク若
シ該議案ノ提出ヲ許シテ之ヲ可決スルコトアラバ大ニ歲
入ヲ減少ス可シ而シテ歲入ハ皆テ費用ノ目途アリ一錢ト
雖モ妄ニ之ヲ減スルコトヲ得ズ且ツ租稅ハ下院先ツ之ヲ
減シ若シハ廢スルヲ見込アルコト非ズシハ非難ス可キ者
ニ非ズ故ニ今日ニ方テ斯ル許可ヲ求ムルハ非ナリト後
ニハ豫算書未ク提出セラレサルニ方テ動議ヲ起シタル

ニ出納院長復ク之ヲ駁シ曰ク租税ヲ減セント欲セハ先
 ツ豫算書ヲ檢閲シ減額ヲ補充スルニ足ル可キ剩餘アル
 ナ見テ之ヲ發議セサル可ラス故ニ減税ノ發議ハ豫算書
 下附ノ後ニ於テ爲ス可キ者トス蓋シ剩餘ナクレハ下院
 モ減税說ヲ審案シテ之ヲ可決スル能ハサレハナリト千
 八百六十二年四月一日シユリゲン再ヒ火災保險税ノ減額
 說ヲ起スト雖モ亦豫算書提出ノ前ナリケレハ出納院長
 之ヲ駁シテ曰ク下院未ク歳入全体ノ景況ト國民ノ負擔
 トヲ觀察セサルニ方テ課税廢止ノ議ヲ起ス者アル毎ニ
 之ヲ排斥スルハ各政府ノ職任ナリ此職任ハ諸政府常ニ
 之ヲ盡セリト年間理財上諸般ノ事務ヲ統合シテ之ヲ總
 覽スレバコソ議院モ能ク國家ノ財政ヲ管理シ民意ヲ以

テ政府ヲ指導スルヲ得ルナレ若シ其全体ヲ觀察セズシ
 テ單ニ其一端ヲ可否セバ議院焉ソ此ノ如キ勢力アル
 ナ得シヤト動議者若シ豫算書ヲ提出後ニ其動議ヲ起サ
 ハ此駁論ハ適合セサル可シ大宰相トシテバ非ズルスト
 シモ亦動議ヲ駁シテ曰ク施政府ノ機關タル出納院長ヲ
 シテ一年間ノ必要ナル理財事務ヲ下院ニ提出スルノ責
 ナ負ハシムルハ我カ憲法上ノ制度ニシテ院長豫算書ヲ
 提出スルノ後ニ及メテ始テ非難ヲ演ヘ變更ヲ唱フルモ
 亦我カ憲法上ノ制度ナリト然ルニ減税議案提出ノ許可
 ナテ請フノ動議ハ終ニ下院ヲ通過ス次テ豫算書ヲ提出ス
 ルニ際シ出納院長之ニ轉用ス可キ剩餘ナキヲ演テ該
 税ノ減額ヲ實行スル能ハサルコトヲ説明シ且ツ說テ曰ク

出納院長ヲ擁護スル者唯タ空乏ノ二字アルノミナルヲ
 ハ余ノ追思スルヲ悲ム所ナリ彼レ若シ一錢ノ剩餘タモ
 有セスンハ諸君モ之ヲ取り去ル能ハサル可シ此王國ノ
 北部ニ行ハル、諺ニ之アリ人ノ被^キサル衣服ヲ奪フハ難
 シト四月十日シエリダンハ減稅議案ヲ提出スト雖也之ヲ
 討議セスレテ止ミタリ發議者ノ意固ト在野議員ヲシテ
 政府ノ理財事務ニ干涉セシムルヲ在ラスレテ寧ロ下院
 ノ減稅主義ヲ認承セルヲ表明スルニ在リシヲ以テナ
 リ千八百六十三年七月十四日シエリダンハ單獨ナル決議
 案ヲ以テ再ヒ該疑問ヲ下院ニ提出シテ曰ク當院ノ意見
 ニ依レハ火災保險稅ハ高キニ過キテ保險ヲ依頼スル者
 多^ク妨ク故ニ機會ノ之ヲ許スアレハ直チニ減額セラレ

ヲテ望ムトグラッドストリンノ前ニ舉ケタル憲法上ノ慣
 行ヲ説テ之ヲ駁セルニモ拘ハラヌ動議ハ三十六名ノ多
 數ニ因テ下院ヲ通過ス千八百六十四年三月十五日シエリ
 ダンハ該稅ニ關シテ再ヒ下院ノ意見ヲ取ラント欲スレ
 ば豫算書提出後マテ延期ス可キ旨ヲ明言ス四月七日出
 納院長ハ豫算書ヲ提出スルニ方リ下院ニ告テ曰ク當院
 ノ意見ニ從テ政府ハ火災保險稅ヲ半減スルノ決心アリ
 トシエリダンハ此讓與ヲ以テ満足セス徵收委員會ヲ開ク
 ニ際シテ再ヒ決議案ヲ提出ス曰ク當院ガ前ノ決議ヲ爲
 セルハ唯タ該稅ノ半減ヲ望ムカ爲メニ非ス故ニ政府更
 ニ之ヲ減額セハ一層當院ノ希望ヲ満足セシムルヲ得可
 シト出納院長之ニ反抗シテ動議ヲ否決ス千八百六十五

年三月二十一日シヨリダンハ再ヒ保險ス可キ財産ハ皆ナ
一「シリング」半ノ割合ニ減税スルヲ可トスル旨ノ動議ヲ
起シ痛ク出納院長ノ駁論ヲ受クト雖ヒ終ニ下院ヲ通過
セシムルヲ得タリ全年四月二十七日出納院長ハ豫算
書ヲ提出スルニ方リ下院ニ告テ曰ク當院ノ見込既ニ此
ノ如ク明白ナル以上ハ政府モ之ヲ容レ來ル六月二十五
日ヨリ本税ヲ減セテ悉ク一「シリング」半ノ基本ニ改ム可
シトモ「エリダント」其朋友トハ尙ホ之ニ満足セス千八百六
十六年ノ會期ニ際シ「エリダント」ハ「バード」ノ二氏ハ該税ニ
關シテ各々一個ノ動議ヲ提出セント欲スル由チ演フ乃
チ海關及ヒ内國稅議案ノ第二讀會ヲ開ク可シトノ動議
アルニ方テ「ハッバード」先ツ修正說ヲ提出シ諸般ノ理由ヲ

麥芽稅

舉テ火災及ヒ海上保險ニ係ル現稅額ヲ内國稅ノ一部ト
シテ存續スルヲ不可トス暫時ノ討議後修正說ハ否決セ
ラレタリ
千八百六十四年六月二十四日「モーリット」ハ供度委員會ヲ
開ク可シトノ議起ルニ際シ修正說ヲ提出シテ尙モ本邦
ノ間稅ヲ改正ス可キ企アルキハ麥芽稅モ亦省慮ヲ要ス
ル旨ヲ決議セシヲ主張ス出納院長ハ此類ノ動議ニ對
シテ向キニ用セタルト同一ノ論法ヲ以テ之ニ反抗シ終
ニ之ヲ否決セシムルヲ得タリ千八百六十五年三月七日
「サー、フットロイ、ケレー」ノ同様ノ決議案ヲ提出スルヤ下院
ハ再ヒ之ヲ否決スト雖ヒ全年四月二十七日豫算書ヲ提
出スルニ方テ出納院長ハ稍ヤ該稅ノ反對論者ヲ慰メン

カ爲メ容度ニ因テ麥芽稅ヲ課セズ重量ニ因テ之ヲ課セ
 ント欲スル旨ヲ告ケタリ反對論者ハ此些細ナル讓與ヲ
 以テ満足セズ千八百六十六年四月十七日キー、エフ、クレー
 再ヒ直チニ該稅ヲ全廢スルヲ可トスルノ決議案ヲ提出
 シ久シキ討論ヲ經テ否決セラレ
 執政官ハ收稅ノ事項ニ就テ其意見ヲ問ハル、コアルモ公
 利上之ヲ明言シテ可ナリト思惟スル迄ハ質問ニ答フルヲ
 要セス是レ憲法上不易ノ制規ナリ
 國王既ニ海關稅改正ノ全体ノ問題ヲ下院ニ下附スルハ
 下院ハ全院委員會ヲ開テ之ヲ議ス此際修正說ヲ發シテ該
 稅ノ増額若シハ減額ヲ主張スルヲ得可キハ言フニ及ハス
 新稅額ヲ附録中ニ記入セシムモ亦之ヲ求ムルヲ得可シ但

執政官ニ對ス
 ル收稅上ノ質
 問
 政府ノ收稅法
 案ニ對スル修
 正說

徵收委員會
 供度委員會

シ既ニ附録中ニ掲記セラルタル物品ニ對スル課稅ニ限ル
 ナ要ス又下院カ一年度中ノ經費ヲ供給セシムカ爲メ徵收委
 員會ヲ開シキハ議員ハ皆ナ別ニ收稅法案ヲ發議シテ政府
 ノ法案ニ換ヘンコトヲ主張スルヲ得可シ然レ出納院長カ
 免許稅ヲ釀造人ヨリ徵收セシムコトヲ發議スルキハ在野議員
 ハ之ヲ修正シテ他ノ製造人、鉄鑛、石炭鑛ノ持主等ヲ推及ス
 ルコトヲ得ス何トナレハ是レ新奇且ツ別種ノ課稅ニシテ單
 ニ政府ノ既ニ勸薦セル一物品ノ課稅ヲ増加スル者ニ非サ
 レハナリ
 當テ全院委員會ニ於テ印紙稅ヲ議スルニ當リ某議員ハ政
 府ノ發議セル廣告稅率ヲ不可トシ全ク之ヲ廢棄スルヲ得
 タルコトアリ、又千八百六十二年五月十二日海關及ヒ内國稅

議院ノ供度許

議案ノ委員會ヲ私用ニ供スル麥酒釀造稅ヲ否決シタルニ
 政府ハ下院ノ意見ニ從テ之ヲ承諾セリ豫算書ニ掲ケタル
 租稅中一般ノ不満足ヲ招ク者アルニ方リ政府ハ他日ニ及
 ノテ之ヲ除クコト決議シタル旨ヲ下院ニ告クルコト少ナカラ
 ス

吾人ハ今後先例ヲ揭テ千八百三十二年ノ議院改革以來政
 府理財上ノ發議カ下院ノ爲メニ如何ノ變更ヲ被リシカチ
 明示スルコトアル可シ

第三章 公務ニ對スル錢貨ノ許與及ヒ公費ノ監視、管
 理ニ於ケル議院(特ニ下院)ノ權理及ヒ特有權

甲 供度ノ許與ニ對スル議院ノ管理

収稅及ヒ公務ニ對スル供度許與ヲ以テ特ニ議院ニ屬スル

與

權理ト確認セルハ近今ノ事ニ非ス溯テ英國史ヲ查スルニ
 其起源甚タ遠シ

古昔國王ハ其意思ニ依テ臣下ニ課稅スルノ特權ヲ主張セ
 シカ彼ノ有名ナル「マグナ・カルタ」出テ、ヨリ何等ノ租稅及
 ヒ補助金モ我カ王國ノ大會議ノ可決ヲ經ルニ非スンハ之
 ナ賦課スル能ハサルコト爲レリ之ヲ明カニ租稅賦課ノ王
 權ヲ限制セル始ト爲ス

此讓與ハ我カ議院制度特ニ立法府ノ一部タル下院ノ根基
 ニ云フ可キ者ニシテ下院ノ權力勢力ノ大ニ増加セルコトハ
 エドワード第一世即位二十五年ノ租稅令ニ徴シテ知ルチ
 得可シ其令ニ云ヘルアリ何等ノ租稅及ヒ補助金モ大教正、
 教正、アールバロンナイトバルグツス侯、伯、士、邑民、其他自由人民ノ好意并ニ承諾ナリシテ

議院ノ許與スル者ニ非スハ何レノ供度

之ヲ徵収賦課スルコトナル可シト
議院既ニ収稅權ヲ握レル後モ國王ハ議院ノ可決ヲ經スシテ或ル種類ノ租稅ヲ賦課セシカ千六百八十八年ノ革命後復タ此ノ如キコトナシ權理法典ニ曰ク何人モ議院ノ決議ニ依レル共同ノ承諾ナクシテ贈與、貸金、冥加金、租稅等ヲ納ムルコト強迫セラレサル可シト次テ繼嗣令出テ更ニ此趣旨ヲ確定シテ曰ク議院ノ認許ナク、單ニ特權ヲ以テ王室用ノ錢貨ヲ、既ニ認許セラレ若クハ向後認許セラル可キヨリ、一層長キ時期間若クハ他ノ方法ニ於テ賦課スルハ不正ナリト
爾後國王ハ全ク議院ニ頼テ其歲入ヲ得ルコト爲レリ此歲入ノ出所ニニアリ一ハ特段ナル公務ノ爲メ年々議定スル

モ之ヲ使用スルヲ得ヌ

所ノ許與ニシテ一ハ豫メ議院ノ決議ヲ以テ定メタル支辨ナリ世人通常之ヲ稱シテ併合資金ニ係ル賦課ト云フ
世人ガ支那ノ役ニ際シテ政府ノ受領セル廣東府ノ贈金ヲ認テ陸海軍ノ勇敢ニ因テ得タル通常ノ分捕金ハ其特權ノ德ニ因テ陛下親ラ之ヲ配與シ給フト雖也議院ノ許可ナク公費ニ供スルヲ得サル者ト爲セルハ畢竟右ノ主義ニ基クナリ且ツ政府ガ錢貨ノ贈與若クハ貸與ヲ請求スルコト禁スル所ノ主義ハ之ヲ推擴シテ議院ノ認許ナク人ノ自ラ好シテ公用ノ爲メ國王若クハ諸官局ニ錢貨ヲ貸與スルコト禁シ犯ス者ハ輕違罪ヲ以テ問フニ至レリ英國銀行ノ命令書中明カニ議院ノ認許ヲ經スシテ該銀行ト大藏省トノ間ニ錢貨ノ取引ヲ爲スコト禁スル條款アリ

ハ特段ノ議院ノ許與ニ非スル者ニ非スハ何レノ供度
豫メ議院ノ決議ヲ經テ
公費ニ供スルヲ得サル者ト爲セルハ畢竟右ノ主義ニ基クナリ且ツ政府ガ錢貨ノ贈與若クハ貸與ヲ請求スルコト禁スル所ノ主義ハ之ヲ推擴シテ議院ノ認許ナク人ノ自ラ好シテ公用ノ爲メ國王若クハ諸官局ニ錢貨ヲ貸與スルコト禁シ犯ス者ハ輕違罪ヲ以テ問フニ至レリ英國銀行ノ命令書中明カニ議院ノ認許ヲ經スシテ該銀行ト大藏省トノ間ニ錢貨ノ取引ヲ爲スコト禁スル條款アリ

貸下
國王ニ返納ス
可キ負債

千八百六十二年四月二十八日下院ニ於テ軍事豫備金ニ
係ル議論起ル此資金ハ陸軍ノ御用株ヲ賣テ蓄積セル者
コシテ今日ハ既ニ巨大ノ額ニ達セリ軍務部國務尙書ハ
之ヲ或ル目的ニ適用シタルニ世人皆ナ其不可ナラサル
ヲ認承ス然レヒ議員中議院ノ議決セズ議院ノ管理ニ屬
セズ唯々政府ノ意見ヲ以テ恣ニ費用スルヲ得可キ資金
ノ存在スルヲ不可トシ憲法上大ニ之ヲ攻撃セル者アリ
タリ軍務尙書ハ此非難ヲ以テ理アリト爲シ議院ヲシテ
該資金ヲ調査檢閲スルヲ得セシメンカ爲メ政府ノ該疑
問ニ注意ス可キ旨ヲ約セリ

議院管理ノ憲法上ノ主義ハ亦外國會社若クハ私人ニ對ス
ル立替貸下若クハ贈與ニ適用スルヲ得可ク斯ル人若クハ

政府ノ財産ノ
賣買

公金ノ繰替

右ノ賣買後議院

之ヲ非難ス

軌跡實ハ只ニ内閣ヲ
將シテモ

貸金及ヒ王室
ニ對スル負債

國ヨリ國王ニ係ル負債ノ返納ニ適用スルヲ得可シ彼ノ一
官局ガ財産ヲ賣リ他官局ガ公用ノ爲メ之ヲ買フカ如キモ
亦事ノ議院ノ管理ヲ受ク可キ者ナリ
何等ノ目的ニ向テスルモ公金ノ立替ハ通常議院ノ認許ニ
因テノミ爲ス可キ者トス然レヒ事態切迫シテ急速ノ扶助
ヲ要シ若クハ政策上秘密ヲ可トスルモ政府ハ先ツ豫備
金ニ依頼シテ一時ノ急ニ應スルヲ得可シ政府ハ議院ニ對
シテ嚴ニ此等ノ措置ノ責任ヲ負擔ス豫備金ヨリノ繰替ハ
他日議院ノ之カ爲メニ議決セル金額ヲ以テ之ヲ辨償セサ
ル可ラス

政府ハ議院ノ認知承諾ヲ經スシテ貸金ヲ放棄シ若クハ外
國會社私人等ヨリ王室ニ係ル負債ヲ放棄スルヲ得ヌ又

等ハ議院ノ認
許ヲ經スシテ
之ヲ放棄スル
ヲ得ス
外國ニ對スル
貸金

所有主ナキ財貨ヲ發見スル者アルニ方リ之ヲ發見者ニ與
ヘテ王室ノ權理ヲ放棄スルヲ得ス但シ王室費整理規則ヲ
以テ認許セラレタル者ハ此限ニ非ス且ツ外國ニ對スル貸
金ニ係ル政府ノ慣行ハ從來稍ヤ亂雜ニシテ非議ス可キ者
アリ左ノ事例以テ之ヲ証ス可シ
千八百六十三年英政府ハイチニアン諸島ヲ希臘王國ニ讓
與スルニ方リ豫メ議院ノ認許ヲ經スシテ該島ヨリ大藏省
ニ納ム可キ延滞金ノ一部ヲ放棄セリ千八百六十四年七月
廿七日下院中之ヲ譴責スルノ動議ヲ起ス者アリシニ出納
院長ハ數種ノ先例ヲ舉テ政府ノ措置ヲ辨護ス然レモ之ヲ
辨護スルト同時ニ斯ル場合ニ於ケル從來ノ慣行ヲ改良ス
ルヲ得可キヤ否ヤハ一個ノ疑問ナルヲ認承セリ千八百

二十三年政府ハ從前ノ約束ニ因テ澳國ノ英國ニ拂渡ス可
キ一層ノ大額ノ代リニ二百五十万磅ヲ受領スルヲ承諾
ス翌年迄ハ此措置ヲ議院ニ下附セカリシモ翌二十四年
ヨリ四世第五種第九號ノ議定法ニ因テ議院ノ認許ヲ得タ
リ葡葡國ヨリ英政府ニ係ル負債ハ豫メ議院ノ認許ヲ經ス
千八百十五年ノ條約ニ因テ放棄セラレタリ之ヲ約スルニ
出納院長ハ斯ル場合ニ於ケル憲法上ノ慣行ヲ下ノ如ク説
明セリ曰ク英王ノ受領ス可キ錢貨ヲ棄却スルハ條約ヲ
以テ之ヲ棄却スルヲ常トス而シテ此條約ハ議院ノ認許有
テ初テ結フヲ得可キ者ニ非ス憲法上ヨリ觀察スレハ議
院ノ認許ヲ得ルヲ必要ナリト雖モ條約ニ先テ必スシモ之
ヲ受ケサル可ラサルノ例規アルニ非ス然レモ國王若シ或

右ノ見ルニ
 爲リルヤ明
 然レモ物
 コレヲ許
 孰シ官
 何

供度許與ニ係
 ル下院ノ權理

ル金額ヲ支拂ハント欲スルキハ先ツ議院ノ認許ヲ受クル
 事常トスト此等ノ説明後勳議者自ラ政府譴責ノ説ヲ引ケ
 リ後チ政府ハ希臘ヨリ英國ニ係ル負債中ヨリヘレンス王
 シヨ一セ一世ヘノ贈與金トシテ一年四千磅ヲ扣除ス可シト
 云ヘル希臘トノ條約ヲ實行セント欲シテ之カ議案ヲ提出
 シ異議ナク兩院ヲ通過セシムルヲ得タリ
 供度ト収税トノ事項ニ係ル處置ニ於テハ上下兩院ハ全ク
 同等ノ位地ニ立ツ者ト云フ可ラス此類ノ處置ニ法律上ノ
 効力ヲ與ヘント欲セハ固ヨリ兩院ノ承諾ヲ得サル可ラス
 ト雖モ下院ハ往古ヨリシテ此類ノ處置ヲ創起スルノ全權
 ヲ固執セリ加之ナラス下院ハ上院ノ毫モ斯ル處置ヲ修正
 セシテ單ニ之ヲ確定シ若クハ拒絕センコトヲ主張シタリ

供度ニ係ル上

上院ハ公然斯ル制限ヲ承受スルコトナカリシト雖モ實際之
 ニ依從セリ供度ノ事項ニ關シテ兩院間ノ爭ト爲レル疑問
 ハハッソルノ先例錄第三卷及ヒメノ議院典例ニ之ヲ論
 スルコト詳ナルカ故今マ茲ニ之ヲ論スルヲ要セス一言以テ
 今日ノ此項ニ於ケル兩院間ノ措置ハ全ク千六百七十八年
 七月三日ノ下院ノ決議ニ一致スルコトヲ記スレハ足レリ該
 決議ニ曰ク補助ト供度トハ悉ク下院ノ議定ス可キ者ナリ
 如何ナル補助供度ニテモ之ヲ許與スル爲メノ議案ハ悉ク
 下院ノ創起ス可キ者ニシテ下院ハ斯ル議案中ニ斯ル許與
 ノ終局ノ目的理由、情狀、制限、性格ヲ指示命令スルノ全權ヲ有
 ス而シテ上院ハ之ヲ變更修正スルヲ得スト
 上院ハ其意見ニ從テ供度収税ノ議案ヲ處理ス可キ權理ヲ

棄却セルコ非スト雖也常ニ此等ノ議案ニ關スル下院ノ權理ヲ尊重シ偶々變更スル所アルモ其意旨目的ニ關係セサル字句文章ノ修正ニ過キス斯ル場合ニ於テスラ上院ハ特ニ議事録ニ一欄ヲ設テ修正ノ性質目的及ヒ之ヲ可決セル所以ノ理由ヲ明記ス

近年精巧ノ論理法ヲ以テ上院ノ租稅賦課ノ議案ヲ拒絕ス可キ權理ト租稅廢止議案ヲ拒絕ス可キ權理トノ間ニ區別ヲ立テント企タル者アリ議論精巧ト雖也是レ虛偽ノ論法ノニ先例ト云ヒ憲法ニ曉達セル學士ト云ヒ共ニ此區別ヲ可認セサルナリ強テ論者ノ據テ以テ此區別ヲ立ント欲スル所ノ者ヲ尋ヌレハ茲ニ一事アリ則チ國王若シ責任財務官ノ忠告ニ基テ或ル租稅ヲ廢セント欲シ下院之ニ同意ス

ルニ方リ通常上院ハ之ニ反對セサルコ是レナリ蓋シ財務ヲ管理スルハ下院憲法上ノ權理ニシテ下院ハ世人ノ認テ國家理財上ノ形勢其義務需求等ノ最良ナル判定者ト爲ス所ノ者ナリ且ツ課稅廢稅ノ議案ハ單ニ收入増減ノ疑問ヲノミ包藏スル者ニ非ス國家政策上ノ主義若クハ商業整理ノ主義モ亦必ス之ヲ含蓄ス立法府ノ一部タル上院ハ憲法上此等ノ諸点ニ於テ其最モ國家ニ利益アル可シト考フル所ノ意見ヲ可決シ及ヒ勸薦ス可キ自由アルコ固ヨリ辨テ待タス下院ハ供度稅ニ關シテ一種ノ特許權ヲ有スルカ故能ク上院ヲ牽制シテ政府之ヲ立案シ下院之ヲ可決セル理財事務ノ細目ニ干涉セサラシムルヲ得可シ然レ也是レ唯々常ニ就テ謂フノニ若シ變ニ就テ論スレハ上院ガ國家

紙稅事件

ノ財務ニ關スル事項ヲ承受シ若クハ拒絕ス可キ權理ヲ使
用スルカ爲メニ社會ノ大利ヲ來スナシトセズ斯ル場合
ニ於テハ上院固ヨリ此權理ヲ使爾セサル可ラス唯タ之ヲ
使用ス可キ場合稀少ナルノ故ヲ以テ上院ニ此權理ナシト
謂フハ余輩未タ其可ナル所以ヲ知ラサルナリ
供度ト収稅トニ於ケル上下兩院ノ關係ハ左記ノ事例ニ
因テ一層明瞭ナルヲ得可シ余輩既ニ記セルカ如ク千八
百五十八年下院ハ單特ナル決議ヲ以テ歲入ノ永久ナル
一源トシテ紙稅ヲ存續スルノ不可ナルヲ論セリ故ニ出
納院長ハ千八百六十年豫算書ヲ提出スルニ方テ該稅廢
止ノ法案ヲ下附シ後々之ヲ一個分立ノ議案トメ上院ニ
回セリ當時紙稅ハ一年百三十万磅ノ大額ニ上レルカ故

紙稅事件

其損失ヲ補ハンカ爲メ政府ハ一磅ニ付キ二片^ニノ割合ヲ
以テ收入稅ヲ増加ス可シト發議シタルニ上下兩院共ニ
之ニ同意ス上院ハ收入稅增加ノ議ニ同意シタルニ紙稅
廢止ノ議ヲ拒ンテ曰ク今ヤ國庫別ニ餘裕ナフシテ經費
ヲ要ス可キ事項ハ則チ多ク且ツ支那トノ和親將ニ破レ
ントスルノ勢アリ此時ニ方テ斯ク多額ノ歲入ヲ廢棄ス
ルハ得策ニ非スト加之ナラス紙稅廢止ヨリ生ス可キ諸
般ノ弊害ヲ枚舉シテ其不可ナル所以ヲ痛論セシカハ遂
ニ該案ノ二讀會ニ際シテ六ヶ月間之ヲ中止スルト爲
レリ下院ハ委員ヲ命ジテ該案ノ成行キヲ查問セシメテ
其六ヶ月間中止セラレタルヲ知リ更ニ委員ヲ命ジテ
租稅ヲ賦課シ若クハ廢止ス可キ諸種ノ議案ニ係ル議院

ノ慣行ヲ確知セシカ爲メ記録ヲ探尋セシム此委員ハ六月二十九日ヲ以テ夥多ノ先例ヲ報告シタレハ唯々事實ヲ説明セルノミヨテ別ニ意見ヲ述ヘス又兩院ノ慣行ニ論辨ヲ容レサリキ七月五日大宰相ロード、バーノルストン下院ニ左ノ決議案ヲ提出ス

第一 國王ニ補助及ヒ供度ヲ許與スルノ權理ハ其性質、上下院ノ專有ス可キ者トス其主旨、方法、金額、期限ニ關シテ悉皆ノ斯ル許與ヲ限制スルノ權理モ亦下院ノ專有ス可キ者トス

第二 上院ハ其全部ヲ否決シ以テ収税ニ係ル諸種ノ議案ヲ拒絕スルノ權理ヲ使用シタリト雖モ其例証多カラズ下院ハ常ニ猜疑ノ念ヲ以テ之ヲ見ル蓋シ供度ヲ許與

シ一年間ノ經費徵収法ヲ定ム可キ下院ノ權理ニ影響スレハナリ

第三 向後上院ノ該權ノ不當ナル使用ニ對シテ防衛シ且ツ収税ト供度トニ關シテ其正當ナル管理權ヲ下院ニ保有セシメンカ爲メ本院ハ租税ヲ賦課シ廢止シ供度ノ議案ヲ編制スルノ權力ヲ掌握シ以テ其主旨、方法、金額、期限ニ係ル下院ノ權理ヲ防護シテ毀傷セサラシム可シロード、バーメルストンハ唯々右ノ單特ナル發言ヲ可決セント欲セルノミヨテ別ニ紙稅廢止ニ關スル處置ヲ施スノ意ナカリキ何トナレハ上院ノ法律上該議案ニ對シテ同意ヲ拒ム可キ權理アルハ政府モ之ヲ爭ハサリシヲ以テナリ則チ政府ハ之ヲ爭ハスト雖モ此等ノ決議案採

用ニ含蓄セラレタル評議ハ之ヲ記録ニ留メテ衆人ニ示サ、ル可ラスト思考セリ下院ハ充分ノ討論後七月六日ヲ以テ右ノ決議案ヲ同意ス今討論ノ際盛ンニ主張セラレタル諸点ヲ擧シレハ曰ク第一ノ決議案ハ千六百九十二年ノ下院議事録中ノ先例ヨリ寫セル者ノ如シ其大意粗ホ正シト雖モハラムハ其憲法史於ニテ「字句通り」ニ主張シ若クハ可認スル能ハサル者ナリ何トナレハ供度ノ事項ニ於テ自由ニ同意ス可キ上院ノ權理ヲ非認スルノ觀相アレハナリ」ト云ヘリ果シテ然ラハ第二決議案ノ旨趣ニ反對セサランヤ上院モ供度議案ヲ創起スルハ下院ノ特權ナルヲ承認セリト雖モ曾テ公然是ヨリ以上ノ特權ヲ認承シタルヲナキハ世人ノ熟知スル所ナル可シ

且ツ上院モ實際ニ於テハ「錢貨議案」皆ナ之ヲ變更修正ス可ラス」ト云ヘル下院ノ要求ヲ默認セルコ久シト雖モ斯レ議案ノ全体ヲ拒絕ス可キ權理ハ恰モ之ニ同意ス可キ權理ノ依然欠損スル所ナキカ如シ「稅權」ハ下院ノ特ニ操持ス可キ權理ニシテ一年ノ經費支出ヲ議スルニ方リ若シ適當ト思考セハ諸案ヲ合シテ一案ト爲スハ其特權ナリ是レ世人ノ認許スル所ナルノミナラス上院ハ下院ノ回附セル財務上ノ事項ヲ變更修正セスシテ單ニ之ヲ承受若クハ拒絕セサル可ラサルヲモ亦世人ノ認承スル所トス然レモ斯レ處措ハ何レノ場合ニ於テモ痛ク不當不便ト攻撃セラル、コアル可シ余輩既ニ「バーマ」ノ件ニ於テ記セルガ如ク下院ハ議論ヲ招クノ恐レアル報

酬ヲ或ル人物ニ與ヘントスルコ方リ之カ爲メ別ニ一議案ヲ編制シタリ其目的固ヨリ上院ヲシテ他ノ經費ト區別シテ該許與ヲ討議セシムルニ在リ之ト同シク政府ノ極テ重大ナル財務上ノ發言ニ於テモ上院ハ皆々其全体ノ便宜ト國家ニ生ス可キ大體ノ結果トヲ判斷スルノ權理アルノミナラス亦其細目ニ掲記セラレタル商業上ノ立法事務ト公ケナル政策トノ諸疑問ヲ審査ス可キ權理ヲ有ス下院ヨリ來ル所ノ議案ハ其性質如何ヲ問ハス上院皆々之ヲ點檢シテ急激粗忽ナル立法ヲ牽制シ其智慮勢力威權ニ因テ公利ニ必要ナル處置ヲ制許セサル可ラス故ニ上院ノ諸議案ニ關シテ盡ス可キ職任ハ甚々繁多ナリトス然レモ之ニ充分ノ機會ヲ與ヘ各個ノ疑問ニ對

紙稅事件

シテ獨立不羈ナル判斷ヲ下サシムルコ非スハ上院ハ充分ニ此職任ヲ盡ス能ハス是レ上院モ亦適宜ノ權力ヲ有セサル可ラサル所以ニ非スヤ
 七月十七日ロイド、フェルモイ下院ニ決議案ヲ提出シテ曰ク上院ノ紙稅廢止議案ヲ拒絕シタルハ下院ノ權理ト特權トヲ蠶食セル者ナリ故ニ當院ハ斷然タル處置ヲ施シテ其權理ト特權トヲ保護セサル可ラスト氏ハロイド、パーナルストシノ發言セル第一ノ決議案ヲ以テ其論據ト爲シタレモ該決議案ハ決シテ正當ノ者ニ非スハラムノ豫メ弊害アラシキ慮ヲ非難セル所ノ者ナリ加之氏ハ斷然タル處置ヲ以テ之ニ次クノ必要ナルヲ論セシカ故政府ハ右ノ決議案ニ反對ノ之ヲ否決セシムルヲ得タリ

翌千八百六十一年ノ會期ニ際シ出納院長ハ前ニ舉ケタル第三決議案ノ主題ニ從ヒ豫算書ニ關スル悉皆ノ發言ヲ蒐集シテ一議案ト爲ス紙稅廢止ノ決議案モ亦其中ニ在リ下院少數ノ有力者ハ大ニ之ヲ不可トシ五月十三日ト十六日トニ於テ盛ニ之ヲ論議セリ今其要畧ヲ舉レハ曰ク斯ル處置ノ先例ニ合スルヲ疑フ容レヌシテ固ヨリ一歲間ノ理財事務ヲ處理スルニ際シテ施シ得可キ方法ナルヲ辨テ待テヌト雖ヨ前三四十年來ノ慣行ハ常ニ出入豫算書ニ係ル發言ヲ數多ク議案ニ編制セリ曰ク其旨粗ク同シト雖ヨ尙ホ租稅ノ廢止賦課ニ係ルカ如キ諸種ノ事項ヲ一議案ニ包含スルハ吾人ノ願フ所ニ非ズ曰ク其重立タル議員ニシテ錢貨議案ヲ修正スルヲ非認シ

紙稅事件

タルヲアラン然レモ上院ハ未ダ公然錢貨議案修正ノ權理ヲ棄却セサルナリ曰ク好シ一步ヲ退テ上院斯ル權理ヲ操執スルキハ供度ニ係ル下院ノ特權ヲ侵害ストセシ平憲法上ノ權力平均ハ上院ガ其理財ニ關スル者ナルト否トテ問ハス立法上ノ方般ノ事項ニ對シテ管理權ヲ保有セシヲ要ス又上院ヲシテ一年間全体ノ供度ヲ拒絕スル乎將ヲ悉ク之ヲ承受スルコ意ヲキ諸種分立ノ事項ヲ包藏セル一議案ニ同意スル乎二者其一ニ出サル能ハクヲシムルカ如キヲナキヲ要ス蓋シ全体ノ供度ヲ拒絕スレハ爲ニ公ケノ信用、内閣ノ存立及ヒ國家ノ幸福ヲ危急ナラシムルノ恐アリ妄ニ之ニ同意スルハ其職任ト良心トニ背クヲ恐アルヲ以テナリ曰ク若シ極端ニ走テ之ヲ

求ムレハ下院固ヨリ出入豫算ニ係ル悉皆ノ事項ナ一議
 案ニ包含スルノ權理アル可シト雖此權力ハ唯々非常
 ノ場合ニ於テノミ用ウ可ク尋常一般ノ時際ニ於テ用ウ
 可キ者ニ非ス之ヲ用ウレハ上院ハ爲メニ各個別種ナル
 立法上ノ發言ヲ審案熟議シテ其可否ヲ判斷スルノ機會
 ナ失フ可シ蓋シ上院ハ下院ノ可決シタル議案ヲ拒絕ス
 ルノ權理アルカ故之ヲ使用スレハ以テ諸般ノ事項ヲ包
 合セル議案ノ可否ヲ熟議判斷スルヲ得可シ然レ此權
 理ハ上院ノ極端ノ權理ニシテ准々非常特別ノ場合ニシ
 キ用ウ可キ者ナリ曰ク一ヒ上院ノ爲メニ拒絕セラレヨ
 ヲ理財議案ハ他日之ヲ別種ノ議案中ニ編入シ之ヲ上院
 ニ回附シテ可決セシルムヲ得タル先例ナシト之ヲ要

紙稅事件

スルニ下院少數ノ有力者ハ政府ノ採用セル方途ヲ以テ
 早計ニ失スル者ト爲シ斯ル處置ハ數々一個分立ノ議案
 ニ於テ上院ヲシテ紙稅廢止ニ同意セシメント欲シテ奏
 功セサリシ後ニ非スンハ施用ス可ラサル者ト爲セリ然
 ルニ政府ハ之ヲ聽カス毫モ改易スル所ナクシテ該案ヲ
 上院ニ回附シ上院ハ六月七日ヲ以テ其二讀會ヲ開ク
 動議ヲ起ス時ニテルビ一侯ハ該議案ヲ以テ形式上非難
 ス可キ者ト爲スト雖此尙ホ一歲間悉皆ノ財務上ノ事項
 ナ一議案ニ包含ス可キ下院ノ嚴正ナル權理ヲ論争セサ
 リキ其言ニ曰ク上院若シ之ヲ便宜ト考フレハ議案ヲ二
 三個ニ分析シテ其特權ヲ保護スルヲ得可キ且ツ上院ハ
 決シテ公然錢貨議案ヲ修正ス可キ權理ヲ棄却シタルニ

非ス故ニ審議ノ自由ヲ保護シ及ヒ其不可行ナル措置ノ通過ヲ防制スル其必要ナレバ直チニ議案ヲ分析シテ可ナリ是レ著名ナル憲法學士ニ皆テ認承スル所ナリト候ハ許多ノ實例ヲ引テ其説ヲ証明シ更ニ一言ヲ附加シテ曰ク上院カ財務上ノ處置ヲ修正シ下院入之ヲ承受セル例証甚ク多クト此等ノ非難ニモ拘ハラス該議案ノ通過ヲ妨ケ若クハ之ヲ修正セント企タル者ナク反對論者モ唯々之ヲ對シテ演ヘタル精巧適切ナル議論ヲ記録ニ留ムルヲ以テ満足セリトウルヨシカハ其千八百六十二年ノ議院行事錄ニ於テ紙稅論ノ始レル頃ハ上院ヲ非難スルモ紙稅廢止案ヲ豫算書中ニ編入スルニ及ヒ下院ノ措置ヲ咎斥セテ「普通ノ禮讓ト自重トモ欠ク」前兆ト

議院
云々

出入豫算ニ係ル悉皆ノ事項ヲ一議案ニ包含ス

紙稅事件

云ヘリ氏又曰ク是レ實ニ下院若シ適宜ニ討議セシムレハ拒絕セラル、ノ恐アル議案ヲ通過セント欲スルハ何時ニテモ上院ヲ凌駕ス可シト明言スルニ異ナラサル措置ナリト
右ノ如クシテ確立シタル先例ニ從ヒ出納院長ハ千八百六十二年度ノ出入豫算ニ係ル諸項目ヲ一個ノ議案ニ編制シテ提出セント決意ス重立タル下院議員中之ヲ以テ重要ナル財務上ノ事項ヲ討議スルノ機會ヲ限制スル者ト爲シ大ニ其不可ヲ爭フト雖モ奏功セズ該案ハ一個ニシテ二千三百萬磅ノ金額ヲ包藏セリ是レ古來下院ニ提出セラレタル錢貨議案ノ最モ鉅額ナル者ナル可シ上院ハ非常ノ大額ヲ一案中ニ包藏セルノ故ヲ以テ深ク之ヲ論駁セルニ殖

民部尙書ニコラス侯之ニ答テ出入豫算ニ係ル悉皆ノ項目ナ一議案ニ包含スルハ新法ノ如クニ見ユレド決シテ然ラス其實唯タ前時憲法上ノ慣行ヲ復習セルニ過キスシテ而モ憲法學士ノ皆ナ可認スル所ナル由ヲ説ケリ時ニコロド、デルビー論シテ曰ク此議案編制法ハ下院カ掌握スル所ノ最モ重要ナル權理タル充分ニ政府ノ財政事務ヲ討論審議スルノ權理ヲ奪フカ故ニ上院ヨリ寧ロ下院ノ非難ヲ受ク可キ者ナリ財政ニ係ル諸般ノ事項チ一議案ト爲スモ數個ノ議案ト爲スモ上院ニ取テハ左迄ノ關係ナシ何トナレハ一箇ノ議案ニ於ケル格段ナル發言ヲ拒絕スルハ上院權限内ノ事ニシテ同一ノ發言設ヒ他ノ發言ト併合セラル、モ亦之ヲ拒絕シ以テ下院ヲシテ其行爲ノ責ニ任セシムル

チ得可レハナリト爾後多少ノ討論後議案ハ修正セラル、所ナクシテ通過ス之ト同シク千八百六十三年、全六十四年、全六十五年、全六十六年ノ會期ニ於テ政府ハ毎ニ財務上ノ諸項目チ一議案ニ編制セシモ別ニ大議論ナク唯タ千八百六十六年五月十七日チスレーリノ之ヲ評シテ非常ノ不便チ生ス可キ方法ナリト云ヘルアルノミ
余輩ハ既ニ供度ノ事項ニ對スル立法ニ府ノ關係ヲ略述シタリ是ヨリ進ントテ國家錢貨上ノ急要ヲ下院ニ下附シ及ヒ議院チシテ之カ爲メニ要スル所ノ經費ヲ制許セシムルニ方テ執行ス可キ方法ヲ細説セン
下院ハ國王ノ演說アレハ直チニ之ニ對シテ奏議ヲ上ルコ
チ決議シ該演說ノ如キハ議長他日チ期シテ之ヲ審案ス可

供度委員會ノ

キヲ命ス期日ニ至レハ議長該演說中經費豫算ニ係ル部分ヲ朗讀シ然ル后ヲ國王陛下ニ供度ヲ許與ス可シトノ動議起ル此際下院ハ他日ヲ期シテ該動議ヲ審案センカ爲メ委員會ヲ開ク可キ旨ヲ決議シ此委員會ニ附スルニ國王ノ演說ヲ以テス議長ハ豫メ供度ヲ許與ス可シトノ動議ヲ修正ス可ラス又其初テ發言セラル、ニ方テ之ヲ討議セズ其審案ノ爲メニ定メタル期日ニ於テノミ討議ス可キ旨ヲ命ス下院ハ豫定ノ期日ニ委員會ヲ開キ演說ヲ審案シ又國王陛下ニ供度ヲ許與ス可シトノ決議案ニ同意シ他日之ヲ報告スレハ全院異議ナク之ニ同意ス此決議案ノ採用セラル、迄ハ執政官ハ下院ニ經費豫算ヲ下附スル能ハス

既ニ供度許與ヲ可トスルノ惣體議ヲ決スレハ下院ハ更ニ

經費豫算ニ係
部分トス
委員等
ノ旨ヲ命ス
下院ハ更ニ

任命

他日ヲ期シテ許與セラレタル供度ヲ審案センカ爲メ委員會ヲ開ク所謂ル供度委員會ナル者是レナリ是ニ於テ下院ハ陸海軍ノ經費豫算書ヲ請求シ且ツ奏議ヲ上テ之ニ關スル説明ヲ請求ス

徴収委員會

下院既ニ供度委員會ノ第一報告ヲ受テ之ニ同意スレハ他日ヲ期シテ許與セラレタル供度ヲ徴収スルノ方法ヲ審案ス可キ委員會ヲ開ク所謂ル徴収委員會ナル者是レナリ

財政報告

出納院長ハ通常徴収委員會ニ於テ財政報告ヲ爲ス千八百三十三年ヒ、供度委員會ヲ開クカ爲メ議長其席ヲ去ラント云ヘル動議ニ對シテ修正說ヲ起ス其目的蓋シ出納院長ニ追テ陸海軍ノ經費ヲ議決スルノ前先ツ財政報告ヲ爲サシムルニ在リ修正說ハ異議ナク否決セラレタリ然レ

未タ該年度ノ經費豫算ヲ議決セサルニ方テ財政報告ヲ
 供度委員會若クハ徵収委員ニ爲セルノ例証ナキニ非ヌメ
 一ハ多ク斯ル例証ヲ引舉セリ
 今マ財政報告ヲ爲スニ方テ遵守セラル、所ノ慣行ヲ零記
 セシニ各會計年度將ニ終ラントスルノ前若クハ既ニ終レ
 ルノ後直チニ出納院長ハ下院ニ於テ前年度ノ財政事務ト
 明年度ノ出入豫算トヲ説明ス之ヲ説明スルニ方テ出納院
 長ハ亦政府ノ或ル租稅廢止ヲ發言シ若クハ課稅、公債、其他
 ノ方法ニ因テ錢貨ヲ徵収セントシテ發言スルノ意アルヤ否
 ヤヲ告知ス前年ト次年トニ係ル此財政上ノ説明ハ下院ニ
 與フルニ執政官ノ上ニ重要ナル牽制ヲ使用スルニ必要ナ
 ル悉皆ノ知識ヲ以テス下院、執政官ヲ牽制スルノ法他ナシ

現ニ公務執行ノ爲メニ要用ナル經費徵収ノ法途ヲ節減ス
 ルニ在リ出納院長ノ説明若シ下院カ政府ニ附托シテ可ナ
 リト思考スルヨリ一層大額ナル剩過ヲ收入ニ餘スヲ示
 サン乎、下院ハ直チニ政府ヲシテ稅額ヲ減セシム可キ方法
 ヲ施ス之ニ反シテ其説明若シ收入ハ以テ經費ニ應スルニ
 足サルヲ示サシ乎、此欠乏ヲ補充センカ爲メ下附セラレ
 タル需求ヲ許スト拒ムトハ全ク下院ノ職權ニ在リ財政報
 告ハ當テ次年度ノ稅法案ヲ下院ニ提出スルヲ以テ其目
 的トセス亦下院ヲシテ該年度ニ徵収ス可キ歲入ハ恰モ政
 府カ該年度間ニ使用セント欲スル所ノ經費ニ應スルニ足
 テ過不及ノ差ナキヲ知ラシムルヲ以テ其目的トス
 出納院長既ニ其財政上ノ報告ヲ終レル後ヲ議員ハ起立シ

ナル質問

歳入

テ何レノ個條ニテモ一層細密ノ説明ヲ要スル所ノ個條ニ
 就テ該長官ニ質問スルナ例トス是レ便利ナル慣行ニシテ
 直チニ財政報告ヲ討議スルノ慣行ニ優ルコト遠シ何トナレ
 ハ之カ爲メ政府悉皆ノ法案ヲ完全且ツ了解シ易キ体裁ニ
 於テ國民ノ代議士ニ示スコトヲ得可レハナリ
 國用ヲ支辨センカ爲メノ供度許與及ヒ徴収法ニ係ル憲法
 上ノ慣行ヲ指示スルノ前ニ方テ余輩ハ歳入ヲ得可キ諸種
 ノ根源ト下院ノ歳入ヲ審査管理ス可キ程度トヲ零説セサ
 ル可ラス
 英國王ノ収入ハ古昔ハ王室有ノ土地ト諸種ノ特權ノ使用
 トニ因テ生セシト雖モ議院政体確立以來此等ノ収入ハ概
 テ永久ナル王室費ト交換シテ議院ノ管理ニ歸セテ今日國

英國ノ王室費
 毎年ノ議院
 歳入ノ事

併合資金

家ノ歳入ハ主トシテ租税ヨリ出ツ租税ハ議院ノ議決ニ基
 テ賦課ス可キ者トス凡シ租税ハ其何等ノ根源ヨリ生スル
 ナ間ハ今日ハ皆テ英國銀行若クハ愛蘭銀行ニ拂込ム公
 金ヲ出納局ニ儲藏スルノ舊法ハ全然廢止セラレ出納局モ
 近時ノ法制ニ因テ大ニ改革セラレタリ此事ハ議院ガ公金
 支出ヲ管理スルノ方法ヲ論スルニ方テ説明ス可キ
 英國銀行ニ拂込ム所ノ租税ハ王國中悉皆ノ重立タル租税
 ナ包含シ海關稅、内國稅、及ヒ驛遞局ヨリノ収入等皆テ其内
 ニ在リ
 往時ハ議院ノ議決ニ因テ賦課スル所ノ収得ハ之ヲ諸種分
 立ノ資金ト爲セシガテ三世第四十七種第二十七號ノ
 布告ニ依リ諸般ノ租税ヲ合シテ一資金ヲ組成シ之ヲ統稱

全収入ヲ出納院ニ拂込ム

シテ併合資金ト呼フコ至レリ、
 千八百五十四年迄ハ海關稅、内國稅、郵便稅等ノ徵收及ヒ處
 理ニ係ル費用ハ擔當官局各々此等ノ賦課ノ全収入中ヨリ
 之ヲ支辨シ諸種ノ費用ヲ引去レル後ヲ唯々純收入ノミチ
 併合資金ニ拂込メリ歷代ノ内閣ニ對シテ憲法上此慣行ヲ
 非難セル者多シト雖モ常ニ奏功セサリシガドントル、ボウ
 リングナル者アリ千八百四十七年四月二十九日數種ノ決
 議案千八百三十一年ニ於ケル財政調查掛ノ報告ニ基ケル
 者ヲ下院ニ提出シテ租稅ノ安全ヲ保テ國財ノ出納ヲ一層
 明瞭、簡易、完全ナラシメンカ爲メ從來ノ制度ヲ改良ス可キ
 旨ヲ懇懇シ又國家ノ收入ハ毫モ之ニ係ル費用ヲ引去ラス
 シテ國庫ニ拂込ミ議院ヲシテ之ヲ觀察管理セシム可キ旨

ヲ要求ス多少ノ討論後動議ハ引去セラルト雖モ翌四十八
 年四月三十日再ヒ議論ヲ起シテ終ニ其決議案ヲ通過セシ
 ムルヲ得タリ次回ノ會期ニ際シ出納院長ハ質問ニ答テ
 「政府ハ稍ヤ決議案ヲ以テ主張セラレタル改革ヲ實行セン
 ト欲シ既ニ之ニ着手セル」旨ヲ演ヘタリ爾來政府ヲ議案ヲ
 提出シテドクトル、ボウリングノ主張セル大目的ヲ實行セ
 シト企テサリシヲ數年、千八百五十四年ニ至リグラッドス
 トーン始テ聯合王國ノ全歲入ト經費トチ一層直接ニ議院
 ノ觀察及ヒ管理ノ下ニ來ラシム可シト云ヘル議案ヲ提出
 ス其目的蓋シ海關稅、内國稅、及ヒ他ノ租稅(王室有ノ地租ニ
 關シテハ別ニ法律アリ今マ之ヲ除ク)ヨリ生スル全収入ヲ
 悉ク出納局ニ拂込マシメ徵收費ハ之ヲ供度委員會ノ議決

額ヨリ支辨スルニ在リ往時ハ音々徴収費ヲ支辨セルノミ
 ナラス法官其他ノ官吏ノ俸給、年金、其他ノ給與モ亦諸種ノ
 議定法ニ從テ之ヲ直接ニ租稅中ヨリ支辨シタルガラ、
 ストーンノ議案ハ此等ノ支辨ヲ併合資金若クハ議院ノ議
 決ス可キ年々ノ供度ニ移セリ加之此議案ハ從來併合資金
 ナ以テ支辨セル夥多ノ費用ヲ年々ノ經費豫算中ニ移セリ
 且ツ全収入中ヨリ支辨セル或ル退隱料其他ノ給與ハ、
 トリア第五十九種第十九號第二十號ノ布告ニ因テ之ヲ併
 合資金ヲ負擔ト爲セリ今日法律上全収入ヲ以テ支辨ス可
 キ者ハ唯タ王室有ノ地租ニ係ル負擔アルヲ、王室有ノ地
 租ハ、
 租法第四十條第五十種第十號布告第百十三條ト、
 リア第一號第二號ノ王室費規則ト、因リ諸種ノ費用ヲ引

全收入

去テ唯々純収入ノニ併合資金ニ拂込ム可キ者
 千八百五十四年及ヒ千八百五十六年ノ布告ハ其目的明カ
 ニ上ニ記セル拂還、割引等ヲ減スルノニ悉皆ノ収入ヲ
 出納院ニ拂込マシムルニ在リト雖布告中斯ル措置ヲ強
 迫ス可キ個條ナキカ故此結果ヲ得ル能ハキ千八百五
 十七年ヲ以テ設置セラレタル公金調査委員ハ此事態ニ注
 意シ上ニ記セル者ノ外、何等ノ減却ヲモ加ヘスヲ全収入
 ナ出納院ニ拂込マシムルガ爲メ更ニ法律ヲ制定ス可キ旨
 ナ德憑セリ其意蓋シ之ニ因テ公務ノ爲メニ要スル悉皆ノ
 支出ナシテ豫メ議院ノ認許ヲ受ケシムルニ在リ該委員ハ
 又地租ニ係ル負擔モ、若シ得可クハ、議院ノ管理ニ歸セシ
 ム可キ旨ヲ德憑セリ政府ハ千八百五十八年二月十五日

十二月二十三日ノ日附アル大藏省ノ回狀ヲ以テ右ノ勸
 薦ニ同意ヲ表セシト雖ヒ其地租ニ係ル者ハ新々ニ王室費
 ナ議定スルノ後ニ非スニハ實施シ難キノ理由アルカ故之
 ナ聽納セサリキ大藏省ハ此願ハシキ改良ヲ實行セシカ爲
 メ議案ヲ提出スルノ意アリシト雖ヒ諸種ノ事情ニ妨ケラ
 レテ之ヲ提出セヌ千八百六十六年ノ出納及ヒ検査局ニ係
 ル布告出ルニ及ソテ漸ク此大目的ヲ達スルヲ得タリ該布
 告制定前ニ在テハ或ル時ハ租稅徵收費ヲ全收入ヨリ支辨
 シ或ル時ハ其一半ヲ全收入ヨリ支辨シテ他ノ一半ヲ下院
 ノ議定セル供度ヨリ支辨セリ
 事務上ノ便宜ヲ圖リ租稅部ハ先ツ其徵收セル租稅ヲ以テ
 劣等官ノ俸給ヲ支辨シ他日議院ノ該部ノ經費ヲ議定スル

租稅部ノ給俸

種類

種類

永久許與

ニ及ソテ更ラニ之ヲ出納院ニ拂還スルヲ常トス會計調査
 委員ハ之ヲ可認シ前ニ舉ケタル千八百六十六年ノ布告第
 十條ハ之ヲ制許スト雖ヒ此慣行ハ固ト弊害ヲ醸ス可キ者
 ニシテ嘗テ検査部尙書ノ非難ヲ被レリ
 今日國家ノ全收入ヨリ引去ル者ハ唯々租稅部吏員ノ俸給
 アルニミ其殘額ト貸金ヨリ生スル所ノ利子トハ悉ク出納
 局ニ拂込メテ併合資金ト爲シ是ヲ以テ悉皆ノ公費ヲ支辨
 ス支辨ノ性質ニアリ一ニ曰ク議定法ヲ以テ定メタル永久
 許與ノ効力ニ從テ支辨スル者ニニ曰ク徵收委員會カ年々
 準備スル所ノ併合資金中ヨリ供度委員會ノ議決ニ從テ支
 辨スル者はレナリ
 公務執行ノ爲メ永久許與セル金額ハ之ヲ歳入全額ニ比ス

ルニ凡ソ七千万磅ト三千万磅トノ割合ナリ其類目左ノ如
第一、公債ノ利子。第二、王室費。第三、皇族ノ補助金及
年金。第四、高等ナル外交官並ニ或ル終身官ノ俸給及ヒ
賜與。第五、法庭。第六、露西亞荷蘭佗希臘ニ係ル國債ノ
利子、減債資金、償金、其他諸雜費。

此等ノ費用ハ年々議院ノ議定ヲ請ヘス永久不易ノ制定法
ニ因テ併合資金及ヒ支辨不可キ者ナリ蓋シ年々議院オシ
テ討議セシムルモ増減變更豫メ期ス可ラサルノ患ナキ
能ハス故ニ公債、王室ノ威望、皇族、其他縉紳貴顯ノ補助金、年
金、法官其他獨立ノ位地ヲ占メサル可ラサル吏員ノ俸給、在
屈セラレタル權理ニ對スルノ償金及ヒ同様ノ性質ヲ有ス

年々ノ經費

ル事ニ係ル經費ハ之年々議院ノ討議ニ附セス豫メ確定
シテ變易スル所ナカラシム其主義ヤ時ニ多少ノ弊害ヲ生
スルコトナキ能ハスト雖モ世人皆テ正確動カス可ラサ
ル者ト爲ス
特ニ利子支辨ノ資金ヲ備ヘサル公債ノ利子ヲ支辨シ、海陸
軍ヲ維持シ、租稅ヲ徵收シ、其他諸般ノ事項ヲ執行スルカ爲
メニ要スル年々ノ經費ハ諸官局皆テ各々之ヲ算定シ、而レ
後テ大藏省ノ檢正認可ヲ受ケ、而レ后テ之ヲ詳細ナル豫算
書ニ編制シ、國王ノ命令ヲ以テ下院ニ提出ス、大藏省カ各官
局ノ經費豫算書ヲ檢正認可スルノ方法ハ本論中該省ノ職
務ヲ論セル官職ニ記シタレハ讀者就テ見ル可シ
下院ハ其準備ス可キ經費ヲ成ル可ク速ニ承知センカ爲メ

豫算書ノ下附

千八百二十一年二月十九日ヲ以テ左ノ決議案ヲ通過シ爾
來常ニ政府ノ遵守スル所ト爲レリ其文ニ曰ク

當院ハ國庫ノ監守者トシテ嚴正ニ其職務ヲ執行センカ
爲メ國家治平ノ日ニ在テ議院若シ教主降誕日前ニ開場
スルキハ翌年一月十五日前ニ海軍陸軍砲兵部等ノ經費
豫算書ヲ下附セラル、ヲ以テ緊要欠ク可ラサルコト思
考ス又議院若シ教主降誕日前ニ會集セサルキハ供度委
員會ヲ開クノ後十日以内ニ斯ル豫算書ヲ下附セラル
、ヲ以テ緊要欠ク可ラサルコト思考ス

武局ノ經費ナラサル者則チ文局經費ハ通常之ヲ雜費ト云
フ雜費ト租稅部ノ費用トハ稍ヤ陸海軍及ヒ大砲部等ノ費
用ニ後レテ下院ニ提出スルヲ常トス前十年間ニ命セラレ

降誕日
何日何

タル公金、雜費、財計等ノ調査委員ハ皆ナ議院ノ會集後成ル
可ク速ニ此等ノ經費豫算書ヲ提出セラレシコトヲ總憲シタ
リ政府モ委員ノ總憲ヲ可認シ其之ニ應セント欲スル由チ
演ヘタレド諸般ノ困難アリテ其路ヲ遮斷スルカ故未タ之
ヲ實行スルニ至ラス千八百六十二年三月二十一日下院ニ
於テ之ヲ非難スル者アリシニ出納院長グラットストーン答
テ曰ク委員ノ總憲ニ應センハ固ヨリ政府ノ希フ所ナレド
如何セン此等ノ經費ヲ算定スルハ陸海軍ノ經費ヲ算定ス
ルカ如ク容易ナラサルコトヲ文局經費ノ多寡増減ハ官タ諸
部局ノ事務諸長官ノ意見、官吏ノ員數等ニ因テ變更スルノ
ミナラス亦其事業ヲ以テ國利民福ヲ進歩セシムル者ノ有
無ニ因テ變更ス故ニ諸君ノ希望セラレ、カ如ク速ニ豫算

書ヲ編制スルノ極テ難シ且ツ當院若シ之ニ關シテ一定ノ規則ヲ立テナハ政府ハ固ヨリ之ヲ承諾ス可シト雖モ其結果必ス雜支出ノ豫算書不充分ニシテ追加豫算書ヲ提出スルノ慣行出ルニ至ル可シ是レ當院カ理財上ニ於テ受ケ得可キ弊害ノ最モ大ナル者ナリト然レモ千八百六十六年ヨリ全六十七年ニ亘ル會計年度ノ文局經費豫算書ヲ下附スルニ方テハ政府モ其編制法ヲ改良シ千八百六十六年二月十六日則チ議院會集後十六日ヲ經テ之ヲ提出セリ此良法一タヒ用キラレタル上ハ向後モ必ス遵行セラル可シト思ハル

追加經費豫算書

右ニ舉ケタルグラドノトーンノ言說中追加經費豫算書ヲ下附スルノ慣行ニ係ル非難ハ氏カ數々議院ノ注意ヲ喚起

セル所ノ者ナリ千八百六十二年氏ハ財計調査委員ノ質問ニ答テ余ハ大ニ斯ル經費豫算書ヲ嫌惡スト云ヘリ其說ニ曰ク理論上ヨリ觀察スレハ別ニ非議ス可キ所ナキカ如シト雖モ實際議院管理ノ効力ヲ害スル者實ニ數々追加經費豫算書ニ依頼スルノ慣行ヨリ大ナルハナシ議院ノ管理ヲシテ其効力ヲ全クセシメント欲セハ一歲間ノ理財事務ヲ結束シテ一書ニ編制シ以テ前後通覽ノ便ヲ與ヘサル可ラス若シ然ラスシテ支離分裂セル豫算書ヲ提出セハ議院ハ歲計ノ全体ヲ通覽シテ諸部局ノ經費ノ權衡ヲ了知スル能ハサル可シ故ニ政府若シ容易ニ追加經費豫算書ニ依頼スルカ如キヲアラハ下院ハ止ムヲ得ス常ニ財務委員ヲ置テ自ラ衛ラサル可ラス

經費減少法案

政府ノ經費ハ既ニ大ニシテ尙ホ益々大ナラントスルノ勢
 アルカ故理財法改革論者ハ諸種ノ方法ヲ施シテ之ヲ減少
 センコトヲ勉メタリ財計調査委員ノ如キモ亦此目的ヲ達セ
 ンカ爲メ設ケタル者ニシテ之カ任命ニ係ル憲法上ノ方途
 ハ他日當サコ之ヲ論スルノ時アル可シ此類ノ委員ノ職權
 ハ皆ナ固ヨリ既往ノ措置ヲ調査スルト行政府理財上ノ措
 置ニ因テ起ル所ノ疑問ヲ審案スルトニ止レリ議員中斯ル
 正當ノ審問ヲ以テ満足セス下院ヲ誘フテ撰拔委員ヲ命ジ
 之ヲシテ其供度委員會ニ下附セラル、ノ前ニ方テ經費豫
 算書ヲ檢正セシメント企タル者アリト雖ヒ常ニ奏功セズ
 ウヰリアム三世ノ在位間ニハ經費豫算書ヲ撰拔委員ニ附托
 シタルコアルカ如シ然レトモ執政官責任説ノ確立セルヨリ

經費豫算書檢
正委員

先例

以來ハ一ヒモ斯ル措置ヲ施シタルコトナシ余輩請フ左ニ其
 事例ヲ記セシムルニシテ、
 千八百三十五年三月十六日ヒ、ウィリアムハ其供度委員會ニ下
 附セラル、ノ前ニ方テ海軍經費豫算書ヲ撰拔委員ニ委
 チノコトヲ發議ス出納院長サー、ロベルト、ゼー、ル之ヲ駁シ
 テ曰ク内外四方ヨリ受ケル所ノ告知ニ因テ國家ノ急務
 ヲ判定シ而ル后テ其贊成ヲ得ンカ爲メ議院ニ提出スル
 ハ行政府ノ職分ナリ政府ハ其職任上公ケニ發露ス可ラ
 サル事實ニ基テ其判定ヲ作ラサル能ハサルコトアリ又時
 ニ議院ニ向テ一身上ノ信任ヲ請求セスコト政治上一ノ信
 任ヲ請求セサル可ラサルコトアリ今此等悉皆ノ事項ヲ理
 財委員ニ委托スルハ其實君主ノ職任ヲ下院ニ移スニ異

ナラスト在野黨首領ノ一人タルサリ、ジュームス、グラハム
 モ亦之ニ反對シ右ノ動議ハ大多數ヲ以テ否決セラル後
 ナ數日ヒュームハ再ヒ動議ヲ起シテ陸軍及ヒ大砲部ノ經
 費豫算書ヲ撰拔委員ニ附ス可キ旨ヲ論ス反對黨ノ首領
 ロード、ロヨン、ラッセル先ツ之ニ反對シ次テサリ、ロベルト、
 ビール之ヲ駁シテ曰ク行政府ハ下院ト撰拔委員トノ共
 ニ近ツクヲ能ハサル告知ヲ得ルノ道アリ又憲法上自ラ
 其責ニ任シテ國家ニ急要ナル措置ヲ發言スルノ權理アリ
 リトヒュームハ保持ス可キ兵數ハ之ヲ政府ノ意見ニ委テ
 シト欲スル由ヲ演ヘタレヒサリ、ロベールト、ビールハ此讓
 與ニ満足セス全院カ經費豫算書ニ對シテ有スル憲法上
 ノ校正權ヲ數名ノ委員ニ移スノ不可ナル所以ヲ説ケリ

先例

蓋シ數名ノ委員ハ充分ニ財務ヲ管理スル能ハスシテ而
 モ之ニ委ヌルニ豫算書檢正權ヲ以テスレハ全會委員ハ
 自ラ其注意ヲ怠ルノ悞アルナリ爾後多少ノ討議後動議
 終ニ引去セラル其
 千八百五十七年ニハ陸軍ノ經費豫算書ヲ撰拔委員ニ委
 テント欲シテ同様ノ動議ヲ起セル者アリシカ贊成ナク
 シテ廢棄セラレタリ
 千八百四十七年文局經費則チ雜費ノ増加年々絶エス嚴
 ニ之ヲ抑止セサル可ラサルノ實アルヲ見ルヤ一議員、政
 府ニ請求シテ曰ク政府ハ委員ヲ設テ文局經費ヲ其供度
 委員會ニ下附スルノ前ニ調査セシムルノ議ニ同意セラ
 レタリト大藏卿ロード、ジョン、ラ、セル之ニ答テ曰ク憲法

ヲ犯セズシテ調査ヲ施ス可キ餘地多シ余ハ次期ノ初ニ
 方テ撰拔委員ヲ設置シ之ヲシテ向後依順ス可キ要義ヲ
 指定セシメシコトヲ希望スル翌四十八年二月二十二日
 大藏卿ハ右ノ言説ニ基キ自ラ動議ヲ起シテ二個ノ委員
 ヲ任命セシメシ論セリ一ハ以テ海軍陸軍砲兵部ノ經費
 ヲ調査セシメ一ハ以テ文局經費ヲ調査セシメシカ爲メ
 ナリ政府ハ嚴ニ委員ノ調査權ヲ憲法以內ニ限畫シテ之
 ヲ超越スルコトヲ許サズ又諸部局ニ保持スルコトヲ要スル
 實力ニ關シテハ其裁斷權ト責任トヲ棄却セサリキ故ニ
 委員其之ニ容喙スル能ハサリシト雖也此他ノ事項ニ於
 テハ向後經費減少ノ實ヲ舉ンガ爲メ充分ニ公費ノ細目
 ヲ調査スルコトヲ許サズ其起源同シカテスル雖也右二個

先例

ノ委員ハ其實今日ノ理財委員ニ異ナルナシ理財委員ハ
 年々下院ノ任命スル所ニシテ嘗テ至尊ノ命令ヲ以テ下
 院ニ提出セラルルハ翌年度ノ經費豫算ニ干渉セント企
 ルコトナキ者ナリ右二個ノ委員ハ能ク其職務ニ勤勞シテ
 經費豫算書ヲ改良シ簡明ニシ且ツ國家ノ經費ヲ減少シ
 以テ大ニ國益ヲ増進セリ
 千八百六十二年三月十一日ロイド、ロベルト、モンタグハ
 下院ヲシテ經費豫算書ヲ管理セシメシト欲シ決議案ヲ
 提出シテ曰ク一層政府ヲ牽制シテ議院ノ議定セル金額
 以外ノ經費ヲ支出スルコトナカラシメ又議院ノ議定セル
 各項ノ經費ヲ他ニ轉用スルコトナカラシメシカ爲メ下院
 ハ年々撰舉委員ヲシテ一個ノ委員ヲ指名セシム可シ下

院ハ此委員ヲシテ議院ニ提出セラレタル悉皆ノ經費豫
 算書ヲ校正セシムルノミナラス亦之ニ訓示ヲ與ヘテ現
 今検査法ノ改良ヲ考案セシメ并ニ會計年度中最モ豫算
 書ヲ提出スルニ適當ナル時期ヲ報告セシム可シ是レ當
 院ガ供度委員會ノ投票ヲ以テ經費豫算書ヲ認許スルノ
 前ニ方リ該委員ヲシテ豫算書ノ調査ヲ終リ之ニ關スル
 意見ヲ報告セシメシムカ爲メナリト政府ハ大ニ豫算書ヲ
 シテ撰拔委員ノ校正ヲ受ケシム可シト云ヘル發言ニ抗
 抵シ之ヲ以テ我ガ現行政治法ノ根本ヲ殘伐スル者ト爲
 セリ想フニ斯ル委員ハ必ス下院ノ財計案ヲ審査通過ス
 ルノ職任ヲ奪フ可シ然ラスノハ則チ政府ノ之ヲ下附ス
 ルノ職任ヲ奪フ可シ加之經費豫算書ニ對スル政府ノ責

經費減少ノ動議

先例

任チ無責任ナル委員ニ移スノ結果アル可シ動議ハ大多
 數ヲ以テ否決セララル
 下院ニ起レル動議中會計年度ノ豫算書ニ關係セスト雖モ
 尙ホ年々ノ經費ヲ減少シ又公費ノ増加ニ關シテ下院憲法
 上ノ意見ヲ發露センカ爲メニシタル者アリ茲ニ此類ノ動
 議ヲ掲記スルハ適當ナル可シト思ハル
 千八百四十九年七月十六日ヘンレ一動議ヲ起シテ内外
 ニ於ケル官吏ノ俸給ハ悉ク其一割ヲ減少ス可キ旨ヲ決
 議センコトヲ求ム出納院長ハ之ヲ駁シテ今日ノ官吏ハ皆
 ナ其勤勞ヲ酬ユルカ爲メニ必要ナルヨリ多額ノ俸給ヲ
 受ケサル由ヲ論セリ討議ノ後チ動議ハ大多數ヲ以テ否
 決セララル然レモ翌五十年四月十二日下院ハ大宰相コ

下院ノ御
 意間上下兩院議員ノ保占スル官職ノ俸給報酬ト裁判官
 ノ俸給謝儀年金ト外交官ノ費用トヲ調査セシム此委員
 ハ最モ高貴ナル官吏ノ職任ニ關シテ重要ナル報告ヲ呈
 スト雖モ俸給ノ減少ニ至テハ概テ之ヲ不可トセリ
 千八百五十七年三月十日グラッドストーン決議案ヲ提出
 シテ曰ク國民ノ租稅輕減ヲ期待スルハ決シテ謂ハレナ
 キコトニ非ス當院ノ判斷ニ依レハ國民ヲ休養センカ爲
 メ國家ノ經費ヲ檢正シ及ヒ之ヲ減少スルコト必要ナリト
 是ヨリ先キ數日下院ハ支那ニ於ケル事務措施法ヲ不可
 トシテ政府ヲ譴責シ(他ノ事項ニ於テハ政府ヲ信用セシ
 モ)政府ハ議院ヲ解散シテ國民ニ訴ヘヨト決意ス是ニ於

テ執政官ハ四ヶ月間ノ經費豫算書ヲ編制シテ下院ノ議
 定ヲ求ム是レ新撰議院ノ開場スル迄公務執行ヲ停滯セ
 シメホラン其爲メナリグラッドストーンハ此處置ヲ非難
 セスシテ其正當且ツ慣用ノ方法ナルヲ認許スト雖モ尙
 ホ經費豫算ヲ以テ非常ノ多額ト爲シ政府ヲシテ議院人
 再會前之ヲ再考セシメ大ニ豫算額ヲ減シテ改撰議院ニ
 下附セシメシトシタリ然レモ下院ハ氏ノ動議ヲ便宜正
 當ナル者ト認メスシテ之ヲ廢棄セリ
 千八百六十二年六月三日スタンズフィールドハ動議ヲ起シ
 テ今日國費ヲ減少スルモ爲メニ國家ノ安寧獨立及ヒ正
 當ナル勢力等ヲ毀傷スルニ至ラズル旨ヲ決議セシメテ
 求ム大宰相ロトド、バトメルストンハ修正説トシテ更テ

ニ一個ノ決議案ヲ提出ス曰ク當院ハ節儉ノ必要ナルヲ
 知ルト同時ニ亦内ニハ國家ノ治安ヲ保テ外ニハ其利益
 ヲ護ルニ足ル可キ費用ヲ供給スルノ義務ヲ忘レス且ツ
 既ニ舉行セラレタル國費ハ節減ハ當院ノ満足ヲ以テ視
 ル所ナク其向後ト雖モ國家ノ事態若シ之ヲ許サハ政府ノ
 必ス國費ヲ節減セラル可キヲ信スト此他諸種ノ修正説
 出テ現ニ揭示紙ニ記シテ討議ヲ求メタル者ノミチ數フ
 ルモ五六種ニ過キキ諸動議中ロード、パートメルス、ト
 ハワルボ、ルノ修正説ヲ以テ信任欠乏ノ投票ニ同シキ
 者ト爲シ議長ニ向テ先ツ是ヨリ討議ヲ命セラレシメテ
 一請フ是ニ於テ他ノ修正説ヲ起サント欲セル者ハ暫ク發
 議ヲ見合ハセタリワルボ、ルハ其動議ニ因テ信任欠乏

ノ投票ヲ爲ス可キ意趣ナキ旨ヲ演ヘタレモロード、バ
 ノ、ト、ト、ノ説明ヲ得テ余ハ余カ修正説ノ通過ニ因テ
 生ス可キ責任ニ當ルノ準備ナキガ故暫ク之ヲ引去ル可
 シト云ヘリ大宰相ハ其修正説ヲ回護シテ政府モ明年ハ
 節減セル經費豫算書ヲ議院ニ提出スルヲ得可キ旨ヲ説
 ク長キ討論後大宰相ノ修正説終ニ大多數ヲ以テ可決セ
 ラル次ノ二回ノ會期ニ於テ財政報告ヲ提出スルニ方リ
 出納院長ハ政府ノ大ニ翌年度ノ經費豫算ヲ節減シ得
 ルヲ説明シ且ツ向後更ラニ之ヲ節約スルノ見込アル
 ヲ説明ス千八百六十六年デルピ、侯ノ内閣ヲ組成ス
 ルヤ新任出納院長ヤフレ、リ、右ノ決議ニ論及シ政府
 ノ之ニ從テ理財政策ヲ定ム可キ旨ヲ下院ニ保証セリ

千八百六十四年二月十一日サ、エーチ、ウキラフ、ピーハ前
 數年間ニ租税ト經費トノ驚ク可ク増加シタル事態ヲ演
 ヘテ下院ノ注意ヲ喚起セリ千八百四十二年ヨリ全四十
 六年ニ至ル歳出ハ平均五千二十五万磅ナリシモ千八百
 六十四年ニハ幾ント七千万磅ニ上レリ此歳出ハ平時ノ
 經費ニシテ幾ント二千万磅ナル地方ノ經費ヲ除ケル者
 トス今マ兩者ヲ合スレバ無慮九千万磅ノ大額ニ及フ出
 納院長、歳出増加ノ原因ヲ説明スルニ方テ謂ヘルアリ文
 局經費ノ項自大ニ増加セルヨリ大藏省之ヲ管理スルノ
 業務益々繁多困難ナルニ至レリ今日ノ勢ニテハ下院、力
 ヲ經費増加ノ防禦ニ假スニ非ズバ政府モ充分ニ管理
 ノ任ヲ盡ス能ハスト

經費豫算ノ項
 目

千八百六十四年三月一日マーシユハ動議ヲ起シ文局經費
 ノ頻ニ増加セル形狀ヲ論シテ其節減セサル可ラサルコ
 ナ主張ス大藏尙書ノ此増加ヲ釀セル所以ト其止ムヲ得
 サルニ出タル所以トヲ説明セルノ後チ議論少シク起リ
 シカ須臾ニシテ動議ヲ引クニ至レリ
 千八百六十六年二月二十六日ウヰイト決議案ヲ提出シテ
 曰ク近年政府ノ經費非常ニ多クシテ人民幾ント之ニ堪
 ヘス云々ト議論盛ニ起ルノ後チ動議ハ終ニ引去セラ
 ル
 現今(千八百六十六年)ハ一年間ノ公務執行ノ爲メニ要スル
 經費ヲ分テ百七十種ト爲シ豫メ各費額ノ適用セラル可キ
 事項ヲ定テ之ヲ明記ス各種ノ經費中更ラニ許多ノ費目ヲ

陸海軍ノ經費
豫算
文局諸費

包含シ其額頗ル巨大ニ及フ者アリト雖モ大額ナレハ迎之
ヲ處理スルニ他ノ小額ナル者ヨリ多量ノ困難アルニ非ス
何トナレハ出納院長ハ斯ル經費ニ附スルニ是ヨリ支辨ス
可キ各種ノ費目ヲ以テスレハナリ加之ナラス豫算書ハ數
多ノ説明ヲ包含シ又時ニ經費ノ各項ニ係ル往復文書ノ附
録ヲ有スルコトアリ今日政府ノ豫算書ヲ編制スルヤ復々往
時ノ如ク粗畧ナラス精密ニ諸項目ヲ掲記ス是レ下院ノ益
々増加スル所ノ要求ニ應シテ公費ニ係ル事項ハ成ル可ク
之ヲ充分且ツ明瞭ニ説明センカ爲メナリ
近時ニ及ンテ陸海軍經費豫算書ノ編制法ヲ改良セルコト實
ニ少ナカラス且ツ千八百六十六年出納及ヒ検査局ニ係ル
法律ヲ頒布セルヨリ大藏省ハ文局雜費豫算書ノ分類法ヲ

經費豫算書ノ

改正セシメテ發議シタリ今日ハ文局經費ヲ分ツテ七項ト
爲ス、一ニ曰ク土木建築費、二ニ曰ク諸官局ノ雜費及ヒ俸給、
三ニ曰ク法制及ヒ司法費、四ニ曰ク教育、科學、及ヒ技術費、五
ニ曰ク殖民地、領事、及ヒ他ノ外交費、六ニ曰ク養老金、退隱料、
及ヒ慈惠其他ノ目的ヲ以テスル恩賜金、七ニ曰ク雜種、特別、
及ヒ臨時費是レナリ、大藏諸長官ノ説ニ依レハ諸官局各々
其責ニ任シテ執行スル所ノ事務費ハ成ル可ク之ヲ各種分
立ノ議案ニ編制スルヲ便トス是レ啻ク豫算書ニ對スル下
院ノ討議ヲ簡易ナラシメシカ爲メノヨニ非ス亦他日諸項
目ニ適用セル經費決算書ノ編制及ヒ検査ヲ簡易ナラシメ
シカ爲メナリ財計調査委員ハ此説ニ同意セリ
一歲間ノ經費豫算書ヲ編制スルニ方リ周密精巧ニ之ヲ分

分類

類シテ各類ノ議案ヲ作リ更ラニ各議案ヲ分テ細目ヲ立ツ
 レハ爲メニ支出法ヲ簡易ナラシメ會計吏ノ權力ヲ限制シ
 又某經費ハ何レノ金額ヨリ支辨ス可キヤト云フカ如キ疑
 惑ヲ減少ス可シ故ニ當局者ハ勞ヲ悞マスシテ唯々精巧ナ
 ル豫算書ヲ編制セシムルヲ勉メサル可ラス
 政府既ニ豫算書ヲ提出スレハ下院ハ議員ヲ使用ニ供セシ
 カ爲メ其印刷ヲ命シ之ヲ供度委員會ニ附ス
 是ニ於テ供度委員會其場ヲ開キ或ル官局ヲ代表スル所ノ
 政務官先ツ經費豫算書中該官局ニ係ル者ノ正當緊要ナル
 所以ヲ説明シ然ル后テ其細目ニ入テ順次各項ノ許與ヲ發
 議ス供度委員會陸海軍ノ經費豫算ヲ議スルニ方テハ第一
 次會ヲ終ルノ前議員ヲシテ陸海軍全体ノ事項ニ論及セシ

供度委員會

ムルヲ例トス既ニ第一次會ヲ經レハ嚴ニ討議ヲ各項ノ許
 與ニ限テ全体ノ事項ニ及ブヲ許サス又交局經費ハ其種類
 繁雜ニ過キテ一時ニ全体ヲ討議スル能ハス故ニ其細目ニ
 就テ之ヲ議ス
 供度ノ決議案ハ皆サ會長下ノ如キ言語ヲ以テ之ヲ發議ス
 曰ク印刷セル豫算書中ノ某議案ヲ揭示セラレタル目的ノ
 爲メ若干磅ニ超ヘサル金額ヲ國王陛下ニ許與ス可シト此
 動議ハ之ヲ可決シ若クハ否決スルヲ得可シ然レモ其性質
 ナ變更ス可キ修正ヲ加ワルヲ得ス又下院ハ國王ノ勸薦ニ
 從テ錢貨支出ヲ議決ス可キ者ナルカ故當初發議セラレタ
 ル金額ヲ増スヲ得ス之ト同シシ供度委員會ハ唯々國王
 ノ下院ニ附與シ給ヘル豫算書ヲ審案ス可キ者ナルカ故該

其性質
 正ノ變更
 正ノ加入

委員會ニ於テ議案外ノ動議ヲ起スハ常制ニ背ク者トス
 千八百六十三年五月十八日執政官ハ郵便船ニ係ル經費
 豫算書ヲ供度委員會ニ提出シ之ニ一項ヲ附加シテ曰ク
 右ノ金額ハ既ニ下院ノ非斥ヲ受ケタル條約ニ從テ郵便
 御用ヲ務メタルチノルチワルドニ支辨セシカ爲メニ之ヲ
 適用セサル可シト修正說ヲ起シテ右ノ附加項ヲ删除セ
 シトテ論セル者アリシニ或ル人之ヲ駁シテ常制ニ背ク
 旨ヲ演ヘタリ然レモ會長ハ毫モ議案ノ性質ヲ變更セザ
 ルカ故違法ノ發議ニ非スト說ケリ出納院長ハ右ノ附加
 項ヲ非難セル者ニ答テ曰ク政府此類ノ事項ヲ發議スレ
 ハ逆在野議員モ亦之ヲ發議シ得可キニ非ス且ツ政府ノ
 發議ハ郵便事務ニ影響セズ而シテ供度委員會ハ其決議

供度委員會ノ
 議事

ヲ以テ該事務ヲ限制若クハ變更スルヲ得ヌ是レ先例ノ
 ナキ所ナレハナリト執政官ノ發議終ニ可決セラレ
 供度委員會ハ通常各種ノ事項ニ對スル大額ノ費用ニ就テ
 可否ヲ議決ス然レモ經費豫算書中ニ各項ノ費目ヲ細記ス
 ルカ故非難ス可キ項目アレハ異議ヲ容レテ之カ删除若ク
 ハ減額ヲ主張スルヲ得可シ是レ千八百五十七年ニ改定セ
 ラレタル下院ノ慣行ナリ一議案ノ全体ヲ減額セント欲ス
 ルキハ提出セラレタル費目中其額ノ最モ少ナキ者ニ附テ
 先ツ減額說ヲ起ス若シ二個以上ノ修正ヲ加ヘント欲スル
 キハ下院舊時ノ規則ニ從テ之ヲ發議ス該規則ニ曰ク額ノ
 大小若シハ時ノ長短ノ差異アル議案ニ就テ前後ノ疑問起
 ルキハ先ツ最小額最長時ニ係ル者ヨリ討論ヌ可シト委員

其前
之
費用
云々

會長既ニ或ル費目ノ減額説ヲ發議セル後ハ其前ニ在ル所
ノ費目ニ對シテ動議ヲ起シ若クハ之ヲ討議スルヲ得ス然
レモ委員會ノ決議ヲ下院ニ報告スルニ際シテ之ニ關スル
議論ヲ起スヲ得可シ
供度委員會ニ於テハ或ル格段ナル議案ニ係ル全体ノ決議
案採用ヲ發議シ若クハ某議案ヲ選抜委員ニ附ス可シトモ
動議ヲ起スヲ得ス然レモ他日下院ニ於テ之ヲ連結セル疑
問ヲ調査セシメシカ爲メ選抜委員ヲ任命ヲ發議ス可キ目
的アレバ議案額ヲ減少スルヲ得
供度委員會ニ提出セラレタル議案ハ形式上ヨリ云ハハ之
ヲ中止延期スルヲ得ス蓋シ延期ス可キ時日ナケレハナリ
然レモ動議者ハ該會ニ承諾ヲ得テ之ヲ引去シ若クハ他日

再ヒ之ヲ提出スルヲ得可シ
千八百六十三年六月十五日ロロ
委員會ニ發議シテカウス、クン
カ爲メ六万七千磅ノ支出ヲ可決セシメテ求ム是ハ萬國大
博覽會場購買ニ係ル議案ノ一部分ニシテ全体ノ購買費ハ
豫算書ニ四十八万四千磅ト記セリ此金額中土地購買費ノ
一項ノキニシテ十七万二千磅ノ巨額ニ上レリ委員會ニ於テ
「政府ハ豫算通知セズシテ俄カニ豫算書ニ掲記シタルヨリ
少ナキ金額ヲ請求ス可キ權利ナシ」ト論セル者アリシガ會
長ハ其制規ニ背クヲナキテ演説後下院議長モ亦同一ノ
言ヲ演テ千八百六十五年六月八日政府ハ臨時事務掛ニ係
ル費用三万七百三磅ヲ請求ス是ハ豫算書ニ掲記セラレタ

供度委員會ハ
唯テ該年度中
ニ支出ス可キ
經費ノミヲ審
議ス

ル金額ニ超過スルコト五千磅ナリシト雖モ政府ハ毫モ此變
更ノ理由ヲ説明セザリキ
供度委員會ハ唯テ該年度中ニ支出ス可キ經費ノミヲ審議
ス發議セラレタル許與若シ該年度ノ經費ノ一部ナラサル
キハ(例ハ法官ノ俸給ニ係ル永久増加ノ如シ)之ヲ供度委員
會ニ附セスシテ他ノ全會委員ニ附スルヲ可トス下院ハ該
委員會ノ報告ニ基テ議案ヲ編制セシメ若クハ既ニ下院ニ
提出セラレタル議案中ニ條項ヲ追加セシム
供度委員會ハ必スシモ或ル事項ニ對シテ請求セラレタル
全額ヲ同時ニ決議スルニ非ス時ニ其若干額ヲ分テ除項決
議若クハ信用決議ニ附スルコトアリ信用決議トハ政府ヲ信
用スルカ爲メ經費支出ヲ議決スル者ニシテ通常國家將ニ

信用決議

除項決議

戰役アラザトスルコト方テ之ヲ爲ス蓋シ國家將ニ戰役アラ
ントスルニ方テハ固ヨリ巨額ノ資金ヲ準備セサル可ラス
ト雖モ豫メ其費額ヲ算定スル能ハサレハナリ除項決議ト
ハ其適用ス可キ事項ヲ定メス經費支出ヲ議決スル者ニシ
テ近時迄ハ唯テ内閣更替ヨリ起ル意外ノ事變ニ應スルカ
爲メニノミ之ヲ爲セリ蓋シ斯ル場合ニ於テハ特ニ之ヲ適
用ス可キ事項ヲ掲ケスシテ若干ノ資金ヲ政府ノ使用ニ供
セシム甚ク望マシケレハナリ斯ル場合ニ於テハ議院ハ唯
ク歳費豫算ノ一部ヲ議決シ次回ノ會期ニ及ンテ政府ノ該
錢貨ヲ誤用セザリシヤ否ヤヲ確知センカ爲メ其使用法ヲ
審査スルヲ常トス内閣危急ニシテ將ニ議院ヲ解散セント
スルコト方リ下院ナシテ豫算書ノ總額若クハ悉皆ノ細計ヲ

議決セシメ以テ國家ヲシテ議院改撰ノ爲メ其去留ヲ決セラル可キ執政官ノ理財政策ニ從ハシムルノ不可ナル固ヨリ辨テ待タズ斯ル豫算書ヲ決定スルノ職任ハ之ヲ留メテ新撰下院ニ委テサル可ラス加之ナラス信用決議ヲ單ニ議院再ヒ會集スル迄ノ間公務ノ爲メ必要ナル金額ニ限ル可シ除項決議ハ決シテ之ヲ認メテ下院ノ豫算全額ヲ可認シタル徵証ト爲ス可ラス

往時ニ在テハ唯ハ意外ノ事變ニ應セシカ爲メコトニ除項決議ヲ爲セシト雖も前數年以來ハ之ヲ爲ス利益々多キニ至レリ是レ他ノ費用セサル殘額ハ年度ノ終ニ於テ悉皆之ヲ出納局ニ還附スルノ新法漸次行ハレタルニ因リ此制度ノ變化ハ千八百六十三年三月三十一日ニ終レル會計

費用セサル剩餘ノ還納

除項決議

年度ノ終ニ於テ漸ク全成シ我カ理財史上始テ諸官局皆ナ其剩餘ヲ還納スルノ事アリ剩餘還納ノ事タル固ト可ナラサルニ非スト雖也之ヲ爲メ政府ハ各會計年度ノ初ニ方テ除項決議ヲ議院ニ請求シ以テ經常ノ費用ヲ支辨セサルヲ得サルニ至レリ而シテ經常費ヲ支辨セシカ爲メ除項決議ヲ請求スルノ慣行ハ全ク非難ヲ免ル者ニ非ス蓋シ除項決議ノ議案ハ常ニ詳細ノ項目ヲ掲ケスシテ大額ノ錢貨ヲ一項ニ舉クルカ故下院ハ他日各費目ノ過不足ヲ討議スル迄ハ充分ニ其細目ヲ考案スル能ハス且ツ各費目ノ過不足ヲ討議スルハ常ニ會期ノ終ニ際シテ議員ノ出席自ラ少ク下院復タ細密ノ調査ヲ好マサルノ時ニ在リ是レ右ノ慣行ヲ非難スル者ノ要旨ナリト雖も政府若シ時機ヲ計テ終

尾ノ議案ヲ提出セハ以テ此類ノ非難ヲ排斥スルヲ得可キ
 カ如シ千八百六十三年三月二十七日出納院長下院ニ論シ
 テ曰ク除項決議ハ全ク新奇ノ慣行トス何トナレハ重要ナ
 ル行政改革ヲ有効ナラシメンカ爲メニ採用セラレタル制
 度ニ從テ起レル者ナレハナリ既ニ剩餘還納ノ制度ヲ用非
 タル上ハ終結ノ豫算書ヲ下院ニ提出スルニ先テ假ニ政府
 ノ經費ヲ支辨ス可キ錢貨支出ヲ請求セサル能ハス是レ今
 ヨリ後ニ政府ノ常ニ依頼セサルヲ得ル慣行ナリト千八
 百六十六年三月八日大藏尙書チルグニス再ヒ論シテ曰ク
 今回ノ除項決議ハ全ク從來ノ除項決議ト一致シ毫モ新主
 義ヲ包含スル者ニ非ス且ツ除項決議ノ金額ハ國家非常ノ
 事變アルニ非スソハ決シテ歲計ノ四分ノ一ニ超ヘサルヲ

供度許與ノ責
 任

法トス是レ世人ノ當サニ熟知スヘキ所ナリ故ニ委員會ハ
 除項決議ヲ爲スコ方リ爾後細目ヲ以テ之ヲ議スルノ機會
 有ルヲ頼メテ豫算全額ヲ可認ス可キニ非スト
 供度許與ヲ下院ニ請求スルノ責ハ政府悉ク之ニ任スト雖
 此之ヲ議決スルノ責ハ下院自ラ之ニ任スト下院ハ行政府ニ
 望ムニ其要スル所ノ者ヲ説明シ又議員ヲシテ許與ノ便宜
 ナ覺悟セシムルニ必要ナル所ノ万事ヲ通知セヨヲ以テ
 ス政府ノ告知ニシテ詳明且ツ満足ナラサラン乎下院ハ滿
 足ス可キ説明ヲ得ル迄ハ何時ニテモ經費ノ許與ヲ控停ス
 ルノ權力ヲ有ス
 公務ヲ執行スルニ足ル可キ金額ヲ定ムルト内外ニ於テ國
 家ノ信用ヲ保持スルトハ政府ノ特種ナル權限ナリ何人モ

公費ニ對スル
供度委員會ノ
討議ノ効績

此事項ニ對シテ政府ノ如ク恰當ナル判斷ヲ下ス能ハス然
リ而シテ下院ノ憲法上公費ニ對シテ使用スル所ノ縝密ナ
ル檢察ハ絶ユス執政官ヲ牽制シ兼テ濫派過度ナル支出ヲ
防クノ功アリ往時ニ在テハ下院ノ公費ヲ管理スルコト今日
ノ如ク嚴密ナラサリシカ故冗費極テ多カリキ經費豫算書
ノ討議ハ通常之ニ出席スル者少ナシト雖也之カ爲メ公利
ヲ保護スルコト甚タ大ナリ蓋シ大數ノ代議會ハ經費ノ細目
ヲ審査シ之ニ關シテ明確ナル意見ヲ定ムル能ハスト雖也
人員少ナケレハ却テ詳密ニ審査檢閲スルヲ得可キ便利アリ
故ニ供度委員會カ其認許ヲ得ゾカ爲メニ提出セラレタ
ル費目ヲ點檢シテ政府ニ及ホス所ノ德義上ノ勢力ハ大ニ
シテ且ツ強シ、此勢力ガ不當ナル經費ヲ牽制スルノ効力ハ

經費豫算書中
ノ細目、下院
ノ爲メニ拒絕
セラル

却テ公然或ル費目ヲ拒絕スルニ超過ス供度ノ事項ニ於ケ
ル下院ノ職務ハ縝密ニ行政府ノ措置ヲ檢察シ以テ冗費ヲ
防キ公費ニ係ル弊害ヲ止ムルニ在リ彼ノ國家ニ必要ナル
經費ヲ請求スルカ如キ又勉メテ委托セラレタル資金ノ使
用ヲ節約スルカ如キハ固ト責任ノ執政官ニ屬ス可キ者ナ
レハ執政官ヲシテ其責任ニ任セシメサル可ラス
實際ヲ觀察スルニ議院政治法ノ確立以來下院カ或ル事項
ノ爲メニ請求セラレタル經費ヲ拒絕セルハ甚タ稀レニシ
テ而モ輕小ナル場合ニ過キス通則ヲ案スルニ執政官若シ
國家ノ爲メニ必要ナリトシテ請求スル所アレハ其額ノ大
小ヲ問ハス下院ハ常ニ之ヲ認許セリ
余輩ハ左ニ實例ヲ掲ケテ歲出豫算書中ノ格段ナル細目

が供度委員會ニ於テ下院ノ爲メニ拒絕セラレタル事態
 ナ示ス可シ前八年間ノ議事録ヲ案スルニ斯ル例証ハ僅
 ニ左記ノ者アルノミ
 千八百五十八年ニ下院ハ博物館ノ派出員ノ俸給三百磅
 ナ拒絕シ翌五十九年ニハサシンスノ錄事ノ俸給ヲ拒絕
 スト雖モ再ヒ提出セラル、ニ及テ之ヲ認許ス全年八月
 一日制定法編纂掛ノ費用二千三百六十一磅ヲ拒絕シ千
 八百六十年ニハ下ノ費目ヲ拒絕セリ○七月二十三日ウエ
 リントン侯ノ葬車ヲ保存ス可キ家屋建築費千二百磅○
 八月三日新築議院ニ設置ス可キ英王ノ肖像費千八百磅
 ○全月十四日定員外ニ増置ス可キ商務局ノ錄事ノ俸給
 八百磅○全月十五日下院ハ愛蘭文局ノ會計官ニ給與ス

可キ俸給ヨリ一千磅ヲ減スト雖モ政府ハ該職ヲ廢スル
 ノ意アリシカ故減額ヲ承受セリ千八百六十一年政府ハ
 ウェリントン侯ノ葬車保存費ヲ減額シ之ヲセイント、ポー
 ル寺院ノ洞穴ニ移スノ費用三百四十磅ヲ提出シテ下院
 ノ認許ヲ得、新築議院ノ肖像費モ再ヒ之ヲ提出シテ認許
 ナ得タリ、全年六月六日下院ハ海軍經費豫算書ヨリチツ
 カム船庫擴張費三千二百二十五磅ヲ減却ス是レ下院若
 シ之ヲ認許セハ終ニ九十万磅餘ノ經費ヲ要ス可キ工事
 ナリトス、千八百六十二年三月六日下院ハサンドハルト
 ナル兵學校擴張費一万七百八十七磅ヲ否決スト雖モ越
 十三日之ヲ再議スルニ及ビ政府ヨリ満足ナル説明ヲ得
 テ更ラニ可決ス、全年四月二十八日蘇國高地ノ道路橋梁

費五千磅ヲ否決ス、千八百六十三年六月四日君斯坦堡ニ於ケル土木掛ノ錄事費四百磅ヲ拒絕シ、七月二日サウス、ケンゼントナル博覽會場買上費十萬五千磅ヲ拒絕シ、全月十日千八百六十二年ノラームス河堤防費ト連帶セル六千磅ノ費目ヲ論難シテ終ニ之ヲ引去セシム、千八百六十四年三月二日海軍尙書ノ動議ニ起レルマルタ造船所建築ノ爲メニ費ス可キ五千磅ノ一項ヲ否決ス蓋シ下院ニ於ケル反對黨ノ議員ノ告知ニ從テ更ラニ其位地ヲ調査セシメンカ爲メナリ、全年五月三十日マン島ニ癡狂院ヲ建設スルノ費用四千磅ヲ否決シ(此費目ハ次回ノ會期ニ再ヒ提出セラレテ可決ヲ得タリ)六月六日バルリントン、ハウスニ博物館ヲ建築スルノ費用十五萬磅中ヨリ一

錢貨ノ負擔ヲ
含蓄スル所ノ
議案

萬磅ノ一項ヲ否決ス、千八百六十五年ト千八百六十六年トニ於テハ政府ノ提出セル供度案皆ナ下院ノ可決ヲ得タリ、
公金請求ノ議ハ概テ皆ナ供度委員會ニ提出スト雖モ先ツ該會ノ手ヲ經スシテ之ヲ提出スルノ法アリ則チ公共ノ土木ノ築造、新制度ノ設置、其他ノ事項ニ係ル議案ヲ提出スル是レナリ斯ル議案ハ皆ナ多少人民ノ負擔ヲ重クス政府ハ斯ル議案ニ因テ其費用ヲ併合資金ヨリ支出ス可キ工事ニ着手スルヲ許サレサルニ非スト雖モ此等ノ議案ハ通常「費用ハ議院ノ議出ス可キ金額ヲ以テ支辨ス可シ」ト云ヘル個條ヲ含有ス從來此類ノ議案ハ政府ニ計ラヌシテ在野議員之ヲ提出スルノ慣行アリシモ其弊害少ナカラサルカ故

スル議案ハ皆
ナ陛下ノ勸薦
ヲ經サル可ラ
ス

千八百六十六年新クニ議事規則ヲ設テ之ヲ禁セリ其要旨
ニ曰ク國入ノ負擔ヲ招ク可キ議案ハ併合資金ヨリ支辨ス
ルト議院ノ議出ス可キ金額ヨリ支辨スルトヲ問ハス皆ナ
豫メ國王陛下ノ勸薦ヲ經サル可ラスト此規則ハ向後政府
ヲシテ直接ニスル議案ノ提出ヲ管理セシムニ至ル可シ如
何ナル場合ニ於テモ下院ハ嚴密ニ此類ノ事務ト執政官直
接ノ理財上ノ發議トヲ檢察管理セサル可ラスト千八百六十
二年下院ハ之カ爲メニ要ス可キ經費特ニ巨大ナルノ故ヲ
以テ執政官ノ提出セル此類ノ議案二個ヲ拒絕シタリ
下院ハ時ニ或ハ某事項ニ對シテ錢貨支辨ヲ請ハンカ爲メ
奏議奉呈ヲ決議スルコトアリ斯ル奏議ハ必ス常ニ該院ノ他
日其金額ヲ議出ス可キ旨ヲ保證セル言辭ヲ含有ス然レモ

議
錢貨支辨ノ奏

公共ニ對スル
勤務ノ約束

斯ル慣行ハ唯タ一種特別ノ場合ニ於テノミ依頼スルヲ得
可キ者トス一種特別ノ場合トハ何ツ余輩既ニ本篇ノ始ニ
於テ之ヲ説明セリ
右說ノ所ノ他尙ホ一種ノ方法アリ政府ヲシテ議院ノ現ニ
議出シタル金額ニ超過セル經費ヲ節約シ若クハ支辨スル
コトヲ得セシム則チ公共ノ土木ヲ築造シ或ハ公共ノ利益ト
爲ル可キ事項ニ勤務スルノ約束ヲ定ムル是レナリ斯ル約
束ノ爲ニ要セラレタル資金ハ唯タ毎歲供度委員會ノ決議
若クハ議院ノ特段ナル議決ニ因テノミ之ヲ得可シト雖モ
政府ハ之カ爲メ連年若干ノ經費ヲ支辨セサル能ハス又議
院ハ約束其者ノ期限ヲ知ラスシテ之ヲ議決セルコトモセヨ
既ニ其始ニ方テ約束ノ金額支辨ニ同意セル以上ハ政府ハ

之ヲ認テ約束ノ繼續ヲ承諾シタル者ト爲ス千八百五十九年郵便電信ノ勤務ニ對スル約束ニ關シテ非難ス可キ處置アルヲ見ルヤ議院ハ始テ此慣行ノ弊害ニ注意シ此類ノ經費ヲ一層嚴密ニ監理スルノ必要ナルヲ知レリ是ニ於テ乎下院ハ委員ヲ設テ之ヲ調査セシメ其報告ニ基テ諸種ノ決議案ト議事規則トヲ採用セリ其意蓋シ斯ル約束ヲ監理ス可キ下院ノ權理ヲ主張保持スルニ在リ下院ハ許多ノ準備ヲ整ヘテ政府右等ノ約束ヲ結フキハ必ス其事能ク下院ニ詳報セシメントシ又約束ヲシテ必ス常ニ此約束ハ下院ノ認承ヲ得テ始テ有効ナル可キ者トス」ノ條款ヲ包有セシメントシタリ現時ニ在テ此等ノ制規ハ唯々特示セラレタル約束ニ及ンテ其他ニ及ハスト雖也識者皆テ「政府ハ憲法

斯ル約束ハ下院ノ認可ヲ要ス

海岸防禦ニ係ル工事請負ノ約束

上ニ於テ下院ヲ羈束ス可キ約束ヲ結フノ權理ナシト爲ス故ニ吾人ハ將ニ謂ハントス向後政府ハ豫メ議院ノ認許ヲ得スシテ大ニ該年度ノ許與額ヲ超ユ可キ經費ヲ要スル所ノ約束ヲ定ム可ラスト

千八百六十二年ノ會期ニ於テ工事請負ノ約束ニ對スル下院憲法上ノ監理權ハ更ニ擴張セラレテ議院ノ制定法中ニ編入セラル、ニ至レリ是ヨリ先キ二年下院ハ英國海岸ノ防禦ニ必要ナル工事ヲ興ヤンカ爲メ二百万磅ノ金額ヲ許與セン」ヲ決議ス千八百六十二年政府ハ議案ヲ提出シテ此經費ノ大半ヲ支出セン」ヲ求ム全年七月十日該議案ニ係ル委員會ニ於テ「サー、スタッフワード、ノースコート」其意見ヲ陳述シテ曰ク議案ニ一條ヲ加ヘテ「政府若シ此工事ニ關ス

ル約束ヲ結ンテ議院ノ既ニ議定セルヨリ多額ノ錢貨ヲ費用セント欲セハ豫メ下院ノ認許ヲ得サル可ラサル旨ヲ明言ス可シト内閣ハ初メ之ニ反對シ出納院長ハ實ニ下ノ如キ言論ヲ爲セリ曰ク斯ル約束ニ係ル措置ノ當否ト經濟ノ善惡トハ商議會タル下院ノ容易ニ判斷スル能ハサル所ノ事項ナリ若シ之ニ向テ正當善良ノ措置ヲ希望セハ之ヲ行政府ニ一任スルノ優レルニ如カス且ツ此等ノ約束ニ對スル責任ハ行政府固ヨリ之ヲ負擔セサル可ラス下院ノ決議ニ因テ此責任ヲ免ル、カ如キハ古來ノ慣例ニ違背ス而シテ行政府ヲシテ此責任ヲ負擔セシムルノ法ハ此等ノ約束ヲ行政府ニ一任スルヨリ善キハナシ之ヲ行政府ニ任スト雖モ下院若シ其確定セラル、ニ先テ之ニ干渉スルノ權力

スル約束ハ一
個月間議院ノ
机上ニ置クコ
ト要ス

ヲ保持セハ以テ充分ニ行政府ノ行爲ヲ監理スルヲ得可シ彼ノ行政府ヲシテ一々下院ノ認許ヲ請ハシムルカ如キハ其責任ヲ鞏固ナラシムル所以ニ非スト動議ハ五名ノ多數ヲ以テ否決セラルト雖モ全月十四日ニ至リ内閣ハ之ヲ受承セント欲スル旨ヲ告ケ終ニ一條ノ法律ヲ制定ス其文ニ曰ク國務尙書ハ之ニ此約束ハ拒絕セラレスシテ一箇月間下院ノ机上ニ置キ若クハ此期限内ニ公然認許セラレ、迄ハ効力ナキ者トス」一條ヲ加ヘスシテ議院ノ特ニ議定セルヨリ多額ノ經費ヲ要ス可キ約束ヲ結フヲ得スト右ノ一條ヲ附加スルハ其目的蓋シ斯ル工事築造ノ爲メニ政府ノ結締セル約束ヲシテ悉ク議院ノ認許ヲ得セシムルニ在ラズシテ豫メ下院ノ認許ト承諾トヲ得スシテ既ニ議定セラ

新工事ニ係ル
約束

レタルヨリ多額ノ經費ヲ要ス可キ約束ヲ結ハサラシムル
ニ在リ政府ヲシテ恣ニ之ヲ結締セシメハ他日更ラニ經費
ヲ要スルニ及ンテ下院ヲ羈束シ行爲ノ自由ヲ妨害ス可シ
是レ右ノ法律ヲ制定セル所以ナル乎
工事ノ豫算全額ニ超ヘスシテ其全体ノ計畫既ニ議院ノ認
許ヲ經タル者ニ就テハ政府固ヨリ約束ヲ結フ可キ權力ア
リト雖トモ之ヲ實行セント欲セハ絶エス下院ノ認許ヲ得
テ要セラレタル金額ヲ支出セサル可カラズ是レ政府カ此
等ノ防禦ノ爲メニ要ス可キ經費ニ關シテ明カニ認承セル
所ナリキ故ニ堡砦築造費追加案ヲ議スルニ方リ執政官ハ
此追加經費ヲ以テ其主義未タ下院ノ認許ヲ得サル新工事
請負ノ約束ヲ結締スルコトナカル可キ旨ヲ明言シ又該案ノ

千八百六十六
年ノ堡砦築造
議案

附録ヲ討議スルニ方テ何レノ議員モ皆ナ格段ナル工事ノ
廢止ヲ發議スルヲ得可キ旨ヲ明言セリパーメルストン内
閣ノ豫算ニ依レハ堡砦築造費ハ元來少シク五百万磅ヲ超
ヘタルノミナリシガ爾後議院ハ數々之カ爲メニ要セラレ
タル經費ヲ議出シ豫算額終ニ六七百万磅ニ上レリ政府ノ
請求額ハ此ノ如ク増加シタレバ議院ノ既ニ認許セタル堡
砦ノ個數ト性質トハ毫モ變改セラレサリキ然ルニ千八百
六十六年ニ至テデルビー内閣ハ工事擴張說ヲ主張シ該年
ノ會期ノ終ニ際シテ一議案ヲ提出シ以テ新工事ノ認許ト
其經費五万磅ノ議定トヲ求ム政府ハ是ヨリ先キ堡砦築造
費ノ爲メニ許與セラレタル錢貨ヲ節約シテ充分ノ資金ヲ
儲蓄シタルカ故議院設ヒ經費ヲ議定セサルモ別ニ憂フル

所ナカリシト雖ヒ之ヲ新事業ニ適用セント欲セハ特ニ議院ノ認許ヲ得サル可ラス是レ其苦心セル所ナリキ前任出納院長其他重立タル議員ハ諸種ノ理由ヲ以テ政府ヲ攻撃ス其要旨ニ曰ク歳出入豫算書ヲ議スルノ際ナレハ下院ハ充分ニ斯ク重要ナル事項ヲ考慮スルヲ得可キモ今ヤ既ニ審案熟慮ノ餘日ナシ政府ハ何カ故之ヲ前日ニ提出セスシテ今日ニ提出シタルヤト是ニ於テ政府ハ該議案ヲ引テ翌年ノ出入豫算書ニ編入スルノ尋常且ツ便利ナル方法ヲ取リ以テ下院ニ其必要ナルヤ否ヤヲ討議スルニ充分ナル機會ヲ與ヘンコトヲ諾セリ

造船所ノ工事

千八百六十四年ニ設置セル造船所調査委員ノ意見書ニ基キ且ツポルトマウストチアツサムナル造船所擴張ノ費用ヲ

節約シ其工事ヲ輕易ナラシメンカ爲メ政府ハ千八百六十五年ヲ以テ議院ヨリ下ノ如キ允許ヲ得タリ曰ク海軍省ハ其期限五年以内ニシテ之カ爲メニ支辨ス可キ一年間ノ費額二十五万磅ニ超ヘサル工事請負ノ約束ヲ結フヲ得可シ曰ク約束ノ繼續間ハ年々議院ノ議定スル金額ヲ以テ之ヲ支辨ス可シ曰ク此議決ニ基テ結締セル約束ハ皆ナ結締後三十日以内ニ其寫本ヲ上下兩院ニ回附ス可シ但シ議院閉會中ニ斯ル約束ヲ結フハ開會後三十日以内ニ回附ス可シト

郵便物遞送ノ約束

千八百六十五年三月二十日下院ハ内閣執政官ノ答辨ヲ得テ初テシノイカニ郵便物ヲ遞送スルカ爲メ西印度及ヒ大平海瀛船會社ト結締セル新約束ハ六ヶ月前ノ通知ヲ以テ

解約シ得可キ者ニシテ別ニ一ヶ月間下院ノ机上ニ置ケル迄ハ其効力ナキ者トス」トノ個條ヲ有セザリシヲ知レリ然リ而シテ政府ハ該約束ノ寫本ヲ下院ニ廻附セリ左ニ記スル所ノ千八百五十九年及ヒ千八百六十年ヲ以テ郵便及ヒ電信ニ關スル約束ヲ調査セシメシカ爲メニ設置セラレタル委員ノ措置ト其報告ニ對スル下院ノ處置トハ以テ本論ノ趣旨ヲ説明スルニ足ル可ク又以下院カ約束ノ正確若クハ便宜ヲ駁斥シタル事態ヲ指示スルニ足ル可シ

郵便及ヒ電信
ニ係ル約束
調査委員

千八百五十九年七月九日下院ハ出納院長ノ發議ニ因リ委員ヲ撰定シテ政府カ郵便物遞送ノ爲メ海船會社ト其期限數年ニ亘ル所ノ約束ヲ結締シ若クハ之ヲ改正シタ

チフルチワ
ド事件

ル狀態ヲ調査報告セシム此委員ハ又海外ニ電信ヲ通セシカ爲メ結締セル契約ヲ調査報告シ且ツ未タ議院ノ認許ヲ得ス若クハ數年ニ亘ル可キ勤務ニ就キ約束ヲ結締スルニ方テ向後政府ノ遵守ス可キ制規ニ係ル意見ヲ錄聞スルノ任ヲ有セリ委員ハ會期ノ末ニ及ンテ調査ニ着手セルカ故閉會マテニ之ヲ完終ス可キ見込ナカリキ是ニ於テ乎其注意ヲ單ニドイヴァカレイ間ノ郵便物遞送ノ爲メニ政府トチフルチワド及ヒシンキンス社トノ結締セル約束カ更新セラレタル情狀ニ限リ其第一ノ報告書ハ唯々之ヲノミ記セリ政府ハ既ニ一タヒ該約束ヲ千八百六十三年迄延期セシモ千八百五十九年ニ至テ再ヒ之ヲ千八百七十年迄延期シタリ是レ海軍會議局ノ勸薦ニ

基キ驛遞局長ノ意見ニ反對シテ施セル者ナリ
 委員ハ之ヲ調査スルニ方テ該約束ニ係ル一種ノ非難ス
 可キ事項ヲ發見セリ他ナシナルヲワドハ素トドイヴァ
 ノ有力ナル撰舉人タルカ故大藏省當_テ該約束ノ延期ヲ
 考案スルニ際シ海軍長官ノ一人ナルカルチヂーニ向テ
 若シドイヴァノ候補人ト爲ラハ必ス力ヲ副ヘテ當撰セシ
 ム可キ旨ヲ約セル是レナリ氏ハ其約束ノ再締セラレシ
 ヲ期待セルヨリ此助力ヲ約シタルヲ疑テ容レス此約
 東ニ任セル海軍省及ヒ大藏省ノ吏員ハ不正ナル意趣若
 シハ政治上ノ意趣ニ動かサレテ之ヲ許與セルニ非サル
 ヲハ委員充分ニ之ヲ認承シタリ委員ハ實ニ海軍卿ノ私
 書記マッレーノ行爲ヲ以テ大ニ非難ス可キ者ト爲セリト

雖ニ政府中マッレーナルチワドカビテイン、カルチヂー
 ノ間ニ往復セル通信ヲ知レル者アリシヲ示スニ充分
 ナル証跡ヲ得サリキ

委員ハ切ニ政府ト一私人ト互ニ信任シテ結ヘル契約ノ
 實行ヲ希望スル旨ヲ明言スト雖ニ尙ホ下ノ疑問ニ至テ
 ハ之ヲ下院ノ議決ニ附セリ曰クナルチワドハ議院ニ
 於ケル人民代表ノ性質ヲ腐敗セシム可キ處置ヲ施セリ
 此行爲アルモ議院ハ尙ホ其面目威儀ヲ毀損セスシテ契
 約ヲ實行シ千八百六十三年六月二十日ヨリ千八百七十
 年四月二十六日迄之ヲ延期スルニ必要ナル金額ヲ議出
 スルヲ得可キヤ否ヤ又議院ハ之ヲ議出セント欲スルモ
 實ニ之ヲ議出スル能ハサルノ事情ナキヤ否ヤト

チアルチワ
 ド事件

該約束更新後内閣更替シタルニ新任執政官ハ右ノ報告
 ト下院全体ノ意見トニ從テ斷然新約束ヲ認承スルコトヲ
 拒ミ舊約束ニ因テ郵便御用ヲ務ムルコトヲ許セリ新約束
 ハ毎年一定ノ金額ヲチアルワードニ拂渡ス可キ筈ナリ
 シモ舊約束ニ依レハ通常ハ一層ノ少額ヲ給與シ特別ノ
 勤務アルニ方テハ定額外ノ報金ヲ給與ス可キ筈ナリキ
 此約束ハ千八百六十三年六月迄繼續スルヲ得可キ者ニ
 シテ且ツ毫モ非難ヲ受ケサリキ蓋シ委員モ其答斥書ニ
 之ヲ包入セサリシカハナリ
 チアルワードノ朋友ハ異議ヲ容レヌシテ新約束ヲ廢棄
 セシムルコトヲ欲セス調査委員ノ一人タリシカピテイソ、
 エル、ヴェルノンノ如キハ千八百六十年三月二十七日ヲ以

チアルワード
 事件

テ之カ爲メニ決議案ヲ提出セリ曰ク郵便物遞送ニ係ル
 調査委員ノ報告ト証據トヲ觀查スルニ千八百五十九年
 四月二十六日海軍省トジョー、チー、チアルワードトノ間ニ
 締結セル約束ハ實行ス可キ者ナリト出納院長グラッドス
 トーン之ヲ駁シテ曰ク委員ノ公平無私ナル發見ハ之ヲ
 敬重セサル可ラスト曰ク委員ノ報告ニ因ラサルモ其新
 約束ヲ得ンカ爲メ議院ノ威儀ヲ毀害ス可キ不正ナル方
 法ニ依頼シタルコト明ケシト曰ク斯ル情狀ノ下ニ在テハ
 現任内閣ハ新約束ヲ實行ス可キ義務ナク下院ハ之カ爲
 メニ經費ヲ議出スルヲ要セス蓋シ行政府ハ下院ヲシテ
 約束ヲ遵守セシム可キ憲法上ノ權理ヲ有セサレハナリ
 ト是ニ於テ勸議ハ否決セラレ

チアルチワードハ新約束ノ廢棄ヲ不可トシテ痛ク之ヲ論
 争シ且ツクキーンズ、ベンチ「裁判廳ニ出テ、已レト海軍省
 トノ間ノ約束ヲ論議セシテ請ヘリ然ルニ海軍省ハ本
 省ハ決シテ氏カ要求ノ効力ヲ允許シ若クハ下院ノ決斷
 ナ動カスノ措置ヲ施サ、ル可シ」トテ此計畫ニ同意セサ
 リキ政府モ亦チアルチワードニ告クルニ政府ハ唯々千八
 百六十三年六月迄ノ約束ニ對スル經費ヲ議院ニ提出シ
 且ツ之ヲ維持セント欲スル由ヲ以テセリ
 千八百六十三年二月チアルチワードハ驛遞局長ニ告テ曰
 ク余ハ有名ナル法律家ヲシテ新約束ヲ鑑定セシメタル
 ニ該法律家ハ之ヲ正當有効ナル者ト爲セリ故ニ足下若
 シ之ヲ認承スルコト拒マハ權理請願書ヲ上テ之カ爲メ

チアルチワード事件

ニ受ケタル損害回復ヲ要求スルヲ得可シト氏ハ此通知
 ナ爲スニ方テ政府ト敵對ノ地ニ立ツコトヲ避ケント希望
 スル旨ヲ告ケ又之ヲ法廷ニ附スルモ仲裁ノ裁決ニ委ヌ
 ルモノニ驛遞局ノ意見ニ從フ可キ旨ヲ告ケタリ該局ハ
 毫モ此發議ヲ顧慮セス更ラニ氏ニ告テ曰ク其約束ハ千
 八百三十三年六月二十日ヲ以テ終ル可シ爾後ノ郵便物
 遞送請負ニ係ル申入ハ政府之ヲ受承セリト雖モ議院若
 シ之ヲ實行スルニ必要ナル金額ヲ議出セサルハ固ヨ
 リ約束ヲ結フ能ハス議院若シ千八百七十年四月二十六
 日迄繼續ス可キ約束案ニ從テ支給ス可キ金額ヲ議出ス
 ルハ別ニ箇條ヲ定メス直チニ該案文ヲ以テ本約束ト
 爲ス可シトチアルチワードハ之ニ答テ政府ノ新約束ヲ以

テ未タ存立セサル者ト爲スノ不可ヲ論シ且ツ其充分ニ該約束ヲ實行スルノ用意アリ又カアル旨ヲ証言セリ此爭ヲ終結センカ爲メ政府ハ千八百六十三年五月十八日供度委員會ニ提出セル郵便物遞送ノ除項決議ニ數言ヲ附加シテ曰シ本項ノ金額ハ千八百六十三年六月二十日迄ノ郵便物御用ニ對シテチノルチワードニ支辨ス可キ經費ヲ包有スト又曰ク本項ノ金額ハ氏ト海軍省トノ新約束ヲ實行スルカ爲メニ該期日後郵便御用ニ對シテ之ヲ支出スルコトナカル可シト供度委員會ノ決議案ニ此ノ如キ文言ヲ加フルハ常例ノ措置ニ非サルカ故獨リ該委員會ノ盛ンコ之ヲ論議セルノミナラス五月二十八日其報告ヲ受クルニ方テ下院モ亦盛ンコ之ヲ論議セリ之ヲ

チノルチワード事件

非難スル者ノ言ニ曰ク供度委員會ノ職ハ唯々提出セラレタル經費豫算ヲ可決シ拒絕シ若クハ減額スルニ在リ今マ之ニ附スルニ經費豫算以外ノ事項ヲ以テスルハ全ク違例不當ノ行爲ナリ斯ル違例ノ措置ハ之レカ爲メ供度ノ事項ニ於テ下院ガ王室ト上院トニ對スル憲法上ノ關係ニ影響スル所ノ憂フ可キ結果ヲ生スルノ恐アリト之ヲ回護スル者ノ言ニ曰ク是レ先例ナシト雖モ決シテ不當ノ措置ニ非ス曰ク是レ執政官カチノルチワードノ約束ニ對スル千八百五十九年ノ調査委員ノ意見ト全六十年ノ下院ノ意見トチ實行スルニ最モ適當ナリト認メテ採用セル所ノ者ナリ曰ク今日用ヒラレタル動議提出法ハ異種ノ場合ニ於テ供度決議ニ係ル慣行ヲ離去セシム

ルノ先例ト爲ル能ハス蓋シ右ノ箇條ハ其因テ以テ錢貨
 ナ請求セル約束トシテ政府ノ自ラ發シタル者ナレハナ
 リ又在野議員ヲシテ或ル事項ニ對スル經費ノ請求ヲ限
 畫若クハ變更セシム可キ保証ト爲ル能ハサレハナリト
 出納院長モ亦論シテ曰ク執政官此類ノ發言ヲ爲セハ逆
 在野議員モ亦同様ノ發言ヲ爲スヲ得可キ理由アルコ
 非ス加之ナラス今日ノ發言ハ唯格段ナル人物ヲシテ郵
 便御用ヲ勤メサラシムルニ在テ御用其者ニ關係ナク毫
 モ之ヲ限制若クハ變更スル所ナシ故ニ向後該御用ヲ限
 制若クハ變更ス可キ發言ノ先例ト爲ル能ハスト大議論
 ナ經テ内閣ノ發議ハ終ニ可決セラレ後チ之ヲ經費適用
 議案ニ編入シテ法律ノ認許ヲ得タリ然ルモ尙ホ政府ハ

チャールズワ
 ド事件

再ヒチャールズワドノ要求ノ爲メニ苦メラレノヲ恐ル
 故ニ千八百六十四年、全六十五年、全六十六年ノ經費適用
 議案ニハ常ニ同様ノ文言ヲ附加シテ豫メ防禦策ヲ施セ
 リ政府ノ用意此ノ如ク周密ナルモノニモ拘ハラステ
 チャールズワドハ權理請願書(其解前ニ見ユ)ヲ「クオインス、ベンチ」裁判所
 ニ上リ海軍會議局ニ對シテ約束取消ノ爲メニ受ケタル
 損害十二万六千磅ヲ要求ス原告ハ巧ミニ損害要求ノ理
 由ヲ辨論セリト雖モ該法廷ハ之ヲ斷シテ要求ノ趣旨相
 ヒ立サル者ト爲セリ實ニ千八百六十五年十一月ナリ其
 理由蓋シ議院既ニ之カ準備ヲ爲スヲ拒メル以上ハ海
 軍會議局モ約束ヲ實行スル能ハス強テ之ヲ實行セシム
 ルハ不正不理ナリト云フニ在リ

郵便御用ノ約束ニ對スル議院ノ監理

是ヨリ前ニ還テ郵便及ヒ電信御用ニ係ル約束ヲ記セン
 ニ委員ハ千八百五十九年ニ其調査ヲ完終スル能ハカリ
 シカ故翌六十年ノ會期ニ際シテ再ヒ之ヲ任命シ三個ノ
 報告ヲ得タリ
 委員ハ第一ノ報告ヲ以テ行政府ノ結締セル郵便御用ノ
 約束ニ係ル現行法ノ欠點ヲ指示シ盛ンニ議院ノ之ニ對
 シテ一層有効ナル監理ヲ施スノ必要ヲ主張ス是ヨリ先
 キデルピ一内閣ノ政權ヲ握ルヤ郵便御用ニ係ル約束ヲ
 結フ毎ニ必ス補助金ハ議院ノ議出ス可キ金額ヲ以テ之
 ヲ支辨ス可キ旨ヲ明言スルノ慣行ヲ誘入ス此慣行ハ郵
 便御用ノ爲メニ費ス可キ資金ニ關シテ新主義ヲ定立セ
 ルニ非スト雖モ明カニ斯ル約束ハ皆テ下院ノ認許ヲ受

シ可キ者ナルヲ認承セリ唯テ下院ハ早シ現存約束ノ
 期限ヲ知ル能ハス且ツ之カ爲メ供度委員會ニ於テ經費
 議決ヲ請求セラル、迄ハ行政府ノ結締セル約束ノ性質
 及ヒ程度ヲ知ル能ハサルカ故下院ハ亦正シク其高貴ナ
 ル職務ヲ執行スルカ爲メニ必要ナル自由ヲ以テ監理權
 ヲ使用スル能ハス加之約束ノ實施ト之カ經費請求トノ
 間ニ於テ行政府ハ巨大ノ金額ヲ費シ若クハ之ヲ費ス可
 キ手續ヲ施スコナシトセズ此際若シ詐偽、誣妄、其他不正
 ナル處置アラハ下院ハ其職權ヲ以テ政府ノ結締セル約
 束ニ關與シ或ハ之ヲ實行スルカ爲メニ要セラレタル金
 額議出ヲ拒ムヲ得可シト雖モ詐偽、誣妄、其他不正ナル處
 置ナキハ之ヲ爲ス可極テ難シ是レ議院ノ監理權ヲシ

郵便及ヒ電信
ニ係ル約束

テ實際公費ノ重要ナル一項目ニ及フ能ハサラシムル者
 ニ非スヤ當時ノ状態ヲ案スルニ行政府ハ毫モ議院ノ有
 功ナル牽制ヲ受ケスシテ永シ國家ヲ羈束シ巨額ノ經費
 ヲ要ス可キ約束ヲ結フヲ得タリ而シテ議院ハ唯タ弊害
 既ニ起ルノ後ニ及ソテ初テ之カ經費支出ヲ拒ムノ權ヲ
 有セシノミ此ノ如キハ我カ憲法ノ主旨ニ抵觸スルヲ辨
 待タス况ソヤ弊害起ルノ時ハ多クハ締約セル執政官
 既ニ其職ヲ去テ他人之ニ代レル時ナルヲヤ然レモ調査
 委員ハ制度變更ニ伴フ可キ困難ヲ熟知セルカ故別ニ變
 更ヲ勸薦セス約束締結ノ事ヲ擧テ依然行政官ニ委任シ
 之ヲシテ其意見ト責任トニ因テ如何ナル約束ニテモ之
 ヲ締結セシム可キ旨ヲ懲通シタリ之ヲ懲通スルト同時

約束ニ對スル
議院ノ管理

ニ調査委員ハ亦海上ノ郵便物遞送ト海外ノ電報通達ト
 ニ係ル新約束ニハ皆ナ下ノ一條ヲ附加ス可キ旨ヲ懲通
 シタリ曰ク此約束ハ下院ノ非斥ヲ受ケスシテ一個月間
 其机上ニ置カレタル後ニ非スニハ効力ナキ者トス但シ
 提出後未ダ一個月ヲ經過セスト雖モ特ニ該院ノ決議ヲ
 以テ認許セラル、此ハ此限ニ非スト
 七月廿四日右ノ通告ヲ決議案ト爲シ他ノ二個ノ決議案ト
 共ニ下院ノ可決ヲ得タリ其一曰ク政府若シ郵便及ヒ電
 信御用ニ係ル約束ヲ結フキハ其理由ヲ説明スル所ノ大藏
 省ノ騰記ヲ添ヘテ成ル可ク速ニ之ヲ下院ニ回附ス可シト
 其二曰ク斯ル約束ニシテ議院ノ議定ヲ要スルキハ私議
 案トシテ之ヲ處置ス可ラス又之カ爲メ公費ノ支出ヲ要ス

可キ取極チ爲スノ權力ハ私ノ議決ヲ以テ之ヲ政府ニ與フ
可ラスト此等ノ決議中政府ノ約束ニ對スル議案ニ係ル箇
條ハ千八百六十一年三月四日下院ノ採用セル議事規則ノ
爲メ不用ニ屬シタル者ノ如シ該規則ハ斯ル事項ハ私議案
ト爲スコトヲ禁セスト雖ヒ徵収委員會長ヲシテ行政官局ト
ノ約束ヲ允許確定若クハ變改ス可キ私議案ハ皆チ其ニ讀
會ニ先テ特ニ之ヲ下院ニ報告セシム下院ノ報告ヲ得ルヤ
必ス之ヲ審案スルカ故之カ爲メ既ニ國家ノ負擔ヲ增加セ
若クハ向後増加セシムスル約束ニ係ル私議案ハ皆チ下院
ノ應當ナル注意ヲ免ルハ能ハス

私議案

東
ガルウェー約

ノ處置ニ基テ成レリ該事件ハ此類ノ處置ニ對スル議院
管理ノ趣旨ヲ説明スルニ足ル可キカ故余輩今ニ左ニ畧記
セシム

一、之カ主理者タル一會社ハ通商貿易ノ用ニ供セン
カ爲メ千八百五十八年ヲ以テ愛蘭ナルガルウェート合衆
國ナルニ對シテトクトノ間ニ汽船航海ノ線路ヲ開ケリ此
計畫ハ頗ル愛蘭人ノ注意ヲ喚起シ諸方ノ名代人ニシテ
執政官ニ謁シ政府ヨリ之ヲ保護スルニ重要ナルヲ申説
タル者少ナカラス是ニ於テ政府ハ種々商議ノ末終ニ該
社充分ニ愛米兩國間ノ郵便御用ヲ務メハ向後七年間年
々七万九千磅ノ助成金ヲ給與ス可キヲ取極メタリ驛
遞局長ハ諸種ノ理由ニ因テ發言セラレタル約束ヲ不可

トスト雖ヒ大藏省ハ專ラ愛蘭ニ關スル貿易上社交上ノ重要ナル考案ヨリ公然之ヲ認許シタリ當時世間ニ一種ノ説アリ在朝黨ハ政治上己レニ利益ヌルカ爲メ此特許ヲ該會社ニ與ヘント欲スル旨ヲ唱フ加之浮説百端之ヲ非難スル者極テ多シ左レハ翌年内閣ノ更替スルヤ新任執政官ハ直チニ委員ヲ命ジテ郵便及ヒ電信御用ニ係ル約束ヲ調査セシメント主張シ下院ノ同意ヲ得テ之ヲ設置スルヲ得タリ然レモ委員ハ該會期中ニカールト約束ヲ調査スルノ暇ナク千八百六十年再ヒ設置セラル、ニ及ンテ直チニ之カ調査ニ着手ス此際約束ハ既ニ實施セラルト雖ヒ助成金ハ議院ノ議定セル金額中ヨリ支給ス可シト云ヘル一條ヲ含有セルカ故下院若シ之ヲ非

東ガ
ルウ
エー
約

認スレハ尙ホ約束ヲ放棄シ得可キ機會ヲ存セリ委員ハ充分事實ヲ調査セル後チ五月二十二日ヲ以テ其意見ヲ報告ス曰ク政府ハ該約束ヲ結フヤ其處置費ニ思插テ極メ多ク日ハ該約束ハ深クカナダノ利益ヲ慮ラヌモテ結締セル者ナリカナダ海船會社ノ如キハ一層低廉ナル助成金ヲ以テ喜ンテ此御用ヲ務ム可シ日シ之ヲ要スルニ該約束ハ全ク不策無先見ニ成レル者ナリ其見ル所此ノ如シト雖ヒ下院ハ尙ホ其意見ニ從テ該約束ヲ有効ナラシムルニ必要ナル資金ノ議出ヲ拒ム可キ權力ヲ有セシカ故委員ハ別ニ薦告ヲ呈セザリキ六月二十六日委員ハ第二ノ報告書ヲ呈シ之ニ一言ヲ加ヘテ曰ク余輩ハガールウエー線路ノ航海ニシテ驛遞局ノ補

助金を得たが爲る不當なる取極き爲る者あり可なり
 とも通知を受たは是に余輩が止むを得ず再七がル
 補助金を係る事項の調査録聞する所以なりト委員ハ
 細カニ該約束ニ係る事項の調査をタリ地現在ノ約束大
 ニ不正な行爲アリ証跡を得能ハザリ故別
 ニ其意見ヲ録聞せし准テ調査せし事實ヲ細大漏チ下
 院ニ報告せ約束ニ可否ハ全ク之ヲ下院ノ判断ニ委ヌル
 事以テ最モ適當ナ措置ト思考せリ下院ハ此報告を得
 別ニ施措大ニ所チカリシ約千八百六十一年七月十六
 日ニ至リ委員ハ爲る不正な行爲ニ關係アリト認めテ
 之タル者ノ一人ナルイルウヤハ請願書ヲ上テ下院議員
 レト成ッノガルウヤハ會社ノ理事者トシテ施セル行爲ヲ訟

東
 カルウエー約

難ス此日レトウハ出席セザリシカ故暫ク請願書ヲ審議
 事延期セリト雖モ全月十九日其再ニ提出セラルルコ
 シテレトウハ訟難ノ根據ナキヲ辨明シ下院ニ向テ其
 調査ヲ求ム此際下院ハ單ニ議員ノ使用ニ供セシカ爲メ
 該請願書ヲ印刷セシム七月二十二日之ヲ撰拔委員附
 ス可シトシ動議起ルヤレトウハ細カニ該書ヲ誤謬ヲ辨
 駁ス下院多數ノ議員ハ皆之カ爲メニ心身ヲ勞スル事
 ナ欲モス動議者モ終ニ其説ヲ引ケザルコトハ決シ
 是ヨリ先キ政府ハカルウエー約束ヲ實行セシト決心シ千
 八百六十年八月九日大藏尙書ヲシテ供度委員會ニ第一
 回補助金六万磅ノ經費案ヲ提出セシム其意蓋シ謂フ撰
 拔委員ハ該約束ヲ非難シタリト雖モ尙ホ其取消ヲ懇

セルニ非ス故ニ毫モ之カ實行ヲ躊躇スルヲ要セスト
 左レハ大藏尙書ハ右ノ動議ヲ提出スルニ方テ撰拔委員
 ノ報告中該約束ヲ非難セル言辭ノ決シテ等閑視ス可ラ
 サルヲ明言シタレハ亦政府ノ之ヲ實行セント欲スル
 所以ヲ説明セリ其言ニ曰ク此類ノ約束ハ單ニ政策上ノ
 考案ニ據テ棄却シ得可キ者ニ非ス下院ノ單ニ斯ル考案
 ニ據テ約束舉行ノ爲メニ要スル經費ヲ拒メルカ如キハ
 余ノ嘗テ聞カセル所ナリ特ニ今回ノ約束ハ結締後既ニ
 一歳有餘ヲ經過セリ今日ニ至テ之カ經費ヲ拒ムハ該會
 社ヲ優待スル所以ニ非サル可シ加之ナラス撰拔委員ノ
 第二報告ニ所謂ル不正ノ取極ヲ爲シタル人物ハ既ニ該
 會社ト關係ナシ前者ノ過誤ヲ以テ全ク咎責ス可キ所ナ

キ現在ノ理事者株主等ヲ罰スルハ不可ナリ假ニ今回ノ
 約束ヲ以テ國家ニ有害ナル者トセヨ下院ノ違約ヲ認許
 シ不便ナル義務ヲ廢棄スルノ先例ヲ確立スルハ其害更
 ラニ甚シキ者アラント動議ハ大ニ攻撃セラルト雖モ終
 ニ大多數ヲ以テ通過ス
 其約束ヲ議院ノ爲メニ認承確定セラル、ヤ該會社ハ運
 滯ナク郵便御用ヲ勤メント盡力シタレハ創始ノ際社務
 未タ整頓セス其企圖ヲ成就スルヲ能ハス數々延期其他
 ノ裕恕ヲ請フテ之ヲ得タルノ後ヲ終ニ驛遞局長ノ爲メ
 ニ約束ヲ廢棄セラル該會社ノ朋友ハ頗ル之ヲ不満足ト
 シ千八百六十一年六月十四日委員ヲ設テ約束廢棄ニ伴
 ヘル情狀ヲ調査セシム可シトノ動議ヲ起ス反對黨中ノ

重立タル議員ハ之ヲ評シテ不當ニ行政府ノ職務ヲ侵犯
 スル者ト云ヘリト雖也執政官ハ勳議ヲ駁撃セシテ委
 員ノ設置ヲ認承ス委員ハ緘密ニ該約束廢棄ノ情狀ヲ調
 査シ七月二十三日ヲ以テ詳細ナル報告書ヲ呈ス書中云
 ヘルアリ曰ク當時該會社ハ約束ヲ履行スル能ハザリシ
 カ故驛遞局長ノ之ヲ中絶セシメタルハ措置ノ其當ヲ得
 タル者ナリ然レド該會社ハ遠カラヌシテ充分ノ船舶ヲ
 備具スルニ至ル可シ故ニ再ヒ愛蘭ノ西部ト米國トノ間
 ニ郵便線路ヲ開クヲ可トスルニ至ラハガルウエイ會社ハ
 政府ノ優待ヲ受ク可キ價直アルカ如シト政府モ委員ノ
 説ニ同意セシ者ト見ヘロイド、バトメルストンハ八月六
 日下院ニ告クルニ該會社ニシテ苟モ約束ヲ履行シ得可

キ確乎タル見込アルニ至レハ政府ハ必ス之ヲ等閑視セ
 ザル可キ旨ヲ以テセリ氏ハ千八百六十二年六月二十四
 日再ヒ此言ヲ演ヘ千八百六十三年二月九日ヲ以テ三
 ヒ之ヲ演フ是ニ於テ乎千八百六十三年三月二十日ハク
 スターハ下院ハガルウエイ會社ニ補助金ヲ給與スルノ意
 ナキ旨ヲ明言セル決議案ヲ提出シ且ツ其之ヲ提出セル
 所以ヲ説明シテ曰ク該約束ハ毫モ之ヲ再結スルノ要用
 ナク他日再ヒ之ヲ結締スルコトアラハ其因テ起ル所必ス
 腐敗セル政治上ノ意趣ニ在ラントロイド、バトメルスト
 ンハ此非難ヲ排撃シテ政府再ヒ該會社ト約束ヲ結締ス
 ルモ決シテ不可ナキ所以ヲ辨論セリ勳議ハ終ニ大多數
 ナリテ否決セラル五月四日政府ハ公然該會社ニ告クル

海底電線

ニ舊約束ヲ再結スルノ意アルコトヲ以テシ七月二十一日
 大藏尙書ビールノ發議ニ因リ下院ハ異議ナク舊約束ヲ
 認許ス可キ旨ヲ決議ス
 千八百六十年ヲ以テ設置セラレタル撰拔委員ハ先ツ郵
 便遞送ニ係ル約束ヲ調査シ而ル后チ電線ニ係ル事項ヲ
 調査シ以テ第三報告書ヲ呈ス委員ハ行政府ノ之ト錢貨
 上ノ取極ヲ爲セル諸方ノ海底電線會社ノ狀態ヲ略記ス
 千八百五十九年ヲ以テ結社シ爾後非常ノ惡名ヲ得タル
 紅海及ヒ印度電線會社ノ如キモ亦其一ニシテ委員ハ政
 府ノ因テ以テ之ヲ補助スルニ至レル所以ヲ説明セリ此
 電線架設ハ固ト政治上ノ考案ヨリ起レル者ニシテ利益
 ノ見込極テ少ナカリキ是レ政府チシテ八十万磅ノ資本

紅海及ヒ印度
電線

ニ對シ五十年間四銖半ノ利子ヲ保證スルニ至ラシメタ
 ル所以ナリ其有心無心ハ判然タラサレハ不幸ニシテ政
 府ハ成功ヲ以テ保證ノ原因ト爲サス單ニ四銖半ノ利子
 ヲ保證セタリ然レハ此約定ヲ確定實行スルニ先テ議院
 ノ議決ヲ經テ取極ヲ爲セルカ故政府ハ議
 案ヲ提出シテ議院ノ可決ヲ得タリ政府ノ之ヲ上院ニ提
 出スルヤ附録トシテ約定ノ寫本ヲ下附ス事雖也之ヲ下
 院ニ提出スルニ方テハ毫モ之カ爲ニ負擔ス可キ錢貨上
 ノ義務ノ性質ト程度トヲ示サ、リキ故ニ下院議員ハ約
 定ノ當否并ニ效能ト有無ヲ判斷スル能ハス單ニ私議案
 トシテ該電線會社ヲ補助スルコトヲ認許ス然ルニ該電線
 ハ架設後忽チニシテ其働キヲ止メ百方救治ノ術ヲ施ス

ト雖也毫モ其効ナシ此結果ヲ觀察スルニ方リ委員ハ海底電線ノ築造法ヲ論述セズテ唯々約束其者ヲ調査セリ斯ル約束ヲ結ブニ方テ豫メ定ム可キ箇條ハ委員之ヲ指示セサリシト雖也尙ホ議院ヲシテ充分ニ此類ノ約定ニ注意シ又管理セシメント欲セハ私議案トシテ之ヲ取扱フ可ラサル旨ヲ指示シタリ加之ナラズ委員ハ配當若クハ利子ヲ保護スルノ權力ヲ如何ナル場合ニ於テモ私議案ヲ以テ政府ニ與ラ可ラズトテ説ヲ述ヘタリ爾後該電線ハ續テ働キヲ爲ス大世間或ハ斯ル場合ニ於テモ政府ハ其株主ニ對シテ四銖半ノ利子ヲ拂ハサル可ラサルヤ否ヤヲ疑フ者アリキ然レモ社會公衆ハ政府ノ利子保証ヲ認テ事業ノ成否ニ關セサル約束ト爲セリ政府ハ管

ク之ヲ熟知セルコトヲ以テ併セテ其面目心ニ刺衝セラレヨリ一議案ヲ提出シテ紅海及ヒ印度電線會社ニ係ル約束書中ノ保証ハ必スシモ該電線ノ健全ナル働キヲ爲スヲ期シテ之ヲ與ヘタル者ハ非サル旨ヲ明言セリ法官ハ斯ク成功セザル上ハ政府モ株主ニ對シテ全ク利子支給ノ義務ヲ免カルトノ意見ヲ陳ヘタレモ執政官ハ其信用ヲ損セヨリテ慮テ該議案ヲ主張シ終ニ上下兩院ヲシテ之ヲ通過セシムルヲ得ヨリ

本案提出後下院ハ委員ノ廣告ニ從テ議事規則ヲ追加シ以テ私議案取扱ノ法途ヲ一定ス是レ余輩ノ既ニ記述セル所ニシテ其目的蓋シ議院ヲシテ政府ト一會社若クハ一私人トノ約束ヲ認許シ確定シ改更セシムルニ在リ

下院ハ悉皆ノ
供度ヲ拒絕ス
可キ權理ヲ有
ス

上記ノ事例ハ以テ充分ニ下院カ公金許與ニ對シテ憲法上
有効ナル管理權ヲ使用スルコトヲ說明スルニ足レリ然レモ
右ノ事例ハ唯テ發議セラレタル經費中ノ或ル項目ヲ拒絕
スルノ權力ナルコトヲ示セルノミ下院ハ此他尙ホ政府ノ請
求セル供度ヲ悉ク拒絕スルノ權理ヲ有ス議院政治法ノ誘
入前ニ在テハ下院ハ專横ナル君主ヨリ疾苦ノ救回ヲ強取
セシカ爲メ數々此恐ル可キ攻撃ノ器械ヲ用弁タリ今ヤ復
タ斯ル極端ノ處置ニ依頼スルノ要用ナク嘗テ君主ヲ悚然
タラシメタル此利器ハ銷ヲ帶テ憲法軍ノ倉庫ニ在リ千七
百八十一年トイハス、ビッドハ大宰相ロイドノ一スヨリ米國
戰ニ係ル誓約ヲ迫取セシカ爲メ數日間供度ノ許與ヲ延期
セシコトヲ發言ス革命以來此ノ如キ發言ヲ爲シタル者ナキ

供度議案中止
ノ發言

ハ當時ノ人皆ナ之ヲ認承セ下院ハ大多數ニ因リ右ノ發言
ヲ否決シテ供度委員會ヲ開ケリ同會期ニ際シロイド、ロッキ
ンガムハ上院ニ於テアドミラル、ケムペンフェルド退軍ノ原
因ニ關スル説明ヲ得ル迄地租議案ノ第三讀會ヲ中止セン
コトヲ發議スト雖モ可否決ヲ取ルニ至ラザリキ
千八百六十四年二月二十二日セルナル、チスボールンハス
チルスウガ、ホルズテイオン事件ニ係ル文書提出ノ延滞ヲ不
可トシ政府ノ之ヲ下院ニ提出スル迄三週間海軍經費ノ審
案ヲ中止セシコトヲ發議ス反對黨ノ首領モ氏ト同シク文書
提出ノ延滞ヲ不可トスト雖モ未ダ斯ル極端ノ處置ヲ主張
セント欲スルニ至ラザリキ動議ハ終ニ否決セラレ
下院カ供度延期ノ權力ヲ使用シタルハ唯ダ千七百八十四

年ノ一例アルノミ當時下院ハ國王ノ妄ニ憲法違背ノ勢力ヲ弄スルヲ憤テ此措置ヲ施スニ至レリト雖モ其需用切迫セルカ爲メ中途ニシテ議決ヲ取消シ爾後之ヲ再ヒセルコトナシ下院ノ責任ハ頗ル大ニシテ復タ此ノ如キ險策ヲ施ス可ラサルニ至レリ國家ノ設置ト信用トハ安危ヲ下院ノ經費支出ニ懸ク決シテ輕々之ヲ紛亂セザルヘキニ非ス況ヤ下院若シ國家ノ政策ヲ不可トセハ之ヲ變更スル自ラ其法アリ行政府ノ處置ヲ憤ルヨリ止ムヲ得ス此險策ヲ採用スルニ至ルノ理由ナキヲヤ

供度委員會ノ決議
 供度委員會ノ決議ハ之ヲ下院ニ報告ス下院ハ報告ヲ受テ或ハ之ヲ可決シ或ハ之ヲ否決シ或ハ之ヲ再ヒ該會ノ決議ニ附ス下院若シ報告ヲ審案シテ供度委員會ノ許與セル金

額ヲ増加セサル可ラスト思考セハ其増加セント欲スル決議額ヲ再ヒ該會ノ審議ニ附ス下院ハ再議ニ附セスシテ供度委員會ノ決議額ヲ減スルコトヲ得可シ再議ニ附セスシテ之ヲ増スコトヲ得大蓋シ豫メ該會ノ認許ヲ經サル負擔ヲ賦課スルハ憲法上ノ慣行ノ禁スル所ナレハナリ

徵収委員會ノ決議
 下院既ニ經費額ヲ認許シ掲記セラレタル事項ニ對シテ之ヲ政府ニ許與スルコトヲ命スト雖モ此等ノ決議書ハ政府ヲシテ併合資金ヨリ各項ノ經費ヲ支出スルコトヲ得セシムルニ非ス政府ヲシテ斯ル權力ヲ得セシムル迄ニハ尙ホ一段ノ順序ヲ經過セサル可ラスト下院既ニ供度委員會ノ決議ヲ認許スレハ更ラニ之ヲ徵収委員會ニ附シ該會ハ經費徵収ノ方法ヲ審案シテ其決議ヲ下院ニ報告ス然ル后之ヲ議

案ニ編入シ上下兩院ノ可決ヲ經テ政府ハ初テ經費ヲ支辨
 ス可キ金額ヲ併合資金ヨリ支出シ併合資金若シ不足ヲ告
 シレハ^{△△△△△△△△}「^{△△△△△△△△}」ヲ發行スルヲ得可シ供度委員會
 ノ決議ハ經費ヲ認許シ徵収委員會ノ決議ハ該經費ニ應ズ
 可キ資金ヲ準備ス之ヲ準備スルノ方法左ノ如シ
 會期ノ始ニ於テ供度委員會ハ經費豫算ノ大綱ニ係ル決議
 ヲ報告シ下院ノ此報告ヲ受クルヤ直ニ徵収委員會ヲ開
 テ併合資金中ヨリ必要ナル經費ヲ支出ス可キ旨ノ決議ヲ
 爲ス此許與ハ決シテ供度委員會ノ決議額ニ超ヘサルヲ法
 トス右ノ決議ニ基テ議案ヲ編制シ上下兩院之ヲ通過スル
 ノ後テ國王ノ准許ヲ請フ是ニ於テ平大藏省ハ始テ下院ノ
 供度委員會ニ於テ決議セラレタル經費ニ應ゼカ爲メ併

一キスレカ

經費議定ニ先
ツツノ支出

合資金ノ支出ヲ命スルノ權力ヲ得此措置ハ憲法上ノ結果
 ハ國王ト上院トガ徵収委員會ノ決議ニ同意スル迄ハ能シ
 下院ノ供度委員會ニ於ケル決議ヲシテ其効力ヲ有セザラ
 シム會期ノ始ニ於テ徵収委員會ハ該年度中ニ要ス可キ經
 費ノ大体ヲ決議シ議院ハ其會期ヲ終ニ於テ通過スル所ノ
 適用議案中ニ編入セラレシテ期待シテ漸次之ガ支出ヲ
 許可ス是レ議院ガ全体ノ經費適用法ヲ議定スルニ先テ豫
 メ公金支出ヲ許可スルノ最良便法ト爲ス所ノ者ナリ會期
 中ニ決議セル全体ノ供度ハ會期ノ終ニ際シ適用案ヲ議ス
 ルニ方テ徵収委員會之ヲ許與ス此ノ如クシテ下院ハ會期
 ノ初ニ於テ該年度全体ノ供度ヲ議定スト雖モ尙ホ徵収委
 員會ノ許與ヲ公務執行ノ爲メニ必要ト思考スル丈ケノ金

租稅

額に限り以テ憲法上執政官ヲ牽制スルヲ得可シ且ツ下院ハ常ニ一年ヲ維持スル丈クノ金額ヲ限テ之ヲ許與スルカ故執政官ノ恣ニ之ヲ解散若シハ休會スルヲ防クヲ得租稅ハ皆ナ必スシモ徵收委員會ニ於テ發言セラルビニ非ス其徵收委員會ニ於テ發言セラル、者ト然ラサル者トテ豫メ區別スルヲ甚ク難シト雖目下ノ急要ニ應ス可キ租稅ハ徵收委員會ニ於テ之ヲ審議シ直接ニ收入増加ノ目的ヲ有セサル財政上ノ整理ト永久稅ヲ改更トハ別ニ下院全數ノ委員會ヲ開テ之ヲ審議ス是レ通常ノ例規ナリ故ニ在朝議員ハ政府ノ發議ニ對スル修正説トシテ該年度ノ經費ヲ擧ル可キ稅法案ヲ提出スルヲ得可シト雖比廣ク租稅ニ關スル勸議ハ之ヲ徵收委員會ニ於テ起スヲ得大例ハ

動產不動産

毎年稅及ヒ永久稅

動產不動産ノ繼續稅ヲ平均セヨト欲スル勸議若クハ公債ノ増加ヲ不可トスル修正説ニ如シテ、提出セラルル租稅ニ二種アリ毎年議定スル者ト一トハ議定シテ永久之ヲ賦課スル者ト是レナリ毎年稅ハ財政報告書中ニ於ケル出納院長ノ薦告ニ基テ年々之ヲ議定シ永久稅ハ特ニ議院ノ審議ヲ經テ之ヲ決定ス從來年々ニ議定セル者ト雖比之ヲ永久稅ト爲スヲ得可シ蓋シ年々下院ノ議定ヲ經テ始テ徵收スルヲ得可キ大額ノ租稅ヲ保存スルハ憲法上ノ慣行ナリ故ニ政府ハ絶ニ其意見ニ從テ多少ノ永久稅ヲ發言スルヲ得ト雖比痛ク毎年稅ヲ減シテ憲法上ノ慣行ニ違背スルカ如キコトナキ要ス數々現存ノ賦課額ヲ變更スレハ國家商業上ノ利益ハ爲メニ安全ナル能ハスルヲ永久稅

毎年議定スル者トシテ

悉皆ノ理財上
ノ疑問ヲ審案
スルカ爲メコ
與ヘラル可キ
時日

ハ政府ノ信用ヲ鞏固ナラシムルノ効アリ是レ政府ヲシテ
議院ニ請求シ以テ租税ヨリ生ズル収入ノ大額ヲ永久賦課
ト爲スヲ得セシムル所以ナリ
政府ノ下附スル議案ハ其収税ニ係ルト經費ニ係ルトナ
ハス之カ審議ニ充分ノ時日ヲ與ヘラルハ下院ノ重要ナ
ル特權ナリ徴収委員會ノ決議ハ急迫ノ場合ニ非ズハ其
委員會ヲ通過セル日ニ於テ之ヲ下院ニ報告セズ翌日之ヲ
報告シテ下院ノ同意ヲ求ムルヲ常法ニ下院ハ同意ヲ請求
セラルト雖モ必スモ之ニ同意スルヲ要セス或ハ之ヲ否
決シ或ハ之ヲ再ヒ該會ニ附スルヲ得可シ下院若シ同意ス
ルハ之ニ効力ヲ與ヘシカ爲メ議案ノ提出ヲ命シ政府ハ
成ル可ク速ニ斯ル議案ヲ通過セシムル欲シテ百方盡力ス

政府ハ急速ニ
新税率ヲ實行
ス

租税ノ賦課若シハ變更ニ係ル議案ニ未ダ上下兩院ヲ通過
セサルモ徴収委員會既ニ其決議ヲ報告シテ下院之ニ同意
スレハ政府ハ自ラ責任ヲ負擔シテ直ニ該決議ニ効力ヲ
與フルヲ常トス則チ効力ヲ與フト雖モ議院ハ之カ爲メ該
決議案ヲ修正若クハ廢棄スルヲ見込テ以テ他日再ヒ之ヲ
討議スルノ權理ヲ妨害セラルベシ非ス故ニ政府ハ議院最
後ノ決斷ヲ待タズシテ決議書ニ舉示セテタル期日若ク
ハ議院ノ之ヲ通過セル期日ヨリ新稅ヲ徴収スルヲ命ス
何トナレハ決議書ハ租税ヲ賦課スル所ノ議案ヲ基本ニシ
テ該議案ハ上下兩院ノ同意ヲ得テ法律ト爲ル可キヲ疑フ
容レサレハナリ然レハ上下兩院若シ之ニ同意セサレハ該
決議書ハ無効不用ト爲リ政府ガ其兩院ノ同意ヲ得